

ISSN 2186-0645

富山市埋蔵文化財調査報告107

# 富山市明神山遺跡発掘調査報告書

—呉羽丘陵フットパス連絡橋整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告—

2022

富山市教育委員会

ISSN 2186-0645

富山市埋蔵文化財調査報告107

# 富山市明神山遺跡発掘調査報告書

—呉羽丘陵フットパス連絡橋整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告—

2022

富山市教育委員会



調査前遠景（西から）



調査区遠景（東から）



A区調査前状況（北から）



A区全景（東から）



A区全景（北東から）



拡張後A区全景（北東から）



拡張後A区全景（南西から）



主要出土遺物

## 例　　言

- 1 本書は、令和3年度に実施した富山市茶屋町・寺町地内における明神山遺跡（近世北陸道路）の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、呉羽丘陵フットパス連絡橋整備工事に伴い実施した。
- 3 調査は、発掘調査区（A区）と工事立会区（B区）にわかれ。A区の発掘調査は、富山市公園緑地課から発注し、有限会社毛野考古学研究所富山支所が、富山市埋蔵文化財センター監理のもと実施した。B区の工事立会は、埋蔵文化財センターが行った。
- 4 調査の概要是次の通りである。

遺跡所在地	富山市茶屋町・寺町地内
調査面積	[A区] 207.56 m <sup>2</sup> , [B区] 62 m <sup>2</sup>
発掘作業期間	[A区] 令和3年5月6日～6月30日 [B区] 令和3年7月6日～7月16日
整理作業期間	[A区] 令和3年7月1日～令和4年3月31日 [B区] 令和3年7月19日～令和4年3月31日
監理担当者	野垣好史（富山市教育委員会埋蔵文化財センター 主査学芸員）
調査担当者	[A区] 常深 尚（有限会社毛野考古学研究所富山支所） [B区] 野垣好史・納屋内高史（富山市教育委員会埋蔵文化財センター）

- 5 本書の執筆は、第3章第1～4節のうちA区分を常深が行い、その他を野垣が行った。文責は文末に示した。編集は常深が行った。
- 6 自然科学分析は、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託し、第4章に成果を掲載した。
- 7 現地調査から報告書作成にあたり、次の方々よりご指導・ご協力をいただいた。記して謝意を表する（五十音順・敬称略）。

上野幸夫	浦畠奈津子	新宅輝久	田上和彦	武内淑子	戸谷邦隆	中本八徳	西井能儀
萩原大輔	藤田邦雄	古川知明	増渕佳子	町田賢一			
呉羽地区ふるさとづくり推進協議会 呉羽山観光協会 富山市郷土博物館							

- 8 出土遺物・原図・写真は、富山市教育委員会埋蔵文化財センターが保管している。

## 凡　　例

- 1 本書で用いた座標は世界測地系第VII系である。方位は座標北、水平水準は海拔高である。
- 2 遺構は、種別を示す以下の記号と番号の組合せで標記した。番号は遺構種別にかかわらず、発掘調査区（A区）は01から、工事立会区（B区）は11からの通し番号を付した。

SD（溝）	SX（石列遺構）
-------	----------
- 3 土層・遺物観察表の色調は『標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）に準拠した。
- 4 挿図中の網掛けは次のとおりである。

遺構	地山	路面の砂利敷	遺物	炭化物	上絵	油煙
----	----	--------	----	-----	----	----
- 5 参考文献は第5章の後にまとめた。ただし、第4章の自然科学分析は章末に掲載した。
- 6 本文中の参考文献の表記について、一部を次のように略した。

教育委員会→教委	（公財）富山県文化振興財團埋蔵文化財調査事務所→富山県財團
----------	-------------------------------
- 7 第4図は国土地理院地形図、第45図は富山市基本図をもとに作成した。
- 8 卷頭図版2上段・図版2上段の写真は、古川知明氏より提供頂いた。

# 目 次

巻頭図版

例言・凡例

第1章 調査の経過 .....	1
第1節 調査にいたる経緯 .....	1
第2節 発掘作業及び整理等作業の経過 .....	3
第2章 遺跡の位置と環境 .....	4
第1節 地理的環境 .....	4
第2節 歴史的環境 .....	6
第3節 明神山遺跡における近世の歴史的環境 .....	8
第3章 調査の方法と成果 .....	10
第1節 調査の方法 .....	10
第2節 基本層序 .....	11
第3節 遺構 .....	11
1. 概要 .....	11
2. A区の遺構 .....	12
3. B区の遺構 .....	26
第4節 遺物 .....	29
1. 概要 .....	29
2. A区の出土遺物 .....	29
3. B区の出土遺物 .....	48
第5節 現況遊歩道の測量 .....	59
第4章 自然科学分析 .....	62
第1節 花粉分析 .....	62
第5章 総 括 .....	66
第1節 道路の変遷と特徴 .....	66
第2節 明神山・五時谷における近世北陸道と周辺遺構 .....	70
引用・参考文献 .....	74
写真図版	
報告書抄録	

## 図 目 次

第1図 調査位置図	2	第25図 A区出土遺物(流土下層 肥前(3))	35
第2図 明神山遺跡位置図	4	第26図 A区出土遺物(流土下層 潰戸美濃(1))	36
第3図 富山平野の地形分類図	5	第27図 A区出土遺物(流土下層 潰戸美濃(2))	37
第4図 明神山遺跡周辺の遺跡	7	第28図 A区出土遺物(流土下層 越中瀬戸・越中丸山)	39
第5図 明神山・五時谷付近の絵図	9	第29図 A区出土遺物(流土下層 小杉)	41
第6図 表土縮削状況	10	第30図 A区出土遺物(流土下層 京信楽・在地・その他)	42
第7図 調査区全体平面図	13・14	第31図 A区出土遺物(流土下層 瓦)	43
第8図 A区上層遺構図	15	第32図 A区出土遺物(流土上層・表土ほか 肥前)	44
第9図 A区上層遺物分布図	16	第33図 A区出土遺物(流土上層・表土ほか 潰戸美濃・ 越中瀬戸・越中丸山)	45
第10図 A区中層遺構図	18		
第11図 A区下層遺構図	19	第34図 A区出土遺物(流土上層・表土ほか 美濃焼・眠平鏡・ 在地・その他)	46
第12図 A区SX02遺構図	20	第35図 B区出土遺物(1)	48
第13図 A区断面図(1)	21	第36図 B区出土遺物(2)	49
第14図 A区断面図(2)	22	第37図 B区出土遺物(3)	50
第15図 A区断面図(3)	23	第38図 現況歩道縱横断図(1)	59
第16図 A区断面図(4)	24	第39図 現況歩道縱横断図(2)	60
第17図 A区断面図(5)	25	第40図 現況歩道縱横断図(3)	61
第18図 B区平面図	27	第41図 花粉化石群集	64
第19図 B区断面図	28	第42図 花粉化石	65
第20図 A区出土遺物(SD01)	30	第43図 路面の砂利の寸法	66
第21図 A区出土遺物(SD01・03・04・06・08・SX02)	31	第44図 道路の変遷	67
第22図 A区出土遺物(道路面・造成土)	32		
第23図 A区出土遺物(流土下層 肥前(1))	33	第45図 近世後期における明神山・五時谷の復元案	73
第24図 A区出土遺物(流土下層 肥前(2))	34		

## 表 目 次

第1表 A区遺物観察表(1)	51	第7表 A区遺物観察表(7)	57
第2表 A区遺物観察表(2)	52	第8表 A区遺物観察表(8)	58
第3表 A区遺物観察表(3)	53	第9表 B区遺物観察表	58
第4表 A区遺物観察表(4)	54	第10表 分析試料、分析項目一覧	62
第5表 A区遺物観察表(5)	55	第11表 花粉分析結果	63
第6表 A区遺物観察表(6)	56		

# 図版目次

卷頭図版 1 調査前遠景（西から）	図版14 A区遺物(1) SD01 出土遺物
調査区遠景（東から）	図版15 A区遺物(2) SX02, SD03・04・06・08、 道路面・造成土出土遺物
卷頭図版 2 A区調査前状況（北から）	図版16 A区遺物(3) 流土下層出土遺物
A区全景（東から）	図版17 A区遺物(4) 流土下層出土遺物
卷頭図版 3 A区全景（北東から）	図版18 A区遺物(5) 流土下層出土遺物
拡張後 A区全景（北東から）	図版19 A区遺物(6) 流土下層出土遺物
拡張後 A区全景（南西から）	図版20 A区遺物(7) 流土下層出土遺物
卷頭図版 4 主要出土遺物	図版21 A区遺物(8) 流土下層出土遺物
図版 1 A区遺構(1) 調査前（南から）	図版22 A区遺物(9) 流土上層・表土ほか出土遺物
調査前（南から）	図版23 A区遺物(10) 流土上層・表土ほか出土遺物
図版 2 A区遺構(2) 調査前状況（北から）	図版24 A区遺物(11) 文字資料(1)
調査前状況（南から）	図版25 A区遺物(12) 文字資料(2)
図版 3 A区遺構(3) 調査区遠景（北西から）	図版26 A区遺物(13) 梁瓦・鬼瓦
調査区遠景（南東から）	図版27 A区遺物(14) 軒桟瓦、土製品、石製品、 金属製品
図版 4 A区遺構(4) 調査区全景（北東から）	図版28 B区遺物
調査区全景（西から）	
図版 5 A区遺構(5) 調査区全景（北から）	
SD01 北部（北東から）	
SD06・07（北東から）	
図版 6 A区遺構(6) 砂利敷塗出状況（北東から）	
SD01 周辺砂利敷塗出状況（北東から）	
SD01・06 周辺砂利敷塗出状況（北から）	
図版 7 A区遺構(7) 調査区北部検出遺構（南から）	
調査区南部検出遺構（南から）	
図版 8 A区遺構(8) 調査区南部検出遺構（SD04・01・06、SX02） (北東から)	
SX02 石列検出状況（南東から）	
図版 9 A区遺構(9) 調査区北壁断面（南西から）	
調査区西壁断面（調査区拡張後・東から）	
調査区南壁断面（調査区拡張前・北東から）	
図版10 A区遺構(10) 断割断面（上から断割6 北壁西側・断割6 北 壁東側・断割8 北壁・断割9 北壁、南から）	
図版11 A区遺構(11) 断割4 北壁断面（南東から）	
下層路面の砂利敷塗出状況（断割12、東から）	
図版12 B区遺構(1) 調査区全景（北西から）	
調査区全景（南東から）	
図版13 B区遺構(2) SD11 断面（南から）	
SD12（南東から）	
近代道路側溝 SD15・14（南から）	
調査前状況（南から）	
北壁断面（南から）	

# 第1章 調査の経過

## 第1節 調査にいたる経緯

**原因工事の経緯** 呉羽丘陵は、南部に広がる射水丘陵から北東方向に細長く突き出て、富山県を東西に二分している。自然・歴史・文化遺産豊かなこの丘陵には、尾根に沿って遊歩道が縱走している。富山市ではこれを「吳羽丘陵フットパス」と位置づけ、散策路や周辺施設の整備を行って、利用の普及及促進に取り組んでいる。

フットパスは、南の富山市杉谷の御鷹台から北の富山市長岡新付近までの間に4つのルートがあり、その全長は延べ約15kmに及ぶが、途中、主要地方道富山高岡線（旧国道8号線）で分断され、連たん性・連続性が阻害されているという課題があった。このため、平成31年から学識経験者や地元関係者による検討委員会を発足させ検討を進めた結果、分断地点を橋でつなぐこととした。工事は、長さ124mのつり橋形式の歩道橋整備が計画され、令和2～4年度にかけて実施することとなった。

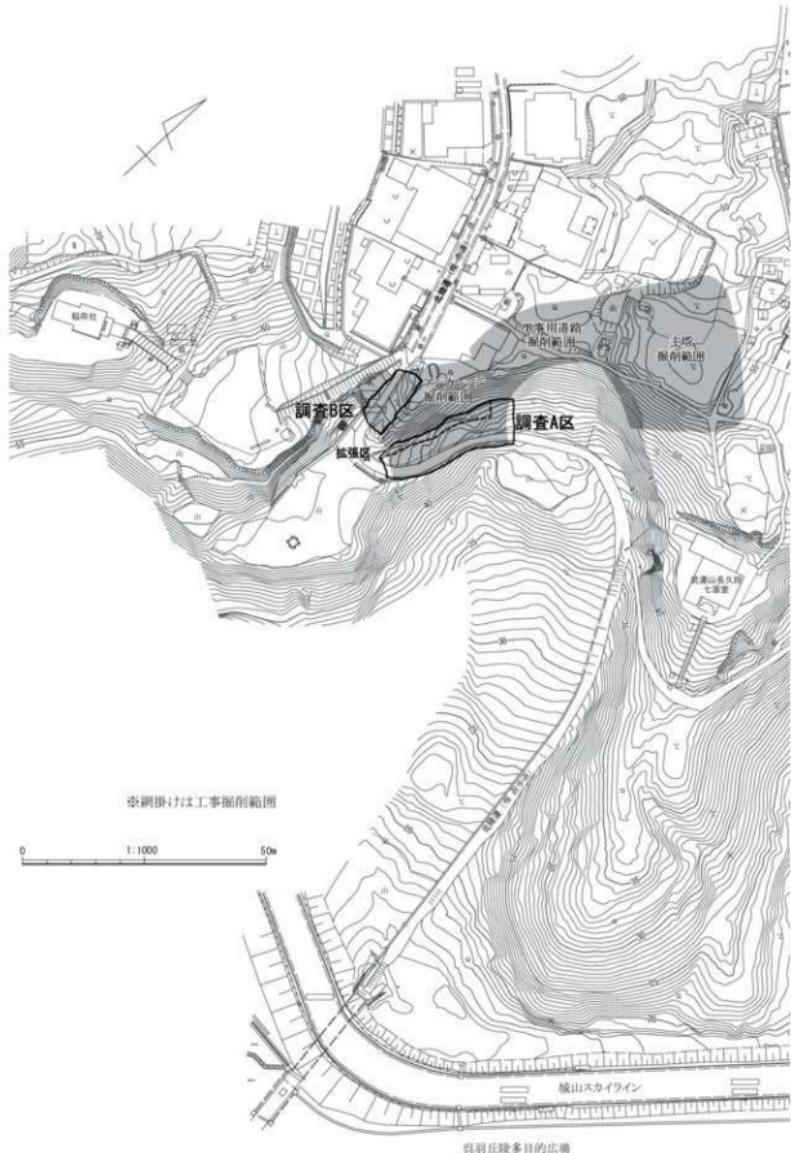
**埋蔵文化財調査の経過** 工事計画地のうち橋梁南側の丘陵上に埋蔵文化財包蔵地があることから、計画がおおよそ固まった令和元年5月から9月にかけて公園緑地課と埋蔵文化財の取り扱いについて協議を行った。主塔部分が、埋蔵文化財包蔵地「茶屋町浦山古墳群」に該当しており、事前に試掘調査を実施することとした。また、この時点では包蔵地に含まれていなかったものの、アンカレッジ工事範囲も包蔵地の隣接地であった。この範囲は近世北陸道の峠道（現在は遊歩道）に当たっており、合わせて試掘調査を行うこととした。

試掘調査は、まず令和元年11月5日に主塔工事範囲の一部37m<sup>2</sup>を対象に実施した。調査当時は台状の高まりとなっており、過去に送電鉄塔が建っていた地点である。試掘の結果、鉄塔建設による削平があったとみられ、遺跡は確認されなかった。その後、令和2年5月18日～29日にかけて、①主塔の残る工事範囲、②アンカレッジ工事範囲のうち近世北陸道（現在の遊歩道）部分など、合わせて890m<sup>2</sup>の試掘調査を実施した。①については、前年11月5日の試掘と同様の状況で、遺跡は確認されなかった。②の試掘対象地のうち東側（調査A区部分）では、現遊歩道面から20～30cm下に近世の道路面が残っていることを確認した。試掘対象地西側（調査B区部分）では、地山直上まで近代瓦を含む層があり、近代以降に変更を被っていると判断したものの、近世路面が一部残存している可能性も考慮された。この結果をもとに公園緑地課と協議した結果、A・B区いずれも遺跡は保護できないことから、A区は発掘調査、B区は近世路面が残存している可能性を考慮し、工事立会を実施することとした。

試掘により、近世路面が残存していることが判明したため、遺跡範囲を遊歩道となっている近世北陸道の峠道と、分布調査等で確認されていた周辺の近世遺構を含めるかたちに拡大するとともに、西側に所在していた「茶屋町表山古墳群」と統合した。また、遺跡名称を近世に呼ばれていた山の名にちなみ「明神山遺跡」（市No.2010168）に改称した。

令和3年4月21・22日にも、主塔の工事拡張範囲と主塔にいたる工事用道路の切り通し部分、計755m<sup>2</sup>を対象に試掘調査を実施したが、遺跡は確認されなかった。

**試掘調査対象地以外の遺跡保護** 工事箇所は丘陵の斜面にあたり、麓からの工事用道路の確保と遺跡の保護措置の調整も懸案であった。工事用道路は、丘陵南麓から現在の遊歩道（近世北陸道）とほぼ重複するルートで敷設する計画であったことから、遊歩道面の削平を伴う場合は事前に試掘調



第1図 調査位置図

査を実施することとしていた。公園緑地課からは最終的に、6m 前後の盛土を行って仮設道路を造り、工事後に盛土を撤去する計画が示された。これを受けて工事用仮設道路は盛土保護による慎重工事（一部工事立会）とした。ただし、現況の遊歩道の記録のため、およそ 10m 間隔で道の横断図と、麓から峠までの縦断図を作成することとした（第3章第5節参照）。

**文化財保護法の手続き** 文化財保護法第94条第1項に基づく埋蔵文化財発掘の通知は、令和3年4月28日に提出され、4月30日に富山県教育委員会へ副申した。また、文化財保護法第99条第1項に基づく埋蔵文化財発掘の報告は、令和3年5月13日に富山県教育委員会へ提出した。

## 第2節 発掘作業及び整理等作業の経過

**発掘作業** A区の発掘作業は有限会社毛野考古学研究所に委託した。B区は、A区の調査完了後、埋蔵文化財センター職員が工事掘削時に立会を行った。

調査は、令和3年5月6日から現況遊歩道の横断図・縦断図の作成から開始した。

A区の発掘作業は、当初 149 m<sup>2</sup>の面積で開始した。5月10日からバックホウによる表土掘削を行い、表土下 30 cm 前後で黄褐色土の路面が面的に広がることを確認した。また、調査区西側（山側）に堆積する厚い流土層に多量の近世陶磁器・瓦等が混入していた。表土掘削に合わせ、道路面を横断する断割りを 3ヶ所に入れた。3ヶ所のうち 2ヶ所の断割りは、前年に行った試掘トレンチを掘り返すかたちで設定した。19日まで表土掘削を行い、同日からは人力による遺構検出を開始した。道路側溝や、南西部で石列を検出したほか、路面上で部分的に砂利敷きを確認した。5月31日からは遺構掘削を開始した。東側（谷側）の 1/3 程は、近・現代遺物が混入し、搅乱を受けていることがわかった。6月12日にはラジコンヘリコプターによる空中写真撮影と全景写真撮影を行った。

上記の作業中、西側（山側）の調査区外に遺構が広がることが明らかになり、また上部からの流土にも多量の陶磁器が含まれていたことから、調査範囲を拡張する必要が生じた。公園緑地課と協議のうえ、58.56 m<sup>2</sup>の調査範囲の拡張を行うこととし、6月16日から拡張区の表土掘削、18日からは遺構検出を開始した。遺構検出の結果、新たに溝 3条を確認した。22日からは拡張区の遺構掘削を開始し、25日に完了、翌 26 日には拡張区の空中写真と全景写真を撮影した。なお、調査の最終盤に、調査していた路面の下に、下層道路があることが判明した。断割トレンチを入れたところ、砂利敷を伴う路面が検出され、調査区中央から北に向かい上層より急勾配で下っていく状況を確認した。以上をもって A区の調査を 6月30日に完了した。

7月6日からは、B区 62 m<sup>2</sup>の工事立会を実施した。バックホウにより表土を除去したところ、試掘結果どおり地山直上まで近代遺物が及び、近代以降に造成されていることを確認したいっぽう、調査区の両端に道路側溝を検出した。試掘調査の際はトレンチから外れ、確認できていなかった遺構である。このため同日から遺構検出、7日からは遺構掘削を行った。12日までに遺構掘削を終えた。平面測量はトータルステーションで行い、断面図は手測りにより行った。7月15日に完掘写真の撮影、16日に補足測量を行い、調査を完了した。

**整理作業** 整理作業は発掘作業完了後、ただちに取り掛かり、A区は毛野考古学研究所、B区は埋蔵文化財センターが実施した。なお、A区の自然科学分析と金属製品の保存処理はパリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。これらの作業と併行して原稿作成を行い、令和4年3月31日に本書を刊行した。  
(野垣)

## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

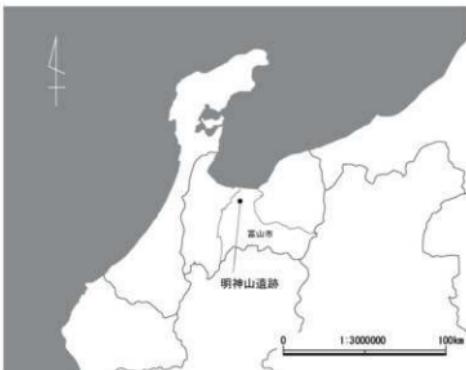
富山市は、平成17年（2005）の市町村合併により、富山県の中央部から南東部まで県域の三分の一近くを占める広大な市域となった。北は富山湾、東は立山連峰、西は丘陵・山村地帯が連なり、南は岐阜県境に接して広大な森林地帯が広がる。明神山遺跡は市域北西部に位置し、市街地の北西3kmの呉羽丘陵上に立地する。

呉羽丘陵は、南部に広がる射水丘陵から北東方向に細長く突き出て、富山県を二分する。東側は「呉東」、西側は「呉西」と呼ばれ、文化や気候面の境界をなしている。呉東に広がる富山平野は、神通川と常願寺川の流域に形成される。常願寺川は県南東部の山岳地帯に水源をもち、上流に立山カルデラの大崩壊地があることから莫大な量の砂礫が供給され、広大な扇状地を形成する。神通川扇状地は比較的小さく、下流の富山市街地以北は流路変遷の跡や自然堤防・後背湿地が広がる。一方、呉西の射水平野は、繩文時代前期には海進によって呉羽丘陵の裾あたりまで海岸線が入り込んでいた。全体的に低湿の海岸平野が広がる。

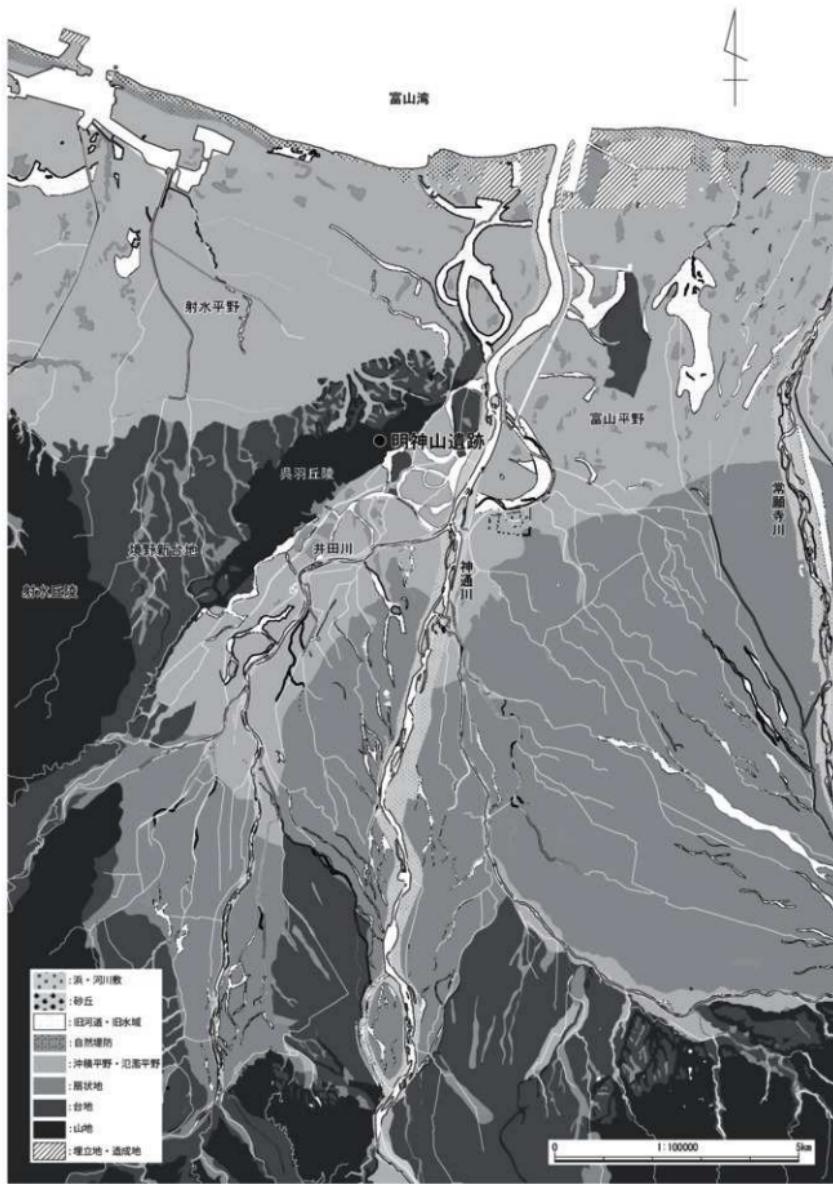
呉羽丘陵は、南西端の富山市境野新から北東端の富山市八ヶ山まで約7kmの長さがある。北東端から約2.3km南西で深い開析谷があり、この谷を開削して主要地方道富山高岡線が丘陵を横断している。今回のフットバス連絡橋は、この主要地方道の上に建設されるものである。この地点より北側の丘陵は呉羽山、南側は城山と区分される。呉羽山側の最高点は標高71.3mの御野立所地点、城山側の最高点は標高145.3mの城山頂上地点である。丘陵の最大幅は約2.5kmで、東斜面は急崖が多く、西斜面は全体的に緩やかである。呉羽丘陵の地質は、下から新第三系の西富山砂岩層・安養坊砂泥互層・長慶寺砂層が西に傾いて堆積し、その上に傾動しない呉羽山礫層・峠茶屋礫・砂泥互層、北代砂層・友坂段丘礫層がある。（藤井1994・2000）。

明神山遺跡は、呉羽丘陵の城山エリア側に位置し、丘陵尾根から斜面にかけての標高15～80mに広がる。遺跡付近の東斜面は谷が複数入り込み、谷間や尾根の上に複数の旧道が確認できる。近世北陸道は、このうちの谷の一つに造成されている。今回の調査地は峠に近い斜面上方部にあたる。この付近の地質は、10～20cmの円礫やくさり礫を多く含む。

なお、昭和45年頃に東斜面中腹を開削して車道（城山スカイライン）が造られたり、麓に公園が整備されたりしており、丘陵裾部は改変がある。丘陵の西斜面は緩やかな傾斜地に畑地や茶屋町集落が広がっている。峠（標高51m）付近からの眺めは良く、東西の平野が眺望できる。



第2図 明神山遺跡位置図



第3図 富山平野の地形分類図

## 第2節 歴史的環境

令和4年1月末時点で富山市には1046ヶ所の遺跡がある。明神山遺跡が立地する呉羽丘陵周辺は、そのうちのおよそ5分の1にあたる約200ヶ所が所在する。県内で最も遺跡が集中する地域のひとつで、旧石器時代から江戸時代まで連綿と人為活動の痕跡がみられる。地形変化に富み、遺跡の種類も集落・生産・墳墓・山城等、多様である。

**旧石器時代** 本遺跡に近い丘陵北部の北代遺跡(51)でナイフ形石器等が出土しているが、多いのは丘陵の南部周辺である。境野新遺跡は石核・剥片が出土し、製作遺跡とみられる(西井・藤田1976)。向野池遺跡では、縦長剥片素材の周縁調整尖頭器がある(富山市教委2000)。北押川B遺跡では、東山系の石刀と搔器、杉久保系のナイフ形石器が出土している(富山市教委2008b)。

**縄文時代** 呉羽丘陵西麓の台地や北に広がる沖積平野において多くの遺跡が形成された。

前期は、丘陵の裾部、海岸線から約4km内陸に小竹貝塚、蜆ヶ森貝塚(65)があり、縄文時代前期にピークを迎えた海進の位置を示す。小竹貝塚では北陸新幹線建設に伴う発掘調査で、前期としては国内最大級の貝塚や埋葬人骨が発掘された(富山県財团2014)。

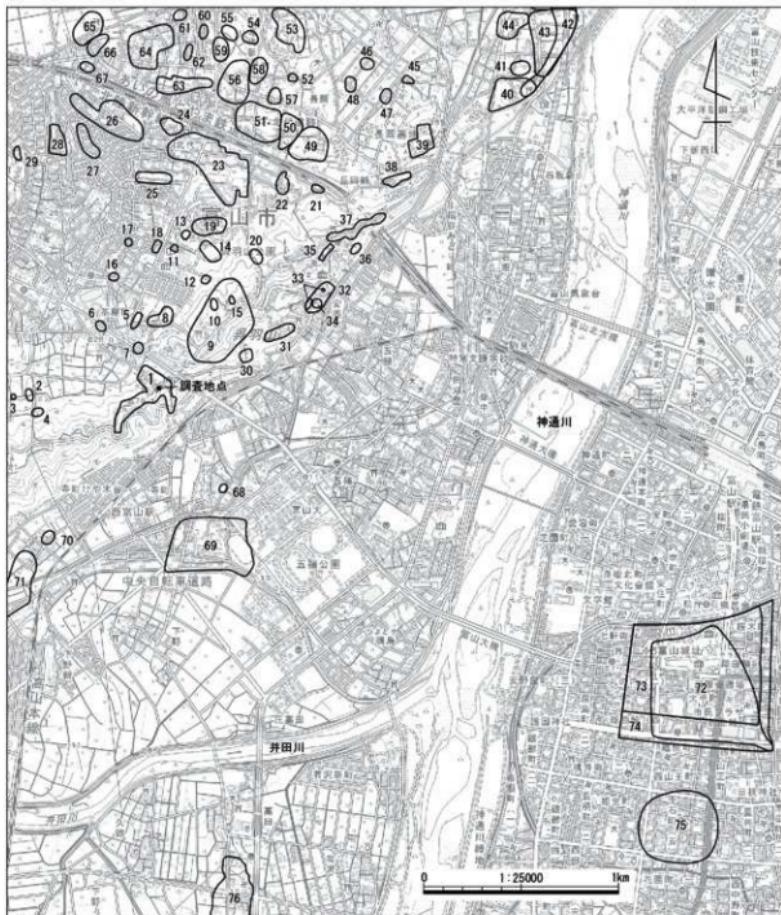
中期は、呉羽丘陵西麓の台地に多くの集落遺跡がある。最大の集落は北代遺跡(51)で、早期から晩期まで営まれ、中期中葉から後葉を主体とする。確認されている竪穴建物は78棟に及び、集落中央に掘立柱建物を配して竪穴建物が取り巻く構造を呈する(富山市教委1999)。北代遺跡の北西300mに位置する北代加茂下III遺跡(56)は、中期前葉から中葉の集落である。柱列が二重にめぐる長大な掘立柱建物は、集落のシンボル的な建物とされる(富山市教委2004a)。

後期から晩期は集落数・規模ともに縮小する。長岡八町遺跡(53)は後期後葉から晩期前葉に盛期があり、掘立柱建物のほか、谷部から大量の土器・石器・土偶や祭祀遺物が出土した(富山市教委2003)。このほか長岡杉林遺跡(49)で竪穴建物1棟が検出されている(富山市教委1987)。

**弥生・古墳時代** 弥生時代中期以前の遺跡は少なく、近くでは北代遺跡(51)や百塚遺跡(43)で遺物が出土している程度である(細辻2010)。後期になると集落が急増する。海岸近くの平野に多く、打出遺跡、四方荒屋遺跡、四方背戸割遺跡、江代割遺跡、今市遺跡などが知られる。打出遺跡は当該期として県内最多の鉄器が出土し、神通川・常願寺川下流域における拠点的集落と評価されている(富山市教委2004b)。古墳時代中期以降は、呉羽丘陵西側の平野にある八町II遺跡で、前期前半と中期前半の集落が確認されている(富山市教委2008a)。また、呉羽丘陵南部の西麓にある古沢A遺跡や境野新遺跡で中期の竪穴建物がある。古墳時代の集落は主に呉羽丘陵の西側で確認されている。

墳墓・古墳は呉羽丘陵上とその周辺に多く存在する。丘陵北端の百塚古墳群(42)は、近年の調査で確認された、弥生時代後期後半から古墳時代前期前半を中心とする約30基からなる埋没墳墓群である(富山市教委2012)。丘陵北部では、後期～終末期の番神山横穴墓群(32)や横穴式石室墳の呉羽山古墳群(33)がある。丘陵南部には40基以上からなる呉羽山丘陵古墳群があるものの発掘例が少なく、詳細は不明である。主要古墳として、前期と考えられるNo.16号墳(前方後円・38m)、中期と考えられる古塚山古墳(前方後円・41m)、後期と考えられるNo.26号墳(前方後円・20m)がある。同古墳群内には12基以上からなる金星陣の穴横穴墓群もある。丘陵の南端付近では、四隅突出型墳丘墓を含む弥生時代終末期から古墳時代前期前半の杉谷古墳群があるほか、杉谷A遺跡の方形周溝墓群からは、素環頭鉄刀、ヤリガンナ、鉄素材、銅鏡、ガラス小玉が出土した。

**古代** 奈良・平安時代は、呉羽丘陵一帯で多数の集落が形成され、製鉄・製陶等の生産遺跡も展開する。呉羽丘陵西麓の台地に北代遺跡(51)、長岡杉林遺跡(49)、呉羽小竹堤遺跡(28)、呉羽富田



- 1明神山道路 2茶屋町南I道路 3茶屋町南II道路 4興羽町豈原谷道路 5茶屋町峰長割道路 6茶屋町向開道路 7茶屋町浦山道路  
 8茶屋町神山ノ下道路 9茶屋町東道路 10茶屋町山ノ下道路 11茶屋町西山道路 12茶屋町西山II道路 13北代西山道路 14北代西山II道路  
 15北代西山III道路 16茶屋町新長削I道路 17茶屋町新長削II道路 18茶屋町新長削III道路 19茶屋町道路 20北代平野道路  
 21北代一万步道路 22北代南田道路 23典羽富田町道路 24北代シャツジ道路 25北代弓II道路 26北代中尾道路 27典羽コウツバラ道路  
 28典羽小竹堤道路 29典羽貴船番道路 30安豐坊道路 31安豐坊円山古墳 32番神山横穴墓群 33典羽山古墳 34番神山古墳 35五百羅漢  
 36長慶寺古墳 37杉古塚群 38長岡新道路 39富山主前田家墓所（長岡御廟所） 40八ヶ山道路 41百草壁割道路 42百草古墳群  
 43百塙道路 44百塙B道路 45八ヶ山林業路 46八町A道路 47八町B道路 48八町C道路 49長岡杉林道路 50北代東道路 51北代道路  
 52長岡与五段道路 53長岡八町道路 54北代加茂下I道路 55北代加度下II道路 56北代加茂下III道路 57北代加茂下IV道路  
 58北代加茂神社道路 59北代中谷道路 60北代中谷II道路 61北代村巷I道路 62北代村巷IV道路 63北代村巷V道路 64經寺廣寺  
 65經寺ヶ森貝塚 66經寺ヶ森東道路 67北代中尾II道路 68五種道路 69大堀城跡 70寺町道路 71寺町向田道路 72紀曲輪道路 73富山城跡  
 74富山城下町道路主要部 75千石町道路 76羽根木下立道路

第4図 明神山遺跡周辺の遺跡

町遺跡(23)などがある。掘立柱建物、竪穴建物、鍛冶工房等が検出されており、開墾集落が増加する様相がうかがえる。奈良時代の集落は丘陵縁辺や台地に多く立地するが、平安時代は平野部に広がり、開発が低地に及んだことがわかる。長岡杉林遺跡では瓦塔・緑釉陶器・灰釉陶器など仏教的色彩の強い遺物が出土している。

呉羽丘陵南部では、6世紀末から7世紀初め以降に須恵器窯、炭焼窯などが多数築かれ、製陶・製鉄の大規模生産の様相をみせる。生産は9世紀後半にピークを迎え、10世紀には衰退する。

**中世** 明神山遺跡から南西1.5kmの呉羽丘陵のピークに白鳥城跡がある。戦国時代、富山城に拠る佐々成政を攻める際、羽柴秀吉が本陣を置いた城である。丘陵下には、白鳥城跡の出城である安田城跡(国史跡)や大畠城跡(69)が築かれている。また、友坂遺跡では12~15世紀の二重にめぐる溝や土橋等が検出され(婦中町教委1984・1993)、長期にわたり居館が営まれた。また、金屋南遺跡は12世紀から16世紀の大規模集落で、14世紀後半から15世紀には鉄物生産が行われていた(富山市教委2007)。

### 第3節 明神山遺跡における近世の歴史的環境

調査区付近の山は明神山と呼ばれ、その麓に五時谷(護持谷・御時谷・牛時谷の表記もある)という谷が存在する。明神山・五時谷周辺は、北陸道のほかに、現在でも建物跡の造成面や方形・円形の塚状遺構などを確認できる。塚状遺構は古墳の可能性があり、以前は「茶屋町表山古墳群」、「茶屋町浦山古墳群」として遺跡地図に掲載されていた。しかし、古墳とは特定しにくく、また上記のとおり近世を中心とする多くの遺構が所在することから、近世にも呼ばれていた山名にちなみ「明神山遺跡」に改称した。近世は、北陸道が呉羽丘陵を越える交通の要所であるとともに、七面堂(宮)・妙見堂、稻荷堂、長久院、三重塔、常夜燈などの建造物が立ち並ぶ名所でもあった。近世の絵図にもしばしばその景観が描かれる(第5図)。以下、明神山・五時谷周辺をめぐる主な研究から歴史環境を確認しておく。

小柴直矩氏は、大正2年(1913)の著書において、明神山と五時谷の来歴を詳述している。五時谷は、万治年間(1658~1660)に富山藩士奥村藏人が富山初代藩主前田利次より拝領したこと、堂を建て、甲州身延山の七面大明神と同型の木像を安置し、明神山の名はこれに由来すること、二代富山藩主前田正甫が日蓮宗の武運山長久院をここに創建したこと、五代利幸の時代に累世藩主の祈願所と定めて寺領を給せることなどを記した(小柴1913)。

昭和55年(1980)の『富山県歴史の道調査報告書』では、北陸道のルート比定とともに、道沿いの常夜燈や法華塔、石碑の由来等について紹介している(富山県教委1980)。

近年、武内淑子氏は、明神山・五時谷周辺の遺構と北陸道をめぐる詳細な検討を行った(武内2007a・b)。武内氏は昭和中期以降、五時谷・明神山の位置が誤った地点に比定されていることが多いとし、絵図等の分析から明神山は北陸道の南西側の山、五時谷は明神山の西隣の谷と示した。また、呉羽丘陵を越える北陸道は、元は現ルートより西側を通っていたが、寛政10年(1798)頃に付け替えられて現状のルートに変わったことを史料の記述から指摘した。これは、今回の発掘調査成果にも深く関わる重要な指摘である。また、万治年間に富山藩士奥村藏人具知が初代富山藩主前田利次から五時谷を拝領し建立した七面堂は、藩もかかわって建立した可能性が高いとした。七面堂・常夜燈・三重塔等の原位置も推定している。

この後、古川知明氏は現地踏査によって、山腹に残る平坦面や道などの遺構を数多く確認した(古川2012)。

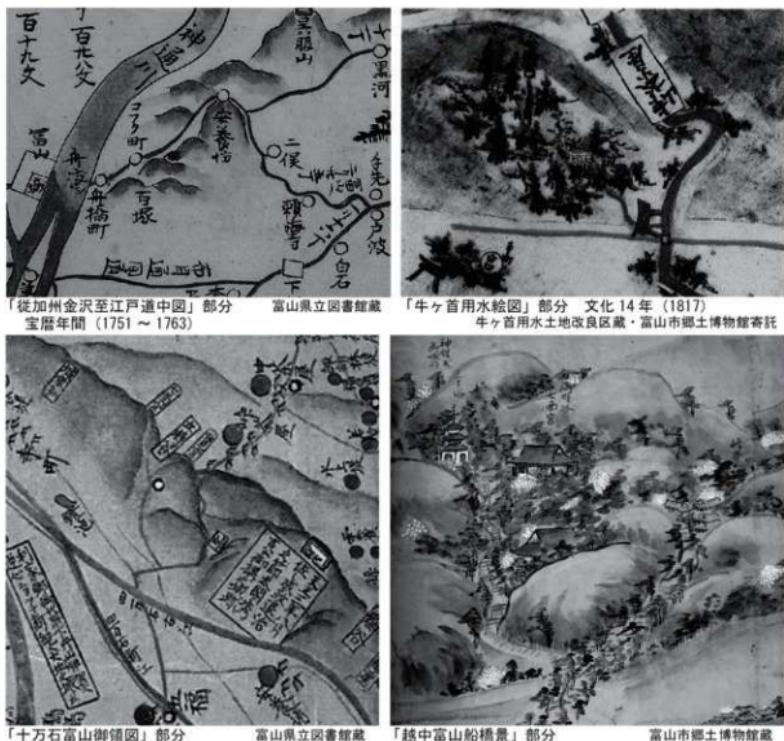
武内氏や古川氏の調査を受け、西井龍儀氏らは現地の分布調査を行いつつ、地表に残る各種遺構の測量図を作成した。近世の礎石建物を新たに確認したほか、焼し瓦や赤瓦、陶磁器類なども採集され、多くの遺構・遺物が分布していることが確かめられた（西井ほか 2018）。

最近では古川知明氏が絵図・史料の分析を通して呉羽丘陵の山越え道を検討している（古川 2020）。北陸道の現在のルートは江戸時代後期の最終形であり、それより前は北東側の主要地方道富山・高岡線にはほぼ重なるルートであったという新説を提起した。また、五時谷の位置については武内氏が同定する場所より一つ北東側の谷を想定した。

以上のとおり、近世の明神山・五時谷周辺は、富山藩に關係するものを含め複数の建造物や道が存在したが、個々の位置比定などは論者によって見解が異なる。例えば近世中期以前の北陸道の呉羽山越えルートについては、現在のルートより北東側を通ったとする説と南西側を通ったとする説があるほか、寛政 10 年頃に付け替えられたとする史料の記述をめぐっても解釈の違いがある。

近世富山の交通の要所、風光明媚な名所として重要な遺跡である一方、いまだ多くの謎を残す場所といえる。

(野垣)



第5図 明神山・五時谷付近の絵図

## 第3章 調査の方法と成果

### 第1節 調査の方法

**概要** 調査区はA区とB区にわかれ。A区は本発掘調査として毛野考古学研究所に委託し、B区は埋蔵文化財センターが工事立会として実施した。A区の当初調査面積は149 m<sup>2</sup>であったが、遺構・遺物が調査区外に広がっていたため58.56 m<sup>2</sup>の調査区拡張を行った。B区は、試掘の結果、遺構の残存が明確でなく工事立会としたが、表土掘削の結果、遺構を確認したため、その後の作業は本発掘調査と同等の内容で行った。

**発掘作業** A-B区いずれもほぼ同様の方法による。表土掘削はバックホウにより、遺構面（道路面）の直上まで慎重にすき取った。A区では現況の遊歩道部分は深さ30 cm程度で遺構面となつたが、山側（西側）は上部からの流土が厚く堆積しており、表土除去に時間を要した。排土は、A区はクローラーダンプを用いて調査区南側の宅地跡に搬出し、B区は横置きとした。表土掘削が完了した場所から、ジョレンで人力による遺構検出作業を行つた。A区は道路面の砂利敷が部分的に残存していたため、移植ゴテや竹べら等で精査した。道路側溝等の遺構は移植ゴテで掘削した。土層観察用の畔を残しながら掘り下げ、写真撮影と土層断面図を作成した後、完掘した。

調査区の要所で道路面を横断する断割りを設定した。A区の断割6・断割8-9は、試掘調査のトレーナー跡を再掘削したものである。

遺構や道路面上から出土した遺物は、座標で位置を記録して取り上げた。表土や流土からの出土遺物は、おおよその地点・層位ごとに一括して取り上げた。

**記録作業** 平面図作成はトータルステーションを用い、縮尺1/20で行つた。A区路面の砂利敷は、空中写真から作成したオルソ画像により図化した。土層断面図は、A区はオルソ画像からの図化、B区は手測りで作成した。測量基準は世界測地系第VII系による。

写真撮影は、35 mmフルサイズの一眼レフデジタルカメラを使用した。また、完掘時にラジコンヘリコプターを用いた空中写真撮影を行つた。

**整理作業** 遺物は、A区ではコンテナ12箱、B区では2箱分が出土した。遺物洗浄、注記、接合の基礎整理後、実測・トレースを行つた。上部からの流土に陶磁器が多量に含まれ、図化遺物の選定にあたってはバラエティを把握できるよう努めた。遺構出土遺物は多くなかつたため、細片もある程度図化した。トレース作業は、Adobe Illustratorによるデジタルトレースとし、遺物写真撮影は35 mmフルサイズの一眼レフデジタルカメラを使用した。

**自然科学分析** 自然科学分析はパリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。植生等を検証するため側溝内埋土の花粉分析を行つた。

**保存処理** 出土した金属製品のうち、煙管、簪、釘についてはパリノ・サーヴェイ株式会社に委託し保存処理を行つた。



(野垣・常深) 第6図 表土掘削状況

## 第2節 基本層序

調査区の地点ごとに状況が異なるが、A・B区それぞれで最も深度があるA区北辺とB区北辺を例にすると次のとおりである。

A区北辺（第13図断面1）は、最上層が厚さ約0.1～0.3mの表土及び現況遊歩道の整地層である。その下から近世の道路面までは、丘陵上方から流れ込んだ流土主体の層が厚く堆積する。最も厚い調査区の北西端で層厚は約2.5mに及ぶ。流土には近世後期から現代までの陶磁器、瓦、窯道具、ガラス等が層ごとに多く混入している。その下が近世道路面で、水平に薄く盛った幾層もの盛土で造成されている。その下は再び上層からの流土とみられる自然堆積層があり、さらにその下が黄褐色の地山となる。地山は現況地形と同じ東下がりの急傾斜をなす。地山のうち上層は礫を多量に含むが、断割りで確認した下層の深い場所では礫をほとんど含有しないシルト質となる。

B区北辺（第19図b断面）は、現況遊歩道の整地層の下に、厚さ約0.7mの近代～現代の盛土層がある。この盛土の途中で一面、現代の道路面が形成されている。道路盛土の下が黄橙色の地山となり、この地山面が近世から近代の道路面である。地山は3～15cmの円礫やくさり礫を多く含む。

（常深・野垣）

## 第3節 遺構

### 1. 概要

調査区は、峠に近い奥羽丘陵東斜面の上方に位置する。下から続いてきた道は、A区の上方（南側）で折れ曲がり、B区に続く。B区の北端が峠となる。

検出遺構は、側溝と砂利敷を伴う近世北陸道である。A区南西部で確認した石列遺構（SX02）は性格が不明である。

A区の近世道路は大きく上・下2層がある。なお、上・下層の中間層で溝を1条（SD08）検出し、中層としているが、ここは明確な路面を確認できず、上層道路の造成工事途中における排水側溝かもしれない。上層道路は近世後期から近代初期である。下層は道路に伴う出土遺物が少なく、時期を特定しにくいが、調査区の出土遺物は全体的に江戸中期以前のものが少ないと想定される。史料の記述から18世紀末以降と考える（第5章参照）。下層道路は勾配が急で、上層道路はそれを緩やかにするようになされている。上層道路は西側（山側）のみ側溝を確認した。側溝は新旧2時期があり、新しい側溝は、道をすらすら、または道幅を狭めるかたちで東側（谷側）に新たに掘り直されている。反対の東側（谷側）の側溝は確認していない。谷側の1/3ほどは近代以降に削平されているため、元々設けていた可能性はあるものの、現状の土層を見る限り存在しなかったと考えられる。下層道路は、部分的な確認にとどまるが側溝は存在しない。上・下層面とも路面は部分的に砂利敷が認められ、本来はより広範囲に敷かれていたと考えられる。

B区は、地山面において近世と近代の路面を確認した。近世は両側に側溝（SD11・SD12）を伴い、A区の上層道路に対応する。近代は道幅を狭め、両側にごく浅い側溝（SD14・15）を設ける。戦後に盛土を行って新しい道路面を造り、さらにその後、再度盛土を行い、現在の路面（遊歩道）ができる。

（野垣）

## 2. A区の遺構（第7～17図）

A区では近世の道路遺構と石列、近代の道路遺構を検出した。近世の道路遺構は上層と下層の2面の道路面を検出し、その間の造成土（中層）のなかにも遺構が存在した。近世の遺構については、発掘調査の工程にあわせて、上層から記述する。

### （1）上層遺構（第8・9・12図）

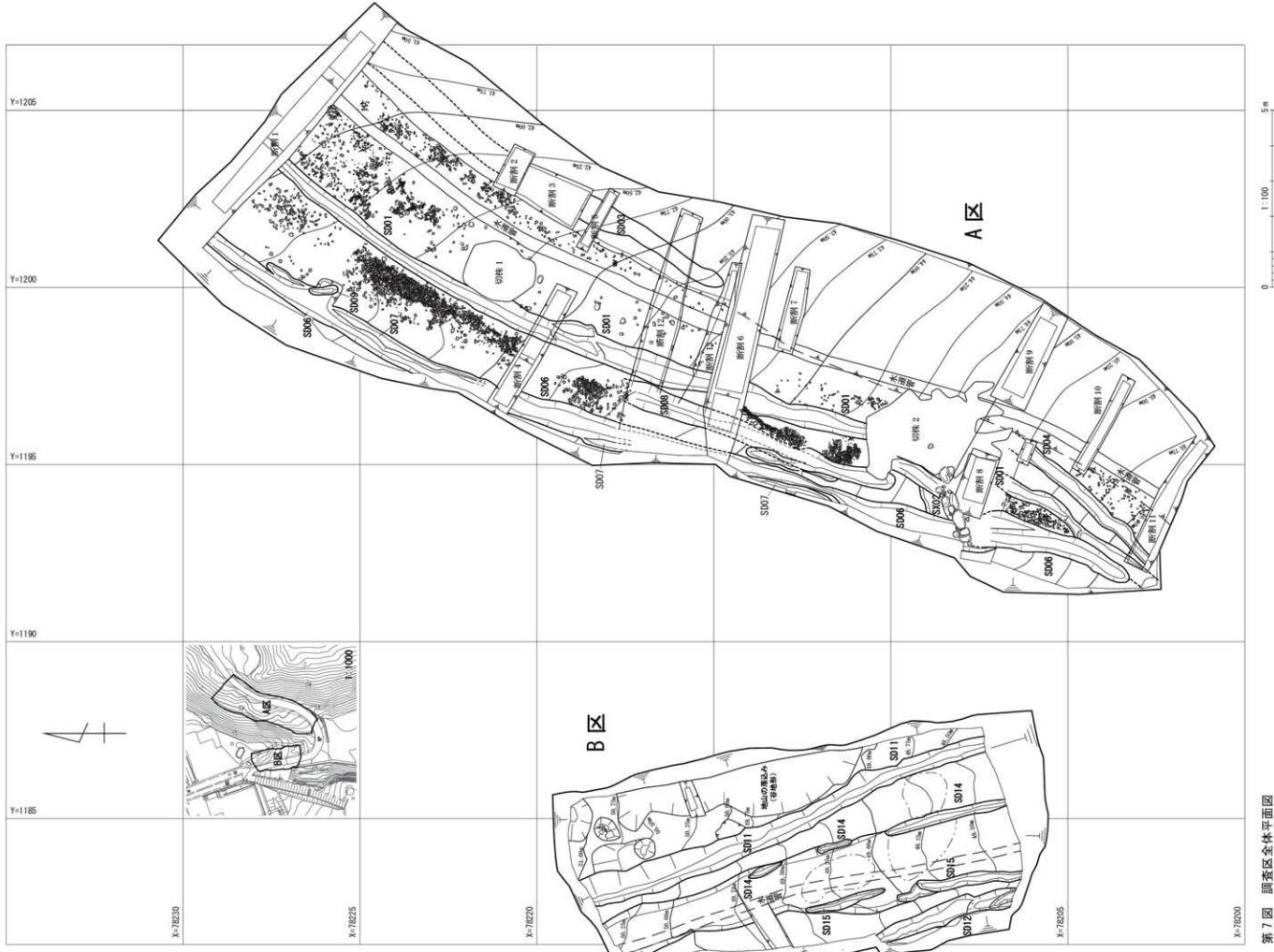
**概要** 丘陵頂部直下の斜面を北から南へ斜上する道路遺構である。山側の側溝と、砂利敷を伴う路面を検出した。山側の側溝は、当初の調査区で検出したSD01と調査区拡張後に検出したSD06・07がある。断割1などの断面や出土遺物をみると、両者には新旧があり、SD01が新しい段階の側溝と判断された。古段階のSD06・07から新段階のSD01への側溝の移動は、山側から谷側への道路の付け替えを示しているが、調査区の北側ほど移動幅が大きく、南側ではほとんど変化していない。調査区北側は埋没谷の影響でやや回んだ地形になっており、丘陵上に存在した近代瓦窯の遺物もこの凹みに流れ込んでいた。おそらく、埋没谷を通過する部分で斜面の崩落等の不都合が生じ、道路の改修を余儀なくされたものと推測される。谷側はおおよそ水道管の敷設ラインより東側が近代以降に削平されており、側溝の有無や道路端の把握が困難である。

**近世の道路（古段階）** 上層道路古段階は山側斜面下のSD06・07を側溝とする。谷側の側溝は当初から存在しなかったか、新段階への改修で消失したのか、検出されていない。SD06とSD07ではSD07が新しいが、ほぼ重なるように検出されることから、側溝の掘り直しと考えられる。SD06・07は概ね幅35～60cm、最大幅は83cmである。深さは14～35cmである。走行方向は地形に沿って緩やかに蛇行し、南側ではN-17°-E、北側ではN-33°-Eを示す。SD06・07底面の標高は北端の42.00mから南端の45.85mへ3.85m上がる（斜度8.16°）。覆土は、掘り直し前のSD06が複数の土層がみられるのに対し、掘り直し後のSD07は単層で、断割1では山側からの流水で埋没した様子が窺える。

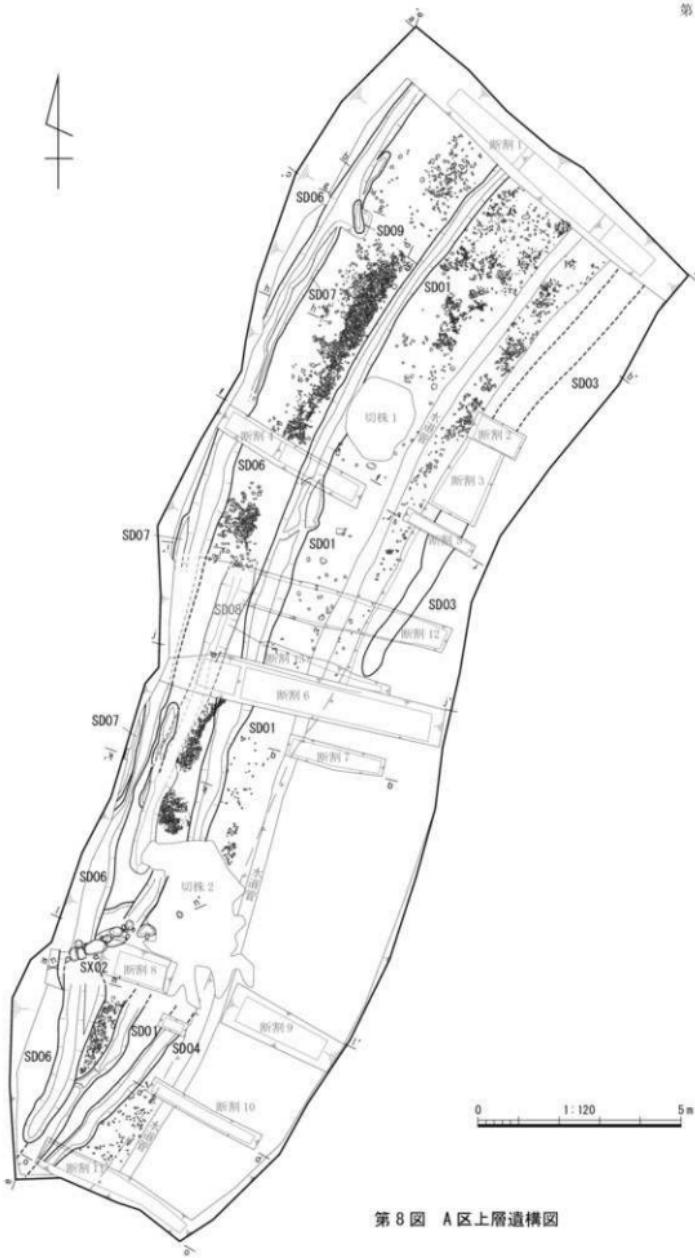
古段階の路面は、後述する造成土の上に砂利を敷いて構築されていた。水平に盛られた造成土（断割1の39層など）の幅を考慮すれば、路面幅は調査区北端では5.0mを超える規模になる。また断割6や断割9の谷の落ち込み付近を端とみると、5.7～5.9mが道幅となる。砂利は径1～3cm前後の玉石が多く用され、その隙間に砂の堆積が確認された。砂利敷は新段階への改修の際に剥がれたのか、山側では散漫な検出状態であった。轍のような凹凸はみられなかった。路面の標高は、北端の42.12mから南端の45.68mへ3.56m上がる。平均斜度は8.23°であるが、断割6付近を境に、北側6.32°、南側9.12°で、南側の傾斜が増す。

古段階の道路は、断割1で地山を急角度で削り込む様子が確認されるように、谷地形を埋めるために山側斜面を大きく切り土するなど、大規模な造成によって構築されたことが窺える。この埋立てにより調査区北側の下層路面（後述）は埋没し、下層路面の急勾配が緩和されたことになる。古段階の造成土は、山側では黒褐色土を主体とする斜めの堆積土が多くを占める。一方、埋没谷の中心に位置する断割1で顕著なように、路面の中央から谷側にかけては、厚さ3～15cmの土を薄く水平に積み上げている。谷側の路面をより強固に構築する意図が窺われる。この造成には山側で切り土された地山が主体的に使用され、所々に黒褐色土が互層に入り込む。切り土された地山にはもともと礫が含まれることもあるが、造成部分はかなり繰り返しがある。下層路面の上に盛土された厚さは断割4では約90cm、断割1では1.5m以上（未完掘）に達する。

古段階の道路は谷地形の中心にあたる調査区北端から埋没が進む。側溝SD07の埋没後、地山ブロックを含む土が山側から繰り返し流れ込み、c断面付近に達する段階で炭化物層（第14図c断面19層）







第8図 A区上層遺構図



第9図 A区上層遺物分布図

の堆積がある。この炭化物層周辺からは19世紀を中心とする遺物が大量に検出されており（第4節の流土下層遺物）、丘陵上部から廃棄されたものと考えられる。遺物は陶磁器の碗が大部分を占めることから、丘陵上に茶屋のような施設があつて、火災等で一括廃棄されたことを推測させる。その後も流土の堆積が続くが、c断面の14層の堆積後に流土端部が急角度でカットされ、黒色土の堆積へと変化することから、この時期に新段階の側溝SD01の掘削が行われたと考えられる。

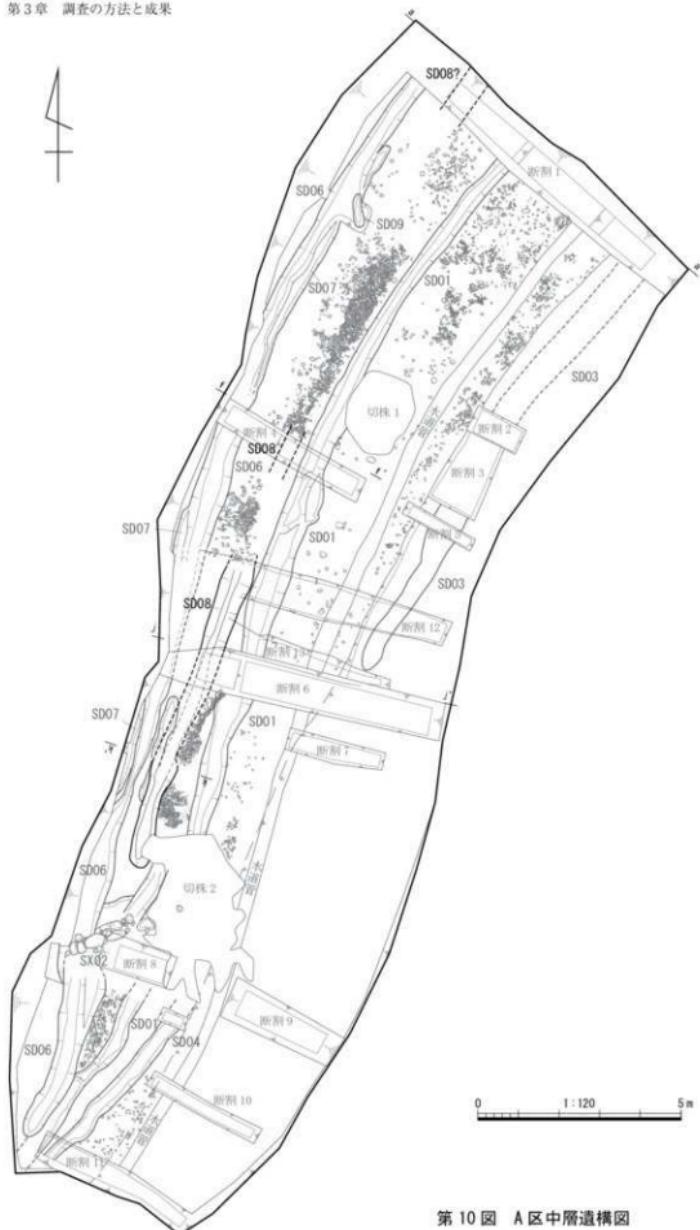
古段階の遺物は埋没谷のある調査区北側に偏って出土しており、丘陵上から埋没谷へ落下した遺物の可能性が考えられる。SD06・07から肥前の碗・皿（33～35）、越中瀬戸の碗・壺・鉢（36～38）、硯（39）などが、砂利敷の路面上からは肥前の碗（48）、在地系の陶器（49・50）が出土している。また造成土からは、肥前（波佐見）の皿（44）、肥前系の碗（45）、越中瀬戸の碗（46）・擂鉢（47）が出土した。出土遺物や文献の記載から、古段階の道路は19世紀前半に構築されたと考える。詳細は第5章で検討する。

**近世の道路（新段階）** 上層道路新段階は、古段階の側溝SD06・07をSD01に付け替えて構築されたものである。SD06・07からSD01への付け替えは、調査区南端を起点におよそ5～6°谷側へ方位を変えており、調査区北端では最大2.9mの移動幅がある。路面は古段階と同様の玉石を使用した砂利敷である。砂利敷が残存しているのは幅3.2m程度であるが、断割1でみられる道路面構築土（第13図a断面の32層）の堆積幅や、断割6・9にみられる路肩状の造成土と自然堆積土の境界（断割6の12-16層間、断割9の1-8層間、断割12の3a-25層間）で測ると、路面は3.6～3.7mで、およそ二間幅となる。谷側は急角度で落ち込んでおり、谷側の側溝は存在しなかつたと考えられる。新段階の路面高は、古段階より谷側に寄るため、5～20cmほど低くなる。調査区南側では概ね古段階の造成土を踏襲しているが、北側では厚さ20～30cmほどの規模で再造造成され（断割1の32層、断割6の8・9層）、その上面は径1～3cm前後の玉石が多用された砂利敷となり、硬化している。砂利敷は調査区北側で遺存状況が良好であった。路面の標高は北端の41.97mから、南端の46.03mへ4.06m上がる。平均斜度は8.84°であるが、断割6付近を境に、北側6.19°、南側10.73°で南側が急勾配である。

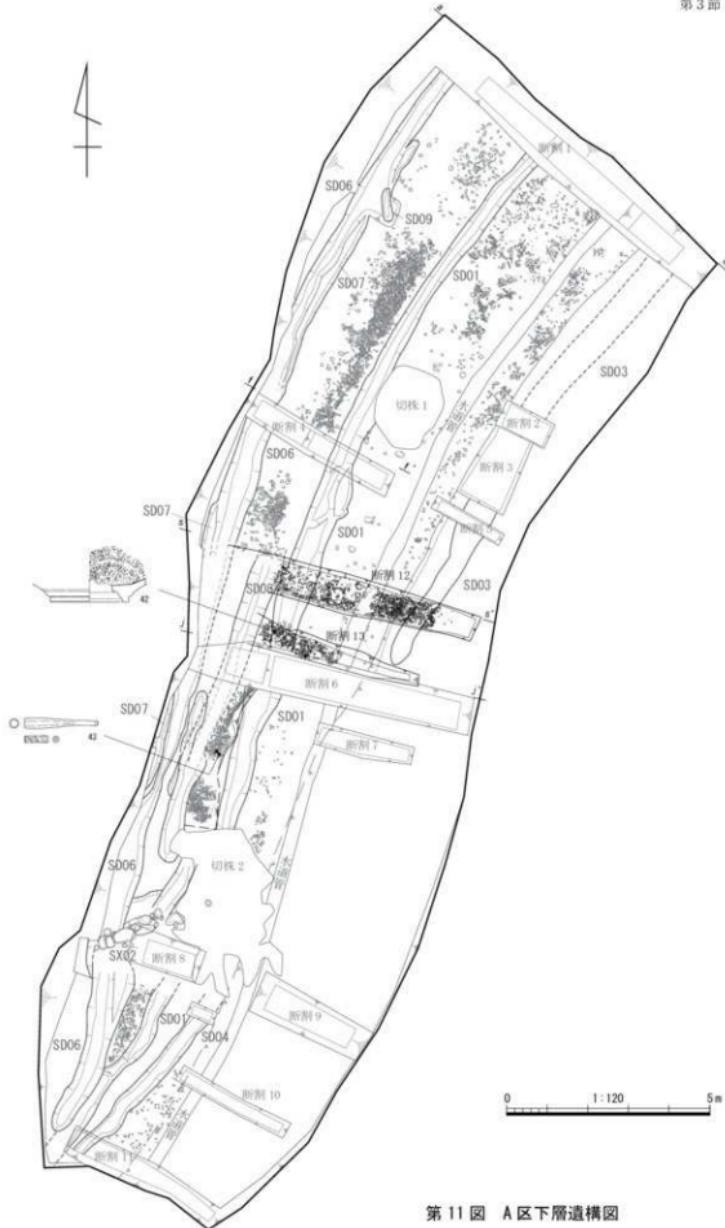
SD01は概ね幅35～50cm、最大幅は82cmである。深さは15～25cmである。地形に沿って緩やかに蛇行し、走行方向は、南端でN-34°-E、中央部でN-18°-E、北側でN-33°-Eを示す。SD01の底面標高は北端の41.75mから南端の46.05mへ4.30m上がる（斜度9.12°）。覆土は円礫や地山ブロックを含む单層で、断割1では山側からの流土により埋没したことが分かる。

遺物は調査区北側に偏って出土し、古段階と同様に丘陵上からの流れ込みが多いとみられる。側溝SD01からは肥前の碗・皿（1～8）、肥前（京焼風）の碗（9）、瀬戸美濃の碗・皿（10～14）、越中瀬戸の碗・水指・秉燭（15～18）、瓦質土器の鉢（19～21）、簪（22）、鉄釘（23・24）が出土した。路面上からは、肥前の鉢（51）、瀬戸美濃の碗・皿（52～55）、越中瀬戸カ（56）などが出土した。SD01では断割4周辺に遺物が集中していたが、いずれも覆土の上面付近で出土した。このなかには上述の炭化物層周辺（流土下層）から出土した破片と接合するものや、近代の遺物も含まれる。出土遺物や前後の道路の時期から、新段階の道路は19世紀中頃に構築され、幕末以降、近代にかけて埋没が進んだと考えられる。

**近世の石列（SX02）**（第12図） 調査区南側で検出した石列である。東西方向2.3mにわたって石が並べられていた。方位はN-70°-Eを示し、道路の方向とは大きく異なる。長軸30～53cmで俵状を呈する川原石を南面を揃えて据えている。石の上面は西に向かって緩やかに上がり、西端は地山に接して途切れる。北面にはやや小振りの石が裏込め状に使用されていた。また石を据える際の溝状の掘り込みの一部が北側に残っていた。石列は上層道路古段階の側溝SD06より新しいが、新段階の側溝SD01との新旧は切株の根摺乱により不明であった。石列周辺からは、肥前の瓶類（25）などが出土した。



第10図 A区中層遺構図



第11図 A区下層遺構図

(2) 中層遺構 (第 10 図)

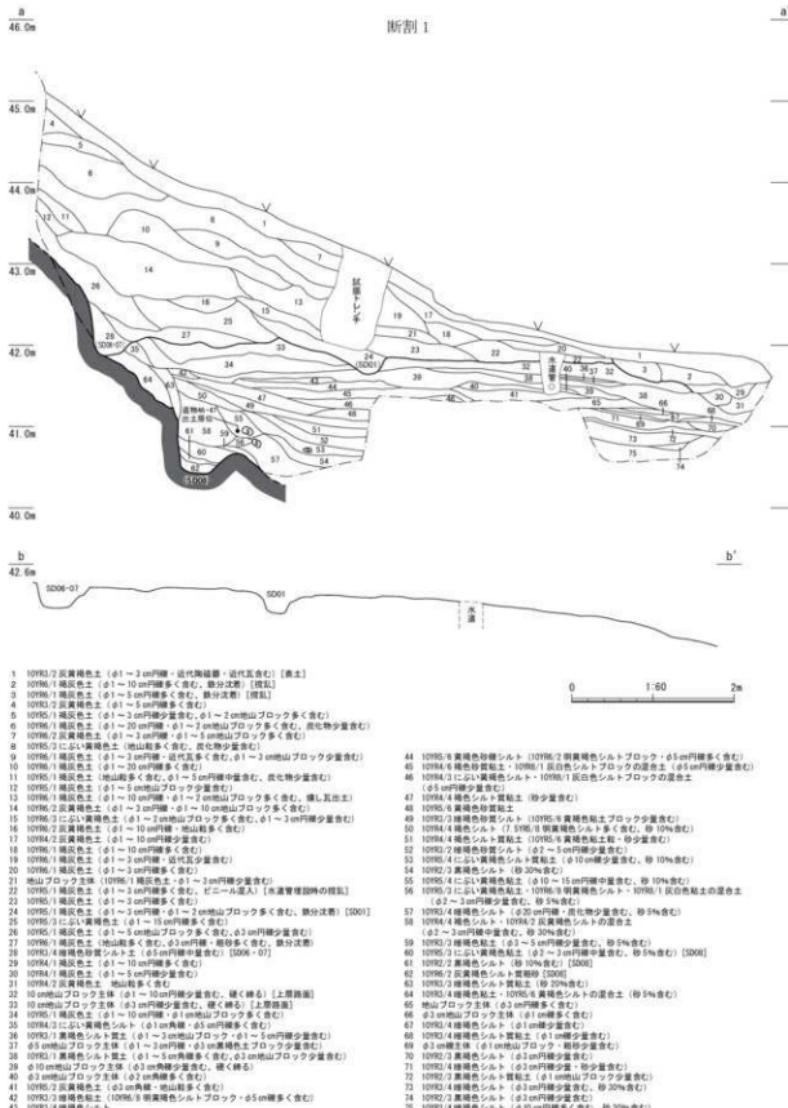
**近世の溝** 上層道路古段階の造成土中、山側斜面裾に SD08 を検出した。調査区の中央南寄りから北へ向かい、上層の側溝より急勾配で傾斜する溝である。断割 6 では幅 60 cm で深さ 35 cm、断割 4 では幅 32 cm で深さ 14 cm、断割 1 では幅 70 cm で深さ 25 cm である。底面標高は断割 1 の 40.42 m から断割 6 の 43.24 m まで 2.82 m 上がり、斜度は 10.31° である。SD08 は古段階の造成の際に地山を切り土する境界に位置しており、山側斜面からの水を排水する機能をもたらした溝の可能性がある。断割 1 では砂の堆積が確認されている（第 13 図 61・62 層）。SD08 は道路の側溝ではないと考えるもの、ここでは中層として遺構図を掲載する。遺物は肥前の碗（40・41）などが出土している。

(3) 下層遺構（第11図）

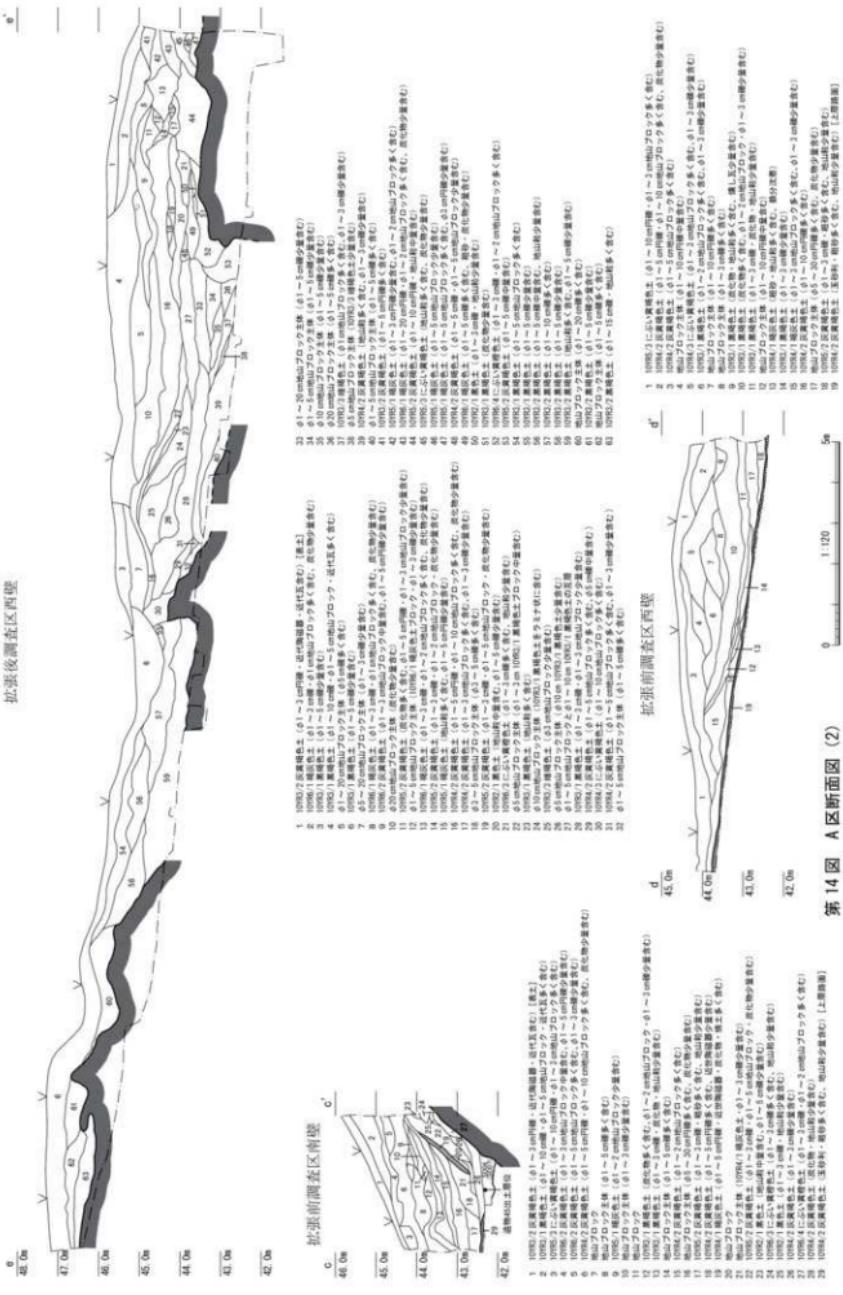
**近世の道路** 上層路面の下で検出した道路である。調査区のなかで最も古い段階の道路と位置付けられる。断割4・12・13で玉石の砂利敷を検出した。砂利敷の路面幅は、断割13では上層路面造成の際に削られておよそ2.0 mしか残存しないが、断割12では4.17 mである。側溝は検出していない。下層路面は上層路面古段階より若干谷側に寄った位置にあったとみられる。断割13より南側は上層路面と高低差が小さくなり、さらに南側では、削平されたとみられるために路面が残存しない。しかし断割13より北側では、上層路面の下へ深く落ち込んでいく様子が確認され、上層路面と下層路面の標高差は断割13では22 cm、断割12では55 cmを示し、さらに北の断割4では、部分的に砂利敷が残る路面（第15図1断面28～31層）があり、上層路面との標高差は84 cmである。北端の断割1では1.5 m掘り下げても下層路面は検出されなかった。断割4と断割6間の斜度は11.93°を示す。この急勾配は調査区北側にある埋没谷が影響したものと考えられる。断割4・6をみると、下層道路の造成は、上層道路でみられたような薄い水平堆積をなさず、山側から斜めに流れ込むような堆積を示し、それぞれの土層に厚みがある。上層路面に削平された可能性のある調査区南側でも、断割8・9の下部に同様の堆積があり、自然堆積と考えられる。ただし断割12では谷側の路肩部分で水平に近い堆積土があり、部分的に人為的な造成を施している。下層道路の造成土は、地山の混入が上層に比べて少なく、黒褐色土を主体とする。地山の切り土はせず、当時の表土を中心とした土を造成に使用したと考えられる。このように、下層道路は大がかりな造成をせずに構築され、旧地形を留めたも



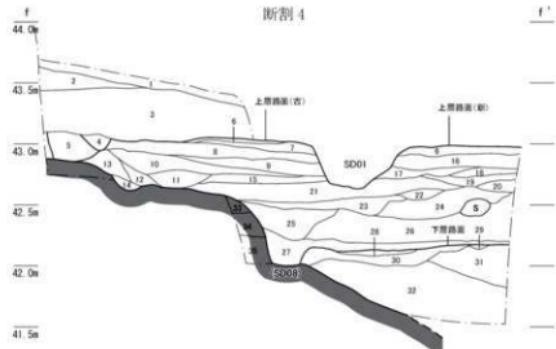
第12図 A区 SX02 遺構図



第13図 A区断面図(1)

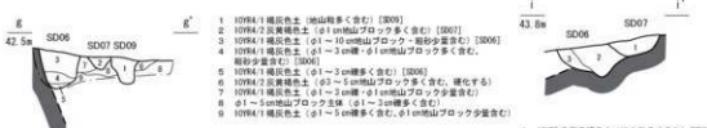


第14図 A区断面図(2)



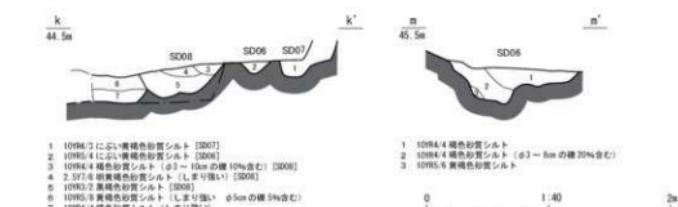
41. On

- |  |   |
|--|---|
| 8. 10月山「山口ラッパ会」(10月) 露地種も土球でキツネ(白)食む           | 19. 2. 5月「高麗蘿根草實」(しまり強い、白色、葉色20%含む)       |
| 10/02/1 黄葉蘿根草 (白) (しまり強い、さわやか山の露地山の露地) (キツネ食む) | 20. 10月「高麗蘿根草實」(しまり強い)                    |
| 10/04/1 黄葉蘿根草 (白) (山地多く咲く、さわやか山の露地食む)          | 21. 10/04/2 黄葉蘿根草實「白」 (しまり強い、葉色20%含む)     |
| 10/04/2 黄葉蘿根草實「白」 (しまり強い、さわやか山の露地食む)           | 22. 10/04/3 黄葉蘿根草實「白」 (しまり強い、葉色20%含む)     |
| 10/04/3 黄葉蘿根草實「白」 (しまり強い、さわやか山の露地食む)           | 23. 10/04/4 黄葉蘿根草實「白」 (しまり強い、葉色20%含む)     |
| 2. 3/16 黄葉蘿根草實「白」 (しまり強い)                      | 24. 5/16 黄葉蘿根草實「白」 (しまり強い、葉色20%含む)        |
| 白、黄色、黄葉ラッパ 20%含む                               | 25. 10/16 黄葉蘿根草實「白」 (しまり強い、葉色20%含む)       |
| 白、黄色、黄葉ラッパ 20%含む                               | 26. 3/17 黄葉蘿根草實「白」 (しまり強い、葉色20%含む)        |
| 2. 3/16 黄葉蘿根草實「白」 (しまり強い、青苔物少なし)               | 27. 4/17 黄葉蘿根草實「白」 (しまり強い、葉色20%含む)        |
| 3/17 4 黄葉蘿根草實「白」 (しまり強い、さわやか山の露地3%含む)          | 28. 5/17 黄葉蘿根草實「白」 (しまり強い、葉色20%含む)        |
| 10/02/1 黄葉蘿根草 (白) (しまり強い)                      | 29. 10/17 黄葉蘿根草實「白」 (しまり強い、白木立25%含む)      |
| 10/02/2 黄葉蘿根草 (白) (しまり強い)                      | 30. 10/17 黄葉蘿根草實「白」 (しまり強い、さわやか山の露地70%含む) |
| 10/02/3 黄葉蘿根草 (白) (しまり強い)                      | 31. 10/17 黄葉蘿根草 (上面に葉)                    |
| 10/05/1 黄葉蘿根草實「白」 (しまり強い、さわやか山の露地10%含む)        | 32. 10/17 黄葉蘿根草 (上面に葉) (Rus 0.05%含む)      |
| 10/06/1 黄葉蘿根草 (白) (しまり強い)                      | 33. 5/17 黄葉蘿根草 (上面に葉)                     |
| 10/06/2 黄葉蘿根草 (白) (しまり強い)                      | 34. 10/17 黄葉蘿根草 (上面に葉) (Rus 0.05%含む)      |
| 2. 3/17 黄葉蘿根草實「白」 (しまり強い、白、黄色、黄葉ラッパ20%含む)      | 35. 2. 9/17 黄葉蘿根草 (山地)                    |
| 10/07/1 黄葉蘿根草實「白」 (しまり強い)                      |   |
| 10/07/2 黄葉蘿根草 (白) (しまり強い)                      |   |



七

- 1 10YR4/2 反葉灰色土 (供試草多く含む、 $\phi_1 - 3\text{cm}$ 層 -  $\phi_1 - 3\text{cm}$ 地山ブロック少含む) [S667]  
2 10YR4/1 植被灰色土 (地山砂多く含む、 $\phi_1 - 3\text{cm}$ 層 - 植物少含む) [S668]  
3  $\phi_1 - 3\text{cm}$ 地山ブロック土体 (土中植物多く含む) [S669]  
4 10YR4/2 反葉灰色土 (供試草多く含む、 $\phi_1 - 3\text{cm}$ 層少含む) [S670]  
5 10YR4/2 反葉灰色土 (供試草多く含む、 $\phi_1 - 3\text{cm}$ 層少含む) [S671]



第15圖 A區版面圖(2)

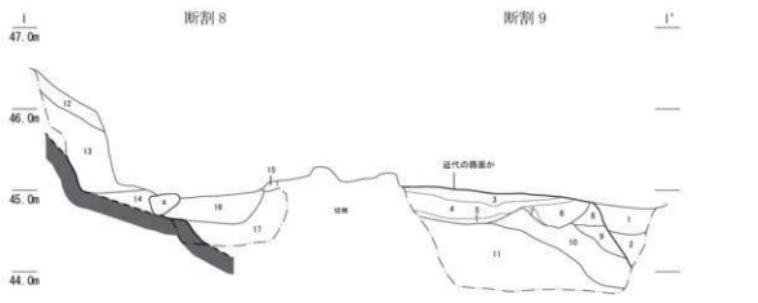
のであったことが窺える。

下層道路では、砂利敷の路面上から肥前の擂鉢（42）、煙管（43）が出土した。出土遺物が少ないが、文献等を参照すると、18世紀末頃に構築されたと考えられる。

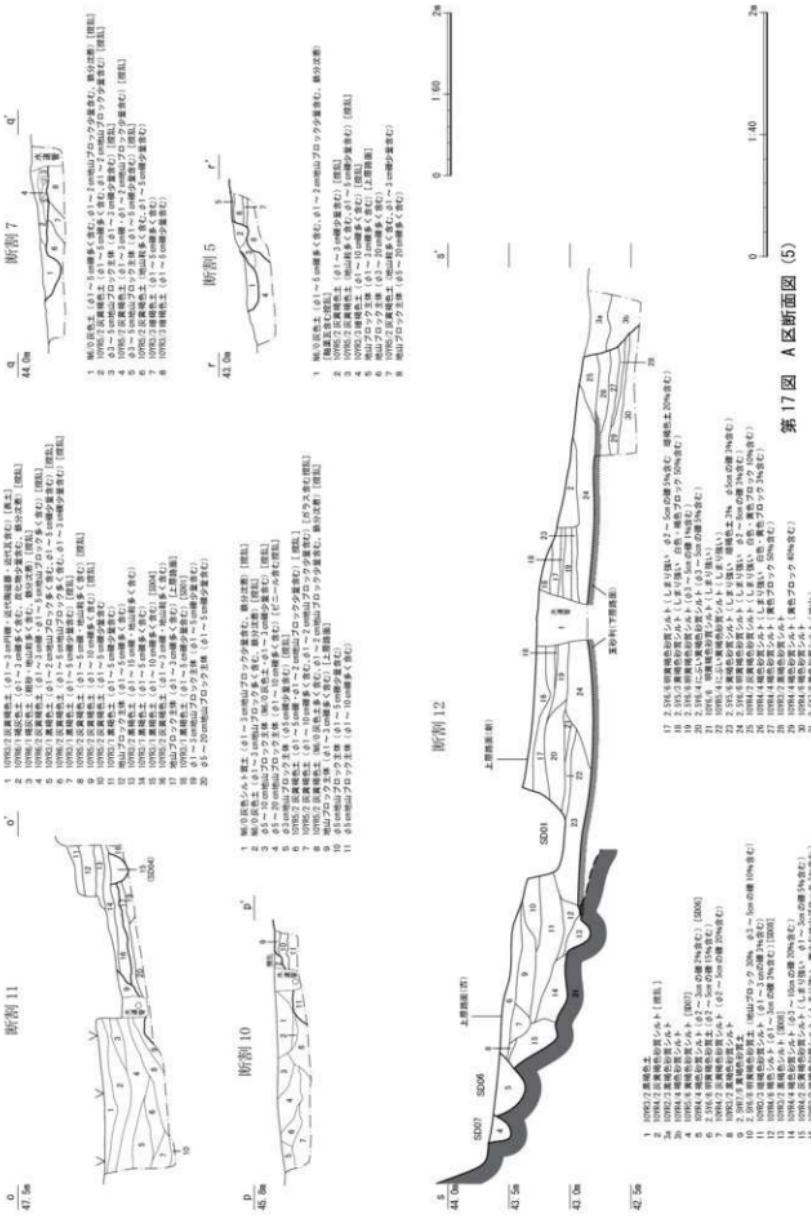
#### （4）近代の道路

SD01の埋没後、幅を減じて谷側に寄って造り直されたと考えられる。現代の遊歩道に近い道幅が想定される。調査区南側で検出したSD04が山側の側溝になる可能性がある。SD04は幅40cm、深さ25cmの規模で、10cm以下の礫を多く含む。SD04の北側は搅乱により失われたとみられる。

（常深）



第16図 A区断面図(4)



### 3. B区の遺構（第7・18・19図）

**近世の道路** 両側に側溝SD11・SD12を設ける。基本的に地山を路面とするが、第19図c断面では薄い造成土とみられる層がある。側溝間の路面幅は3.6～3.7mである。路面はわずかに凹面となっている。人の往来により窪んだ結果と推測するが、両側に側溝を設ける構造から、本来は水平かやや中央が盛り上がる面であったと考えられる。道路の斜度は9.5°である。走行方向はN-19°-Wで、現在の遊歩道より約5°西に傾いている。南部で路面に礫が密集する地点があるが、この付近は地山に多数の礫を含むため、人為的に敷いた砂利かどうか不明である。人為的に敷かなくとも地山の礫が自然の砂利敷として機能した可能性もある。

東側側溝のSD11は幅0.4～0.95mで、北側ほど幅が広い。これは、SD11の東側の地山が北にくほど路面との比高差が大きく、より上から掘り込まれる分、法幅が広いためである。深さも北部が0.65mと深く、南部では0.15m程度である。西側の側溝SD12は、南西部で一部のみ検出した。幅0.4～0.6m、深さ0.13～0.3mである。底面は南部が2段にわたり深掘りされている。SD12の西壁面は、そのまま山の斜面に移行するような状況である。

遺物は、SD11から越中瀬戸、小杉、肥前、寛永通宝、SD12から肥前、釉薬の棟瓦が出土した。出土遺物から、この道路の使用は近世後期を主体としつつ、明治期にも及んだとみられる。本道路は、A区の上層路面に対応する。

道路外であるSD11より東側は、調査では地山まで検出したが、近世の地表面はこれより上の層（第19図b断面の22層あたり）とみられる。したがって、SD11のすぐ東にある地山の落込みも近世段階では埋没していて、実際の斜面はもう少し東側にあったであろう。なお、この落込みに堆積した流土からは須恵器が出土している。北東部にある円形状の窪みは倒木痕と推測する。

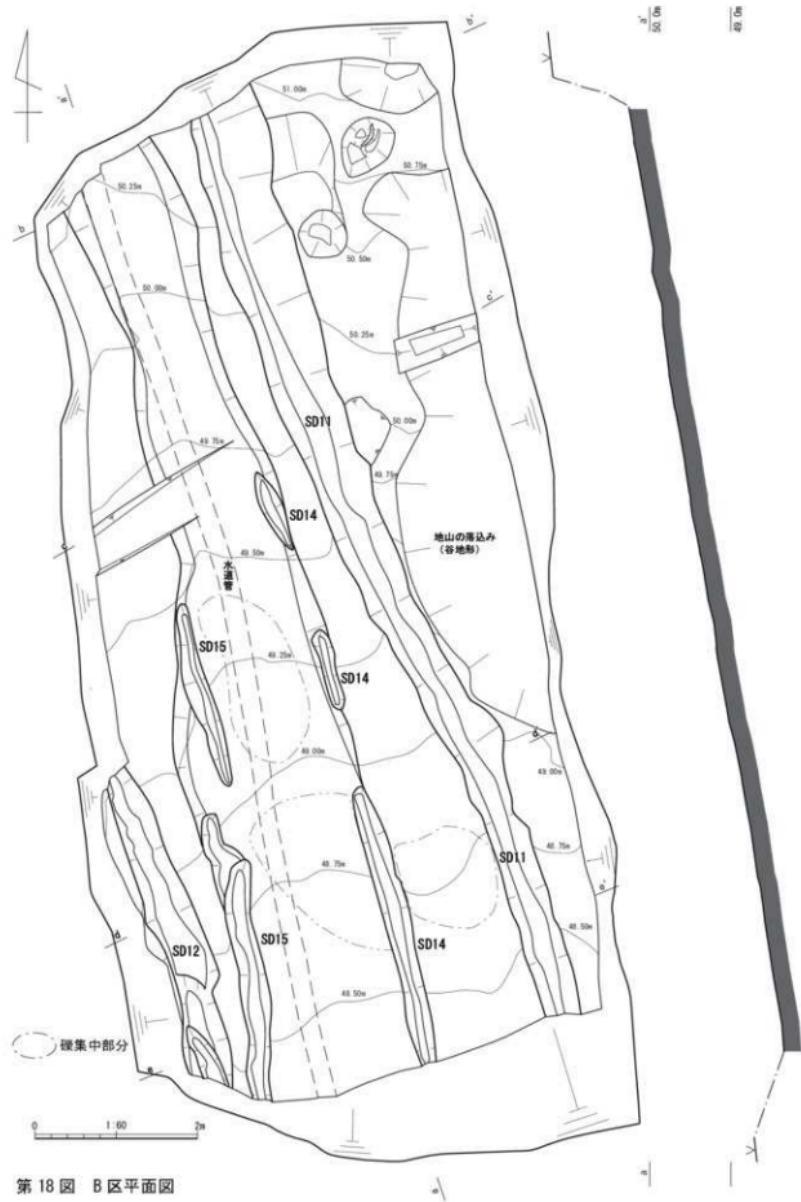
**近代の道路** 近世道路より幅を狭め、両側にごく浅い側溝SD14、SD15を設ける。側溝の間の路面幅は1.40～1.85mで、路面は若干窪む。側溝は調査区中央で一部途切れ、北部では認められない。ただし、路面跡とみられる窪みが北部にも続くことから類推すると、北部では道路幅は1.2m前後に狭くなると推測される。道路の走行方向はN-14°-Wで、近世道路の主軸より約5°東向きとなり、現在の遊歩道と同じである。

側溝SD14とSD15は、いずれも幅0.15～0.35mで、深さは0.01～0.1mとごく浅い。

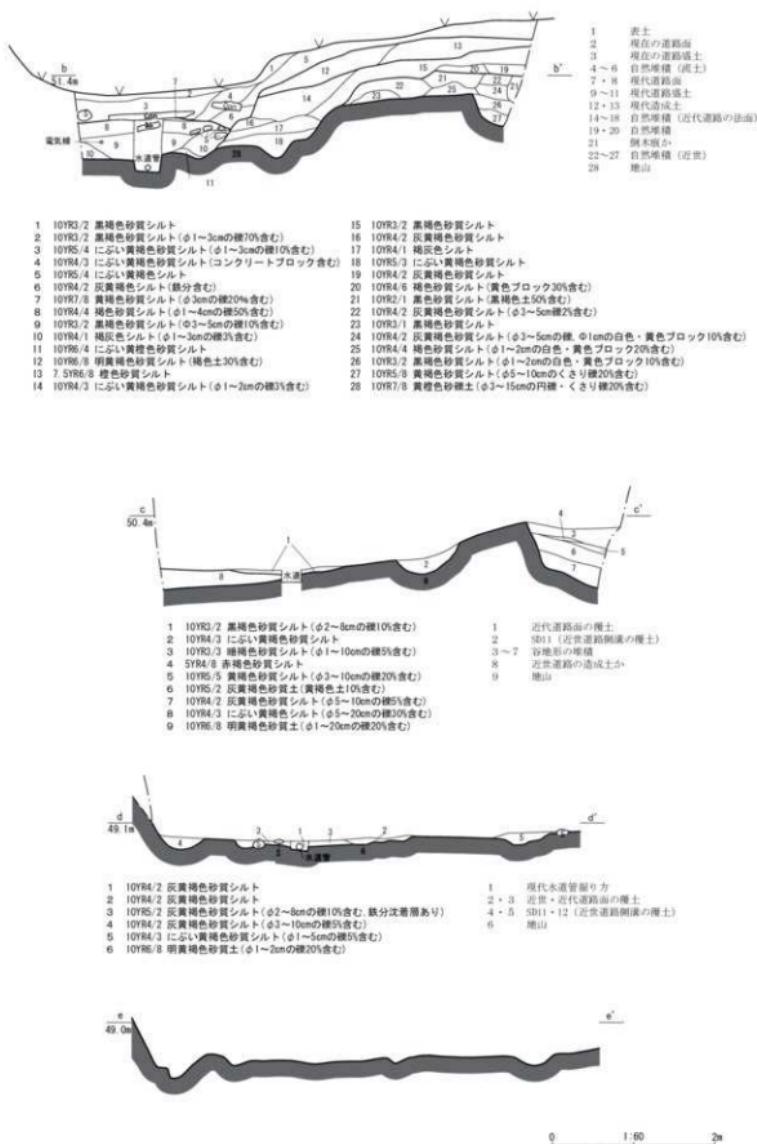
側溝からの出土遺物はなかったが、路面上から近世の越中瀬戸、近代の釉薬瓦や瓦窯道具、ガラス、陶磁器等が出土した。

**現代～現在の道路** 平面的には検出していないが、北壁断面で現代（昭和期）の道路面を確認した。第19図b断面7・8層が該当し、7層は3cm前後の礫を多く含み、路面の砂利と推定される。また、直上にコンクリートが敷かれる。この道路面から水道管が埋設されている。その後、30cm余りの盛土が行われて、現在の遊歩道が整備されている。B区における現在の遊歩道の幅は1.5～2.3mで、北に向かって幅を減じる。走行方向、幅とも上記した近代の道路に近い。

（野垣）



第18図 B区平面図



第19図 B区断面図

## 第4節 遺物

### 1. 概要

出土遺物はA区、B区合わせて14箱あり、このうち12箱はA区からの出土である。さらにA区の遺物のうち、およそ9割が上部から流れ込んだ流土や表土層から出土している。近世陶磁器が特に多く、他に瓦、石製品、金属製品がある。近代遺物も一定量出土しており、釉薬瓦、瓦窯関係遺物、陶磁器等がある。近代の瓦関係遺物は、調査区上方(北)(第1図の主塔掘削範囲付近)に存在した瓦窯「八田瓦」に伴うものである。ほかに古墳時代または古代の須恵器の破片が少量出土している。

以下、A・B区それぞれで出土遺構・層位ごとに記述する。

### 2. A区の出土遺物(第20~34図)

**S001** 1~9は肥前である。1~6は染付碗。4は口縁輪花の端反碗で、外面に花菱唐草文、内面口縁部に菱繋ぎ文を描く。5は青味のある透明釉で、外面は斜格子文である。3・6は白玉粉の焼締痕がある。3は高台内に銘「口造」、その上に白玉粉で文字(不明)が書かれる。6は高台内に銘「靖年製」と朱書(不明)がある。7は菊皿、8は染付の輪花皿である。9は京焼風の肥前陶器碗で、浅黄橙色の素地に浅黄色の灰釉が掛かる。5は18世紀前半、9は17世紀後半から18世紀前半で、その他は19世紀主体である。10~13は瀬戸美濃の染付碗である。10の丸碗はコバルト色の染付で近代のもの。13の端反碗は口紅装飾である。14は瀬戸美濃系の皿で、青色の上絵で捻り文を描く。19世紀代である。15~18は越中瀬戸である。15の鉄釉碗は内面に茶筅擦れがある。17は鉄釉の秉燭である。底部は回転糸切りで、灯芯立てに炭化物が付着する。18は鉄釉の水指で、口縁と底部は無釉である。19~21は瓦質土器の鉢類である。20の火鉢は草花文を押捺する。22は銅製の簪、23・24は鉄釘である。

**SX002** 25は肥前染付の瓶類で、内面無釉である。

**S003** 26は素焼の鉢で、方形か。浅黄橙色の胎土で硬質である。27~30は瓦窯道具で、27~29は長棒、30は栓ころと呼ばれるものである。31の釉薬桟瓦とともに、近代の「八田瓦」の遺物である。

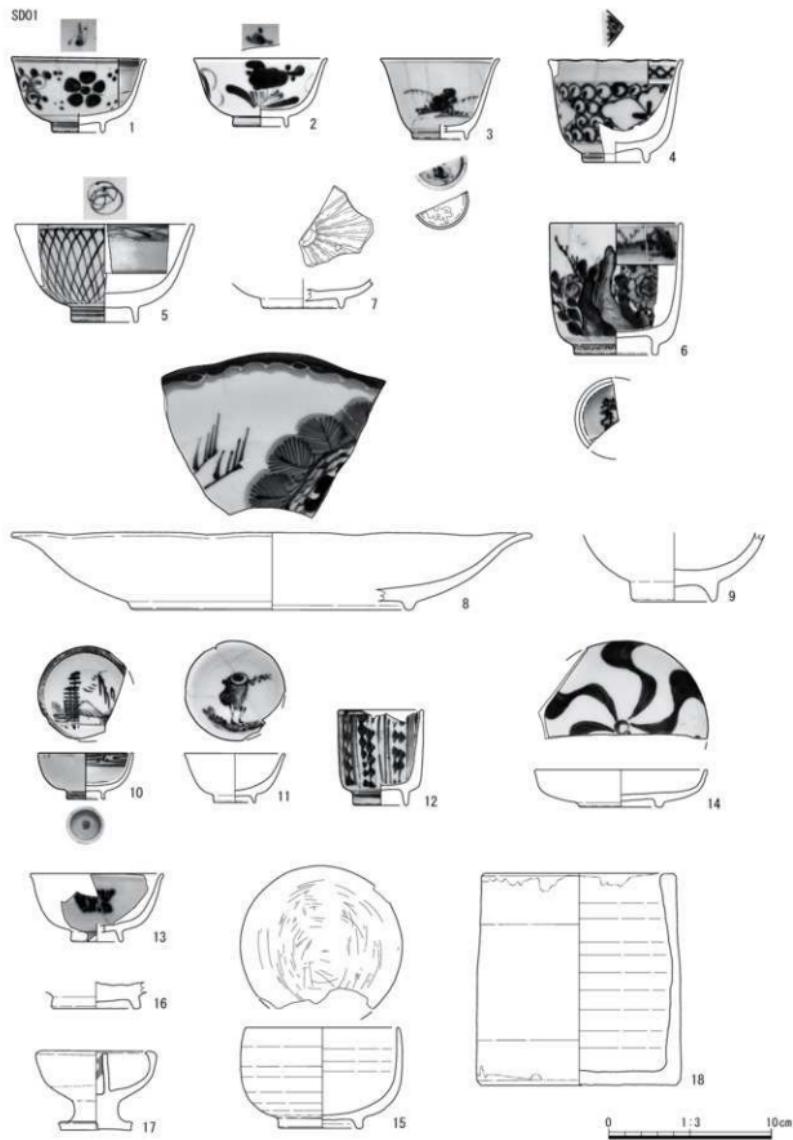
**S004** 32は越中丸山の可能性がある碗である。薄い鉄釉の上に灰オリーブ色の灰釉を全面施釉し、褐灰色の灰釉を掛け流す。疊付から底部内面は無釉である。19世紀である。

**S006** 33~35は肥前の染付である。34・35は同一個体の可能性がある輪花皿で外面に貫入が入る。蛇ノ目凹形高台。19世紀代のもの。36~38は越中瀬戸で、36の碗は内外面灰釉の上に外面は鉄釉を重ね掛けする。37は内外面鉄釉の壺類で、外面の釉は光沢がある。38の鉢類は体部外面に鉄釉を掛けける。39は粘板岩製の硯である。裏面には「上々高田石 たつ」と刻まれる。

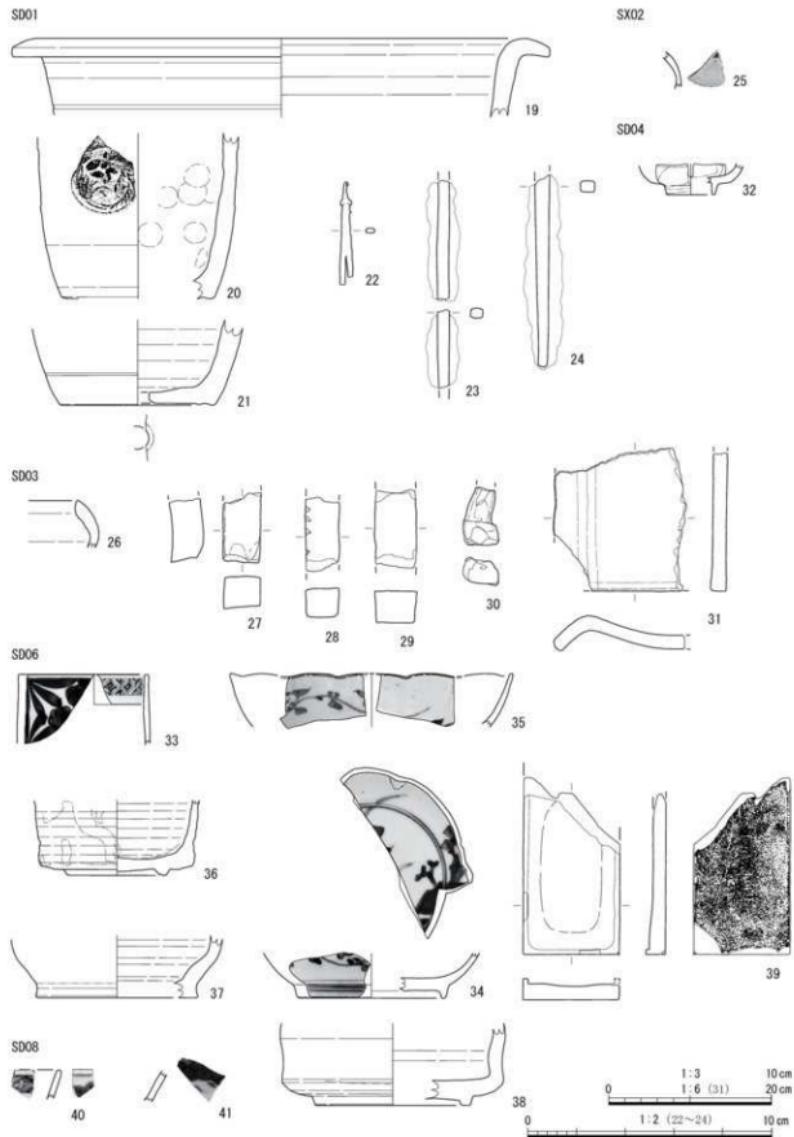
**S008** 40・41は肥前の染付碗である。

**下層路面** 42は肥前の擂鉢である。付け高台で、全面に鉄釉を施す。43は煙管の吸い口である。厚さ1mmの銅板を六角形に丸める。中に径7mm、孔径3mmで漆仕上げの竹(羅字の一部)が残る。

**上層道路古段階造成土** 44は肥前の染付皿である。見込みを蛇ノ目状に釉剥ぎする。18世紀前半のもの。45は肥前系陶器の碗である。オリーブ黒色の灰釉の上に灰白色釉を漬け掛けする。高台疊付は無釉で砂が付着する。18世紀代か。46・47は越中瀬戸である。46は鉄釉の半筒碗。47は全面鉄釉を施す擂鉢で、にぶい橙色の胎土は石英や白色粒を多く含む。



第20図 A区出土遺物 (SD01)

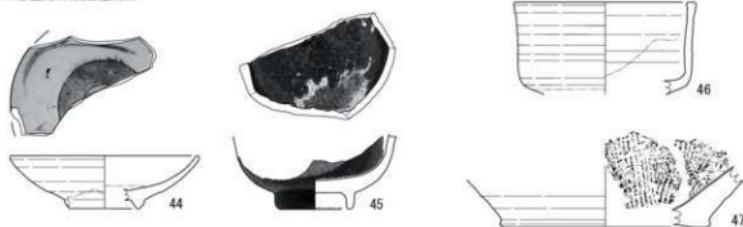


第21図 A区出土遺物 (SD01・03・04・06・08、SX02)

下層路面



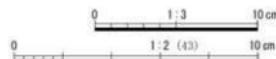
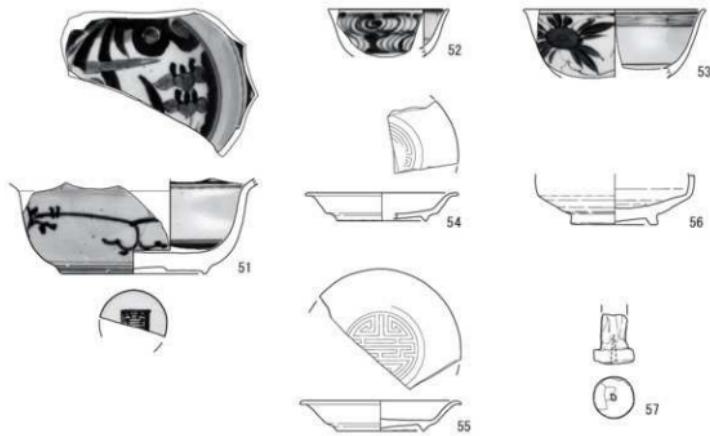
上層道路古段階造成土



上層路面（古段階）



上層路面（新段階）



第22図 A区出土遺物（道路面・造成土）

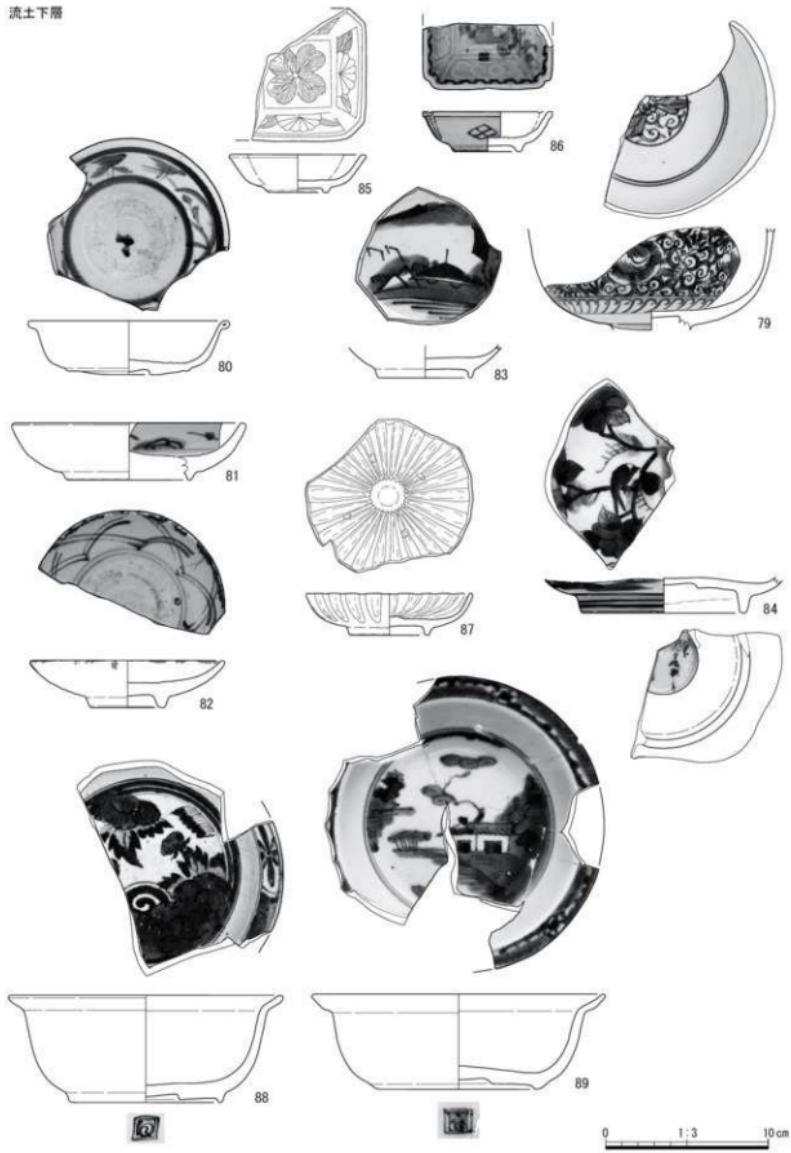
流土下層



第23図 A区出土遺物（流土下層 肥前（1））

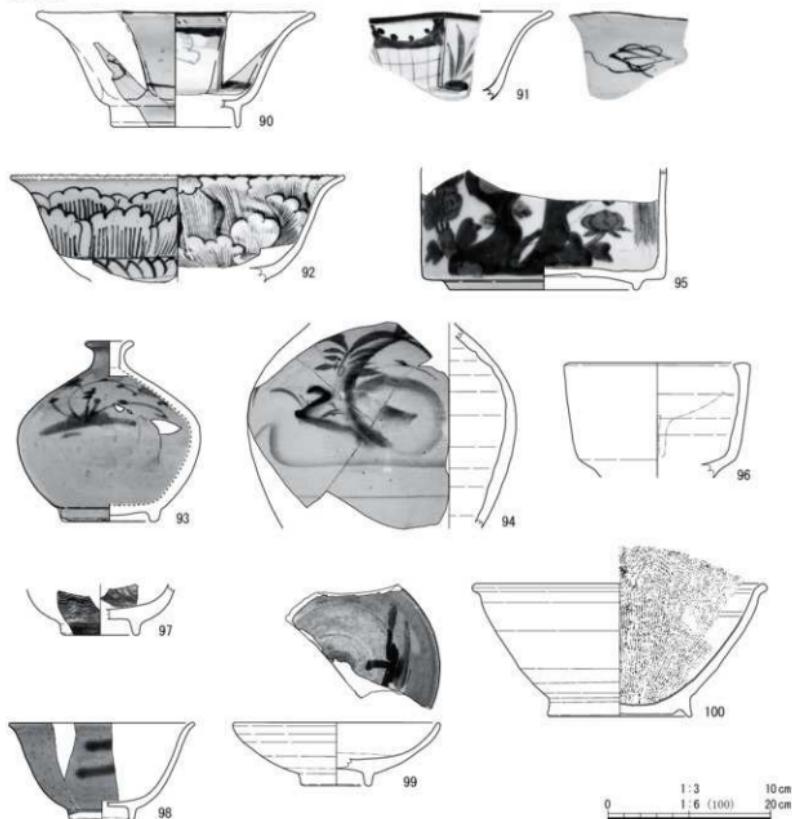
0 1:3 10cm

流土下層



第24図 A区出土遺物（流土下層 肥前（2））

## 流土下層



第25図 A区出土遺物（流土下層 肥前（3））

**上層路面（古段階）** 48は瀬戸美濃の染付碗で、外面に流水文を描く。貫入が入る。49は在地系の陶胎染付の碗で、蛸唐草文を描く。50は在地産の水注で口縁端部以外に鉄軸を施す。

**上層路面（新段階）** 51は肥前の染付鉢である。蛇ノ目四形高台の中央に鉤「簡江」を記す。釉は明青灰色で気泡を多く含む。19世紀代のもの。52～55は瀬戸美濃である。52は染付で流水文を描く端反碗である。白玉粉の焼継痕がある。54・55は型打成形の白磁皿で、見込みに幾何学文が刻まれる。19世紀代のもの。56は越中瀬戸とみられる灰釉碗で、内面は無釉で見込みに煤が付着する。57は瓦窯道具の栓ころである。鉄軸が掛かる。

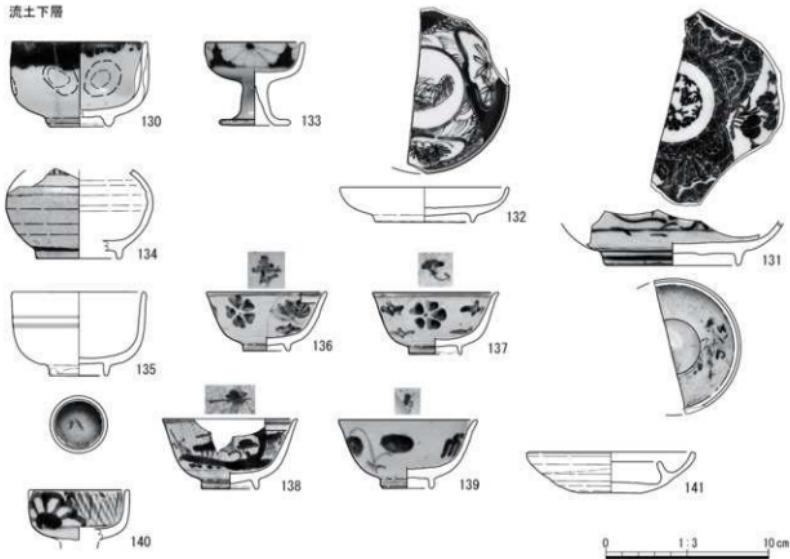
**流土下層** 上方の峠から流れ込んだ土に混入する遺物群である。第14図断面cの炭化物層（19層）の周辺で出土したものが多い。丘陵上から短期間に流れ込んだ一括性のある遺物である。肥前・瀬戸

流土下陷



第26図 A区出土遺物（流土下層 濑戸美濃（1））

## 流土下層



第27図 A区出土遺物（流土下層 濑戸美濃（2））

美濃・越中瀬戸・越中丸山・小杉・在地産などの陶磁器がある。19世紀代が中心である。

58～96は肥前磁器である。58～78は染付の碗、79は鉢である。58・59は腰張碗、60・61は半筒碗で、体部外面は58が瓔珞文、59が丸文、60が半菊文、61は青磁染付で無文である。60・61は見込みに五弁花、61は高台内に銘「簡江」を記す。60は青灰色の釉で貫入が入る。58は18世紀後半、61は18世紀代のもの。62～71は端反碗である。68は蛇ノ目高台。体部外面は62が二重斜格子、64が笹・舟、66が蘭、67が不明、68が松葉、69が「寿」、71が二重格子、ほかは草花が主文様である。70は無文である。63・64は見込みに「寿」、68は環状松竹梅を描く。64は見込みに目跡が4ヶ所ある。65～68には白玉粉による焼継痕があり、高台内に朱書が残るのは65・66（不明）、69「茶や□□□□」である。72は丸碗、73は浅半球形の碗である。体部外面は72が草花・柴垣、73は梅を描く。72は釉薬中の気泡の破裂が顕著である。73の見込みには鉄釉溜りがある。71・72は白玉粉による焼継痕があり、それぞれ高台内に朱書「岐口」、「岐口」がある。74は矢羽根文の腰張碗である。75～78は広東碗である。体部外面は75が雪持ち笹、76が笹、77が扇面・草、78が蝙蝠。75・76の見込みは「寿」を描く。75・76には白玉粉による焼継痕、76・77の高台の内外面には砂の付着がある。79は鉢で、線描で牡丹唐草を描く。80～84は染付の皿である。80～82は見込み蛇ノ目釉剥ぎ。80は玉縁状の口縁で、蛇ノ目回形高台となる。80は明青灰、81は明緑灰色の釉である。82は口唇部に炭化物の付着があり、灯明皿に転用か。83・84には白玉粉による焼継痕があり、84は高台内に「岐口」と朱書される。85・86は型打成形の白磁角皿で、付け高台である。85は四弁花・半菊、86は梅花を陽刻する。86は外面に菱文、内面に櫛齒文・梅花文の上絵があり、越中丸山のものとみられる銘が入り、絵付けは越中丸山か。87は口紅装飾のある輪花皿で、明緑灰色の釉に貫入が入る。見込みに4ヶ所

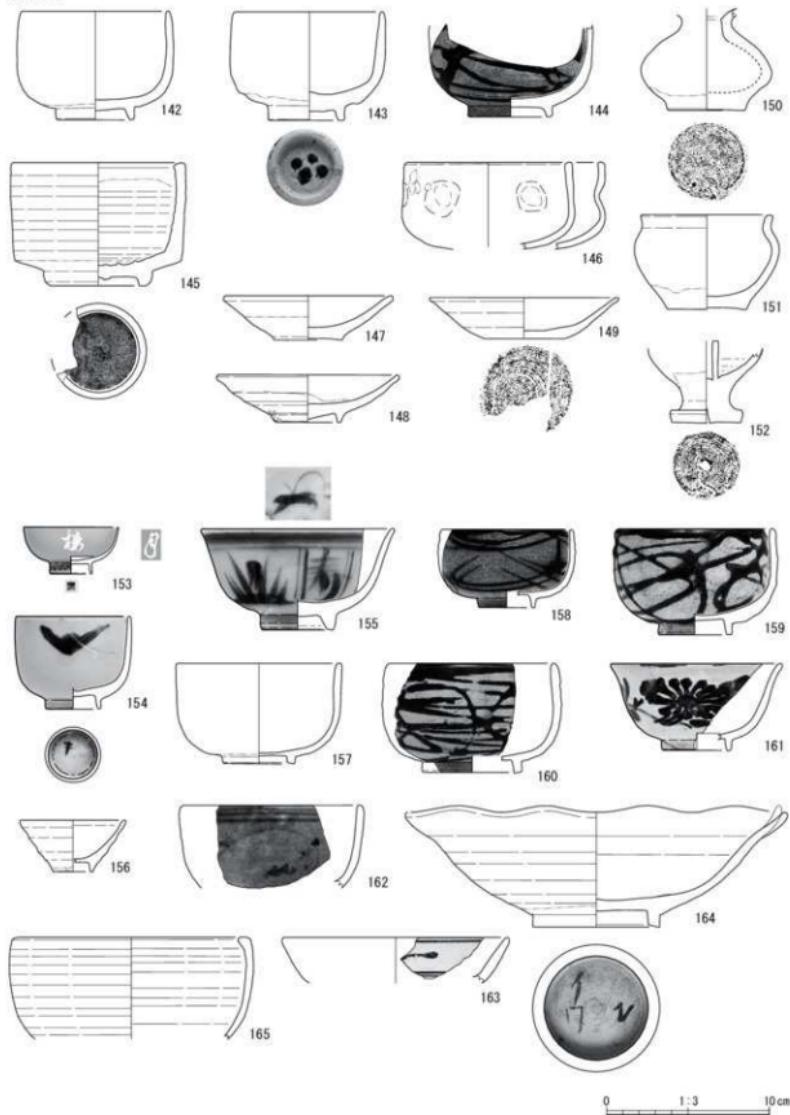
の目跡が残る。88・89は口縁部が外反する染付の鉢で、蛇ノ目回形高台となる。釉剥ぎ部分に砂の付着がある。外面は青磁釉、内面は透明釉で、89は気泡が多く、内面に貫入が入る。88は内外面に貫入がある。88は見込みに牡丹文、高台に渦福を、89は見込みに家屋・松、高台内に銘「青」を描く。88が18世紀後半、89が19世紀である。90・91は同一個体の可能性がある染付の八角鉢である。体部は型打成形で、口縁端部はわずかに内傾させる。高台内は釉剥ぎ。外面は宝文、内面は窓絵を描く。白玉粉による焼継痕がある。92は型打成形の輪花鉢で、白玉粉による焼継痕がある。93は染付の油壺で、梅花文を描く。釉は明オリーブ灰色である。17世紀代のもの。94は染付の瓶類で、笛文を描く。釉は明緑灰色である。95は染付の花生か、柳・牡丹を描く。蛇ノ目回形高台となる。96は青磁釉の香炉である。内面は体部無釉で、底部に砂が付着する。97～100は肥前の陶器である。97は刷毛目唐津の碗で、光沢のある透明釉がかかる。高台疊付は釉を剥ぎ取る。98は京焼風の唐津で、胎土は淡黄色である。光沢のある透明釉に細かい貫入が入る。99は灰釉の丸皿で、見込みは蛇ノ目釉剥ぎで、鉄絵を施す。100は鉄釉の描鉢で、高台を含む全面に施釉する。見込みは摩滅する。

101～134は瀬戸美濃の磁器である。101～130は碗で、125・127・130以外は染付である。101は呉器形の碗である。外面は菊文、見込みに幾何学文を型押しする。102は浅半球形の碗で、高台内に朱書「峰伊平」がある。103・104は筒丸碗で、103は草・蟹、104は筐・蟹を描く。105は稻束文を描く腰張碗である。106～126は端反碗である。外面の主文様は、流水(107)、竹(108)、網干(109)、丸文(110)、微塵花唐草(115)、千鳥(116)、秋海棠(119・123)、吉祥字「福・禄・寿」「寿」「寶」(118・119・120・122・123)、隸書体文(121)のほか、草花などがある。117は蛇ノ目高台、121・123は口紅装飾を施す。124は口縁を輪花として、花菱唐草文を描く。125は見込みに富嶽三十六景「武陽仙島」を上絵で描く。112・116・119・123は白玉粉による焼継痕がある。高台内の朱書は111「峰茶やカ」、112「峰」、119「□□」、120「峰口」がある。127は口紅装飾の丸碗で、上絵で花を描く。128の碗は扇面に松竹梅を描く。129の碗は高台内に朱書「茶」がある。130は鉄釉の拳骨碗で、白玉粉による焼継痕がある。131は染付の皿で、蛇ノ目回形高台である。内面は型紙絵で牡丹・環状松竹梅を描く。白玉粉による焼継痕があり、高台内に判読不能の朱書がある。132は口紅装飾の丸皿である。上絵で松・花・波を描くが、越中丸山の上絵の可能性がある。133は染付の仏飯器で、半菊文を描く。脚部の疊付から内面は無釉である。134は上絵で横線を描く壺である。内面は無釉。135～141は瀬戸美濃の陶器である。135は腰張碗である。灰白色の灰釉の下に染付らしき圖線がわずかに透ける。高台内に墨書「八」がある。136～139は陶胎染付の端反碗である。外面の主文様は136が菊・五弁花、137が五弁花、138が樹木、139が花・源氏香である。140は陶胎染付の仏飯器で、半菊花と斜格子を描く。141は灰釉の灯明受皿である。

142～152は越中瀬戸である。142～144は鉄釉の腰張碗で、削り出し高台である。143は高台内に釉滴がある。144は光沢のある黒釉を流し掛ける。145は灰釉の半筒碗で、内面口縁部～外面部まで施釉。高台内に墨書「金カ口」がある。146は鉄釉の拳骨碗である。赤黒色の鉄釉の上に長石釉を散らす。18世紀代のもの。147・148は丸皿である。147は底部回転糸切りで、内面から口縁部外間に鉄釉を掛ける。口縁部に煤が付着し、灯明皿に転用か。148は削り出し高台で、口縁部外間に褐色の鉄釉を掛ける。149は底部回転糸切りの素焼皿。150は灰釉の油壺で、底部は無釉である。外面に煤が付着する。151は鉄釉の小甕。152は高台の付く秉燭で、内面全面と体部外間に鉄釉を施す。

153～165は越中丸山である。153～155は磁器の碗である。153は薄手の丸碗で、高台に櫛齒文、高台内に銘、体部には「樓」「月」の文字が残る。近代のもの。154の筒丸碗は白玉粉による焼継痕があり、高台内に朱書「キ」がある。155は「寿」文を描いた端反碗である。気泡を含む青磁釉が厚く掛かり、

流土下層



第28図 A区出土遺物（流土下層 越中瀬戸・越中丸山）

見込みに5ヶ所の目跡と高台周辺に釉溜りがある。156～165は陶器である。胎土は灰色味が強い。156は軸轆形の小碗で、鉄軸に灰釉を重ね掛ける。157～160は腰張碗で、底部を極めて薄く削り込むものである。157は内外面灰釉の上に、外面鉄軸、内面透明釉を重ね掛ける。158～160は外面に鉄軸を流し掛ける。161の端反碗も底部を薄く仕上げる。灰釉の上に鉄絵で草花を描く。白玉粉による焼継痕がある。162の腰張碗、163の丸皿は陶胎染付である。164は鉄軸の輪花皿で、見込みに目跡がある。高台内に墨書「イワカ」・「マカ」がある。165は内外面鉄軸の鉢で、口縁端部が内側に肥厚する。

166～178は小杉である。166・167は鉄軸の碗である。166は高台内に墨書「□□」がある。167は底部を薄く仕上げ、口縁は内側に肥厚する。168～171は腰張碗で、168・169は銅緑釉、170は黄褐色の鉄釉、171は鉄軸を流し掛ける。168・169・171は底部を極めて薄く削り込む。172～175は瓶である。玉縁状口縁の172は透明釉に灰釉を上掛けする。173・174は薄手の作りで、内面は鉄軸、外表面は鉄軸と灰釉を上下に掛け分ける。175は底部外表面が無釉、外表面は灰釉、内面は鉄軸を掛けける。176は土瓶である。内面下半に灰釉、内面口縁部～外面上半まで銅緑釉を施釉する。外面上半に煤が付着する。177は鉄軸の鉢で、口縁が内側に肥厚する。高台内に墨書「石仏カ」がある。178は擂鉢で、内面胴部鉛釉、内面口縁部から外表面全面は鉄釉を掛けける。卸目の上端は口縁下で丁寧にナデ揃える。

179は京・信楽系の土瓶蓋である。内面は灰釉で、口縁部に鉄軸と白泥土を流し掛ける。

180～189は在地系の陶磁器である。180は色絵磁器の小碗、181～189は陶器である。181は灰釉の拳骨碗である。轆轤痕が強く、高台内には渦巻状の削り痕がある。高台周辺は鉄軸を化粧掛けする。182は褐色の鉄軸を施釉した半球形の碗である。183は鉄軸の土鍋蓋である。口縁部と体部中位、摘み内側は無釉である。体部中位は飛び鉋を入れた上に長石釉で花カを描く。184は素焼きの行平鍋である。体部上位に飛び鉋を入れる。底部に墨書「チヌオカ」がある。185は鉄軸の行平鍋で、口縁部内面と体部下半～底部外表面は無釉である。体部上位に飛び鉋を入れる。186は素焼きの急須である。型成形で、肩や注口内面に布目が残る。口縁は輪花とする。187・188は水注である。内面は鉛釉、外表面は光沢のある鉄釉を掛け、口縁端部と底部外表面は無釉である。189は瓶で、外表面は白化粧土の上に鉄絵を描く。

190は產地不明の染付皿である。気泡の膨れ・破裂が痘瘍状にみられる。白玉粉による焼継痕がある。

191～193は瓦質土器の火鉢である。191は水平に折れ曲がる口縁部である。192は体部に紗綾形のスタンプが押される。193は三足になる底部で、内面には4条1単位の櫛目が格子状に入る。

194の須恵器は、穿孔された胴部に口縁部を貼り付けており、平瓶か。

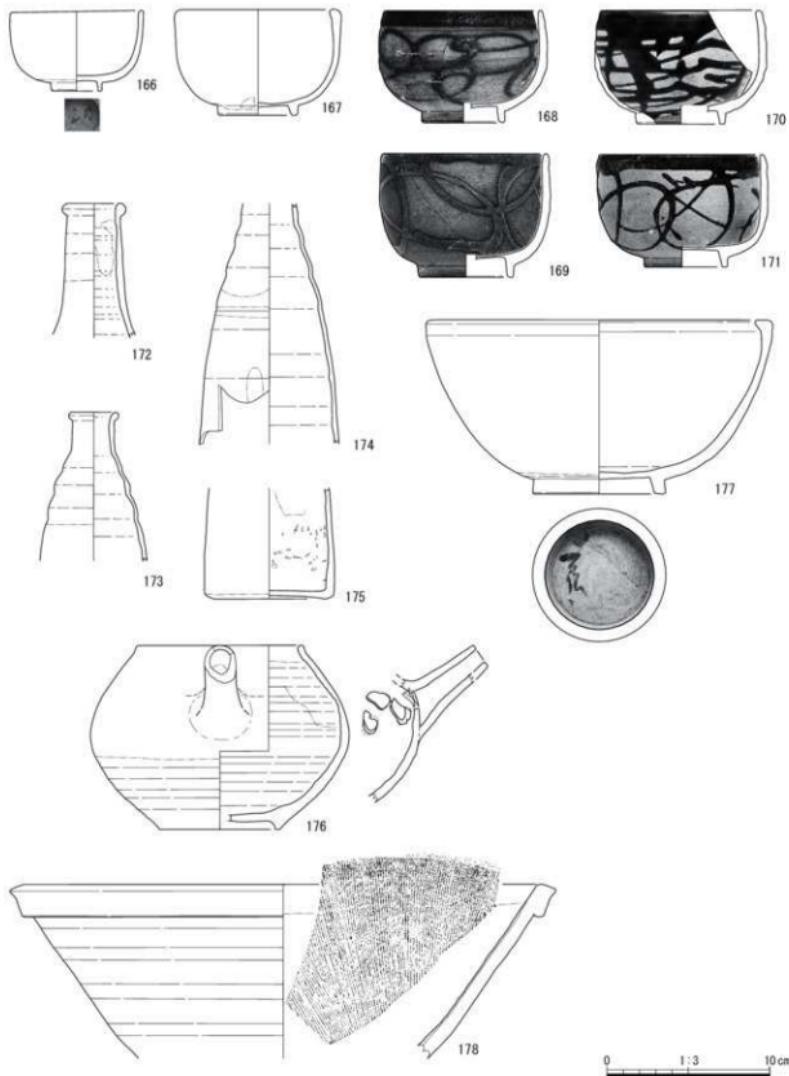
195・196は銅製品である。195は銅鍔（寛永通宝）である。196は煙管の雁首である。薄い銅板を丸めて貼り合わせる。火皿に付着物が残る。

197～203は焼し瓦である。197～199は軒桟瓦である。瓦当文様は丁子梅鉢文、均整唐草文である。197・198の均整唐草文は同范である。200～202は桟瓦である。201の釘穴には釘が残存していた。203は鬼瓦である。下面と左側面下方に穿孔があり、別作りの足を縛りつけるものか。正面にも孔がある。204は灰赤色の釉が掛かる棟瓦である。

**流土上層・表土** 第14回断面cの炭化物層（19層）付近において、流土下層とした遺物より明らかに上位で出土した遺物を流土上層出土遺物とし、他地点の表土・流土出土遺物とまとめて扱った。近世～近現代のものが混在する。

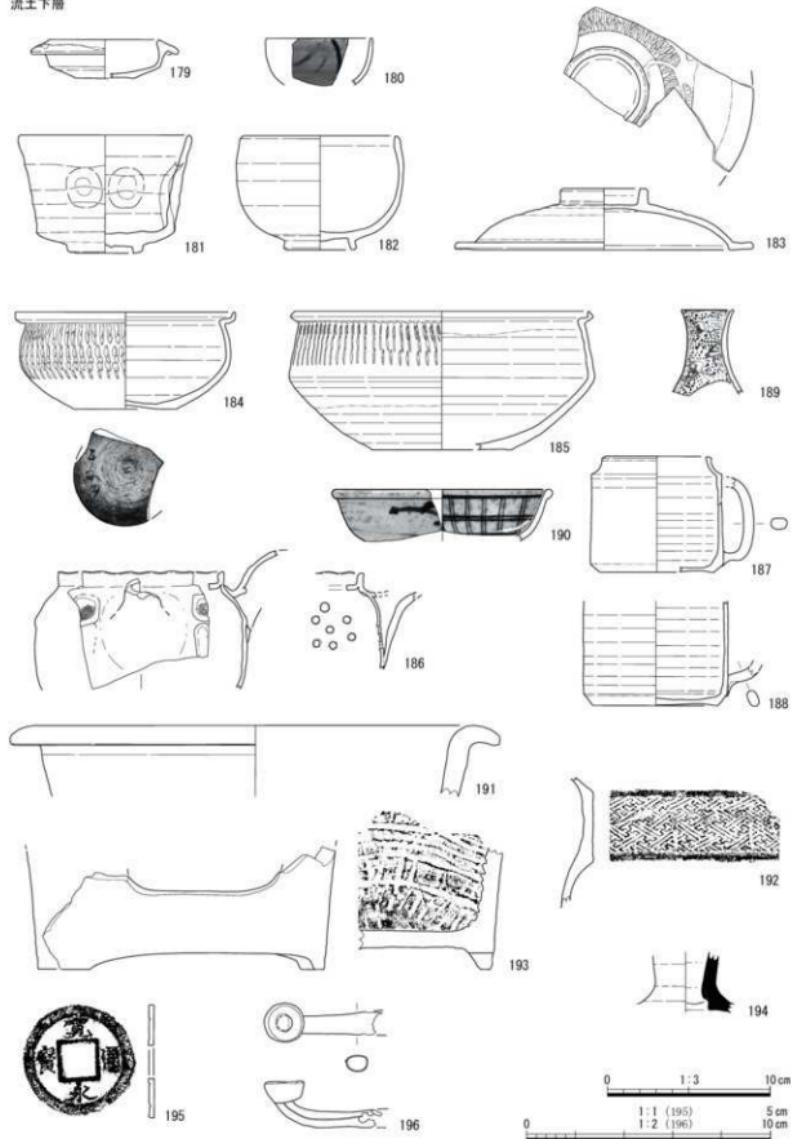
205～215は肥前磁器である。205～213が染付である。205は白玉粉による焼継痕があり、高台内に朱書「茶□□」がある。206・207は見込みを蛇ノ目釉剥ぎする丸皿で、重ね焼き痕が残る。207

流土下層

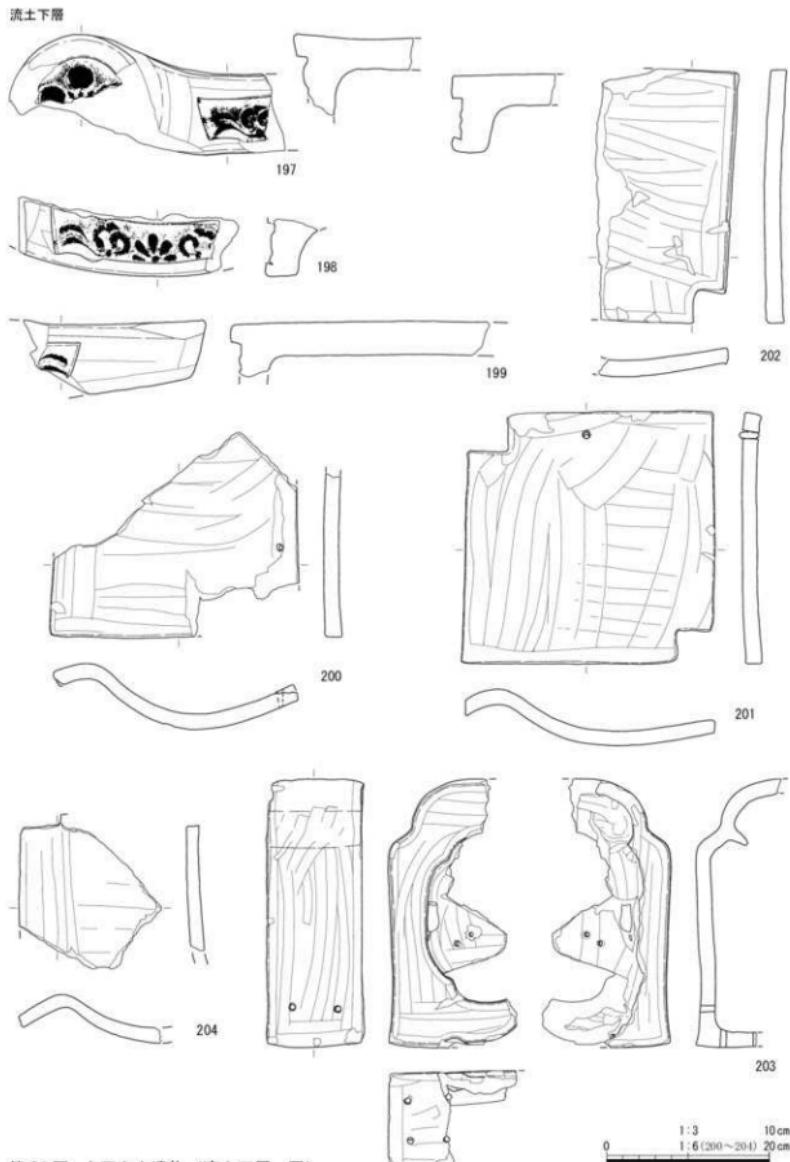


第29図 A区出土遺物（流土下層 小杉）

流土下層

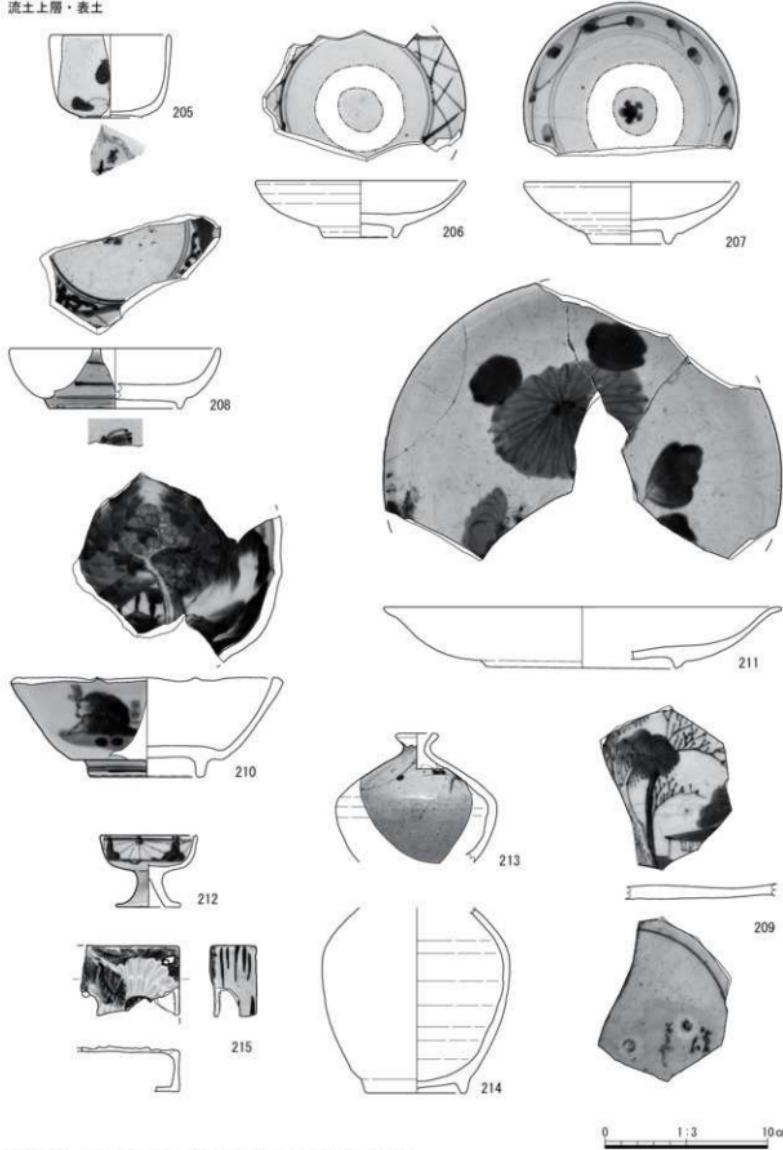


第30図 A区出土遺物（流土下層 京信楽・在地・その他）



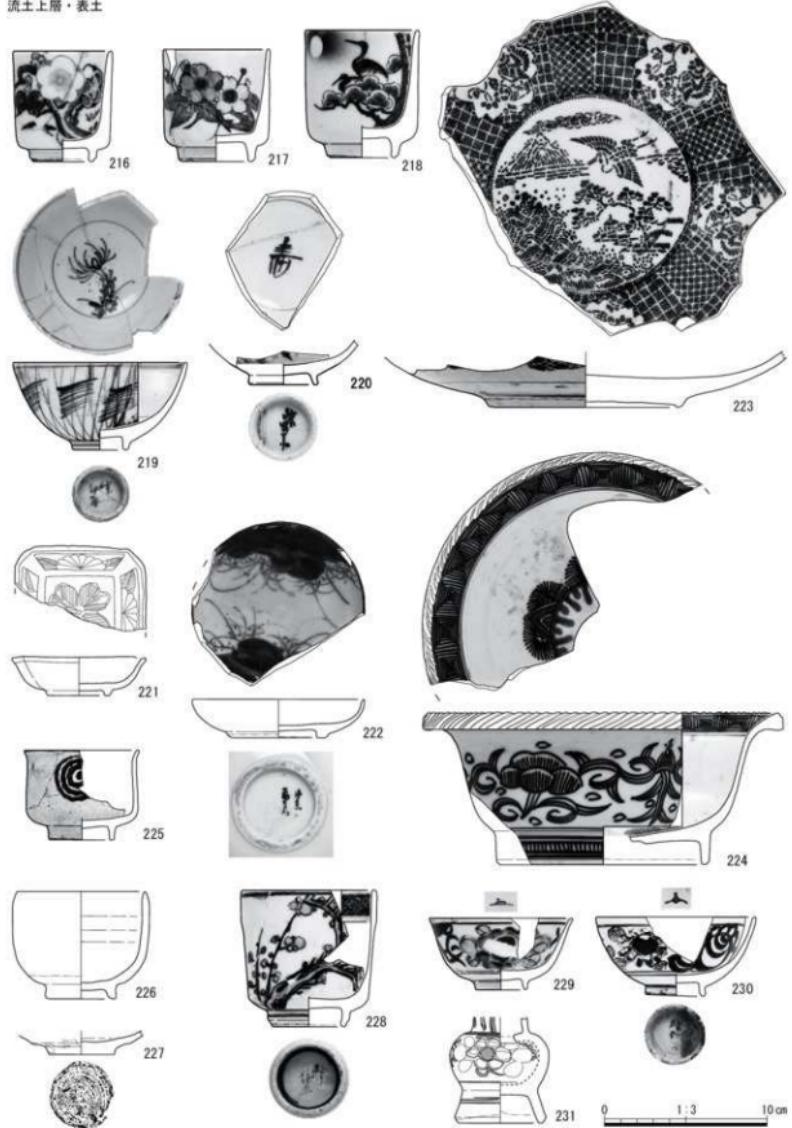
第31図 A区出土遺物（流土下層 瓦）

流土上層・表土



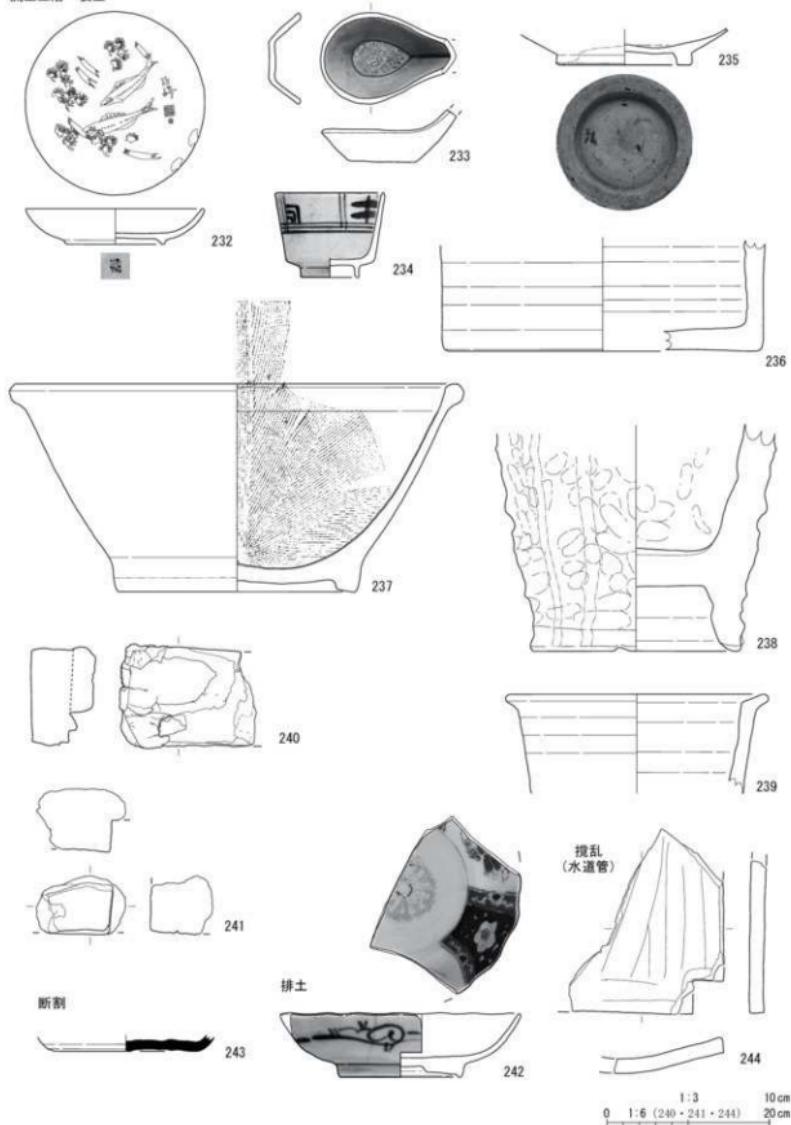
第32図 A区出土遺物（流土上層・表土ほか 肥前）

流土上層・表土



第33図 A区出土遺物（流土上層・表土ほか 濑戸美濃・越中瀬戸・越中丸山）

流土上層・表土



第34図 A区出土遺物（流土上層・表土ほか 美濃焼・斑平焼・在地・その他）

は見込みに五弁花を描く。18世紀後半～19世紀前半のもの。208は染付が緑灰色に発色した丸皿である。17世紀末～18世紀後半のもの。209は皿の底部で、見込みに家屋・樹木を描く。内外面に目跡がある。白玉粉による焼継痕があり、外面に朱書「峠茶や」がある。210は稜花皿で岩・松・東屋・樹木を描く。211は端反皿で見込みに菊を描く。白玉粉による焼継痕がある。212は半菊花文の仏飯器、213は梅花文の油壺である。214は無文の壺で、内面は無釉である。215は水滴である。菊を陽刻した型押し成形で、葉は染付、花芯と側面の横線は上絵である。水孔・風孔があり、底面には布目痕が残る。

216～224は瀬戸美濃の磁器である。216～218は筒碗である。216は染付で梅、217・218は銅板転写でそれぞれ桜・鶴・松・月を描く。219は染付の丸碗である。白玉粉による焼継痕が多数あり、高台内に朱書「峠伊平」がある。220の染付碗は見込みに「寿」を描く。白玉粉による焼継痕があり、高台内に朱書「峠安兵衛」がある。221は型打成形の白磁角皿である。四弁花と半菊花を陽刻する。222は口紅装飾の色絵皿で、水と草を描く。白玉粉による焼継痕があり、高台内に朱書「峠茶屋カ嘉右衛門」がある。223は型紙模絵の皿である。見込みに山水図、五方にある桜花の窓絵には草・鳥を描く。224は口縁端部に刻みを入れる折筋鉢で、蛇ノ目圓形高台。外面に牡丹唐草と雲龍を描く。225は瀬戸美濃の陶器碗である。口銷。高台疊付以外に灰釉を掛け、鉄絵で同心円を描く。

226・227は越中瀬戸である。226は筒丸碗、にぶい黄橙色の胎土に灰黄色の灰釉が掛かる。227は底部回転糸切りの皿、内面と体部外面に暗褐色の鉄釉が掛かる。にぶい橙色の胎土は白色粒を含む。

228～231は越中丸山の磁器である。228は胴部下半に6面の面取りをする染付筒碗で、外面に梅を描く。白玉粉による焼継痕があり、高台内に朱書「峠伊平」がある。229・230は口紅装飾の碗で、上絵で花を描く。230は白玉粉による焼継痕があり、高台内に朱書「峠伊平」がある。231は色絵の仏花瓶である。正面に梅花重ね、両脇に宝文を赤で描き、頸部は正面のみ5条の縱線を緑で描く。

232は統制陶磁器で、美濃焼の皿である。統制番号は「岐334」。見込みに双魚・松を描く。

233は眠平焼（淡路焼）の散蓮華である。灰白色の胎土に鮮やかな黄釉を掛ける。見込みには龍文が陽刻される。全面に細かい貫入が入る。

234～237は在地産の陶器である。234の筒碗は軟質で淡黄色の胎土に、透明釉を掛ける。四方の区画内に記号的な文様を描く。235の皿は、浅黄色の胎土に灰黄色の灰釉が掛かる。高台内に墨書「仏カ」がある。236は匣鉢で、残存部分では無釉である。内外面に煤が付着する。237は鉄釉の擂鉢で、底部外面は無釉である。口縁部内面から外面全面は光沢のある釉である。鉗目は密に引き、上端は口縁部横ナデでナデ消される。

238は产地不明の瓶類である。非ロクロ成形で、付け高台である。全面に顯著な指頭圧痕がみられ、特に胴部外面は文様として压痕を残す。橙色の胎土には石英などの粒子が多く含まれ、器壁は2.0cm以上で肉厚である。高台端部の四方に指頭による窪みをつける。全面に黒色の鉄釉が掛かるが、胴部外面に胎釉の釉垂れ、見込みに厚く胎釉の釉溜りがある。239は瓦質土器で、鉢か。

240・241は堺である。240は土製の堺で、長辺16.85cm以上、短辺12.85cm、厚さ5.0cmである。側面は被熱により一部溶解し、上面に同寸の堺が融着する。241は凝灰岩を切り出したもので、上面から3.5cmの位置に段がつく。表面は被熱する。いざれも「八田瓦」窯との関連が窺える。

**排土・断割・搅乱** 242は排土から出土した肥前磁器の輪花皿である。蛇ノ目圓形高台である。内面は上絵で梅唐草と半菊唐草、見込みに菊花を描く。素地は肥前であるが、絵付けは在地の可能性がある。243は断割11から出土した古代の須恵器坏身、244は水道管の搅乱から出土した棟瓦（焼し瓦）である。

（常深）

## 3. B区の出土遺物（第35～37図）

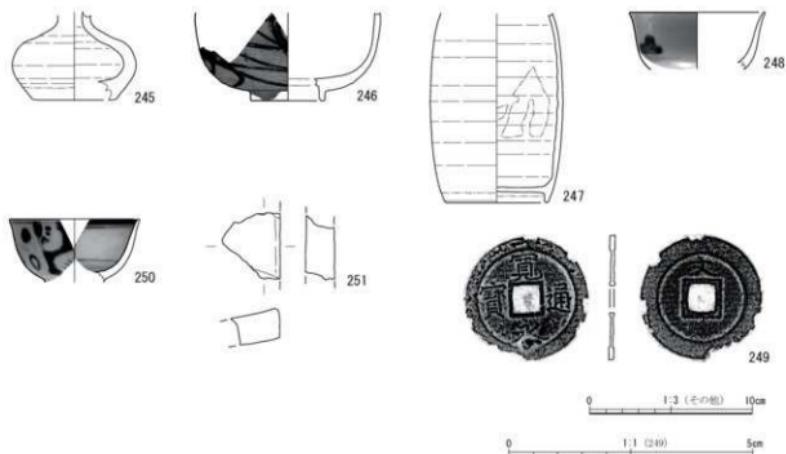
SD11 245は越中瀬戸の油壺で、内外面は灰釉施釉である。246は鉄釉を流し掛けした小杉の腰張碗である。247は内外面鉄釉の瓶類で、在地産か。内面は一部施釉がない部分がある。248は肥前の端反碗である。249は寛永通宝である。裏面に「文」の字のあるいわゆる文錢（1668～1683年）である。

SD12 250は肥前の端反碗、251は光沢のある黒褐色釉の棧瓦である。

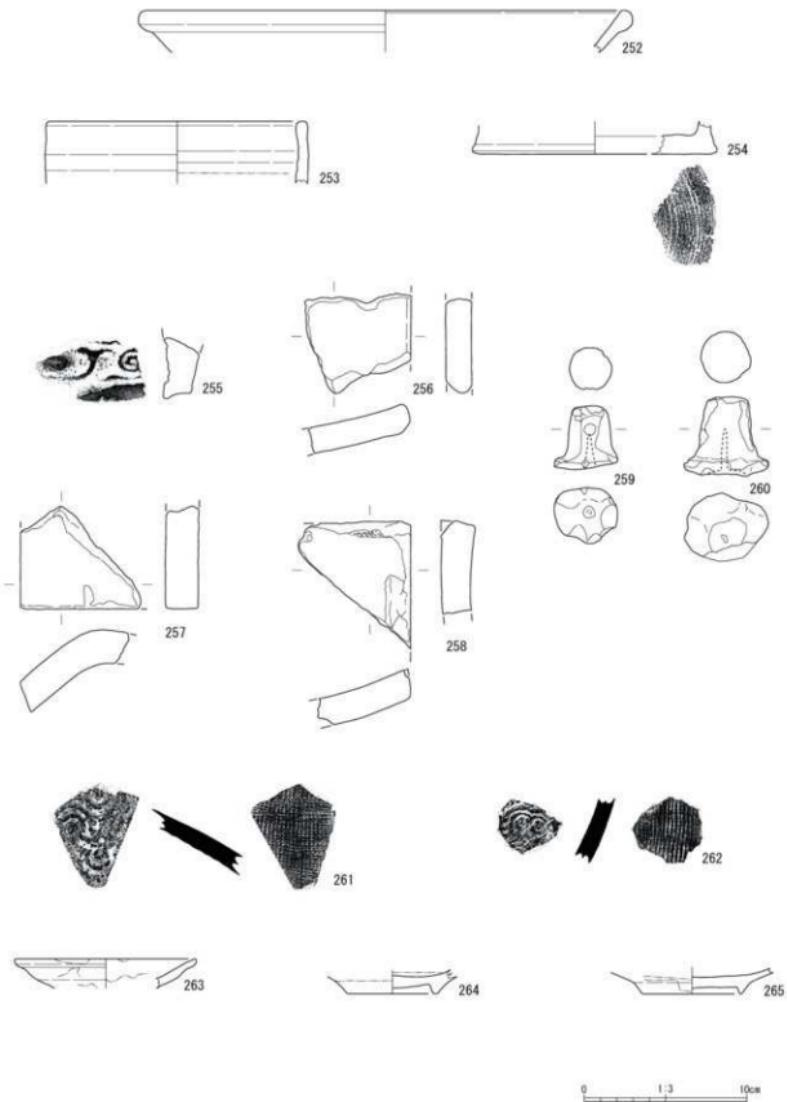
近代道路直上 252は素焼きの陶器の鉢である。253・254は越中瀬戸の水指か。254の底面は回転糸切りである。255～258は黒褐色～暗赤褐色釉の棧瓦である。255の軒棧瓦の瓦当文は、中心に玉、横に唐草を配する。259・260は瓦焼成の窯道具、栓ころである。259は底面の一部、260は全体に釉がかかる。底面から中央付近まで細い穴が開く。260は側面に帶状、また上面に不整形状の削られたような跡が残る。このほか図示していないが、同じく瓦窯道具である長棒の破片も出土している（図版28）。これら窯道具や瓦は、すぐ上方に存在した「八田瓦」の窯場で焼成・使われたものであろう。

表土・流土 261・262は須恵器の甕である。外面はカキメと格子状叩き、内面は同心円当て具痕がある。263～265は越中瀬戸の皿である。264は見込みに円形の重ね焼き痕が残る。263は灰釉、264・265は鉄釉施釉である。266は瀬戸美濃の染付筒丸碗である。267は瀬戸美濃の端反碗である。268は磁器の丸碗で、六歌仙とみられる人物と和歌からなる染付文がある。269は合子の蓋である。内面中央に、L字と文字らしきものからなる小さな刻銘がある。270は肥前磁器の皿で、蛇ノ目回形高台である。271は瀬戸美濃の型打成形の皿で、見込みは幾何学文がある。272は黒褐色釉の軒丸瓦で、巴文の瓦当である。瓦当の復元径は約17cmである。273は粘板岩製の硯である。使用による摩滅が顕著である。

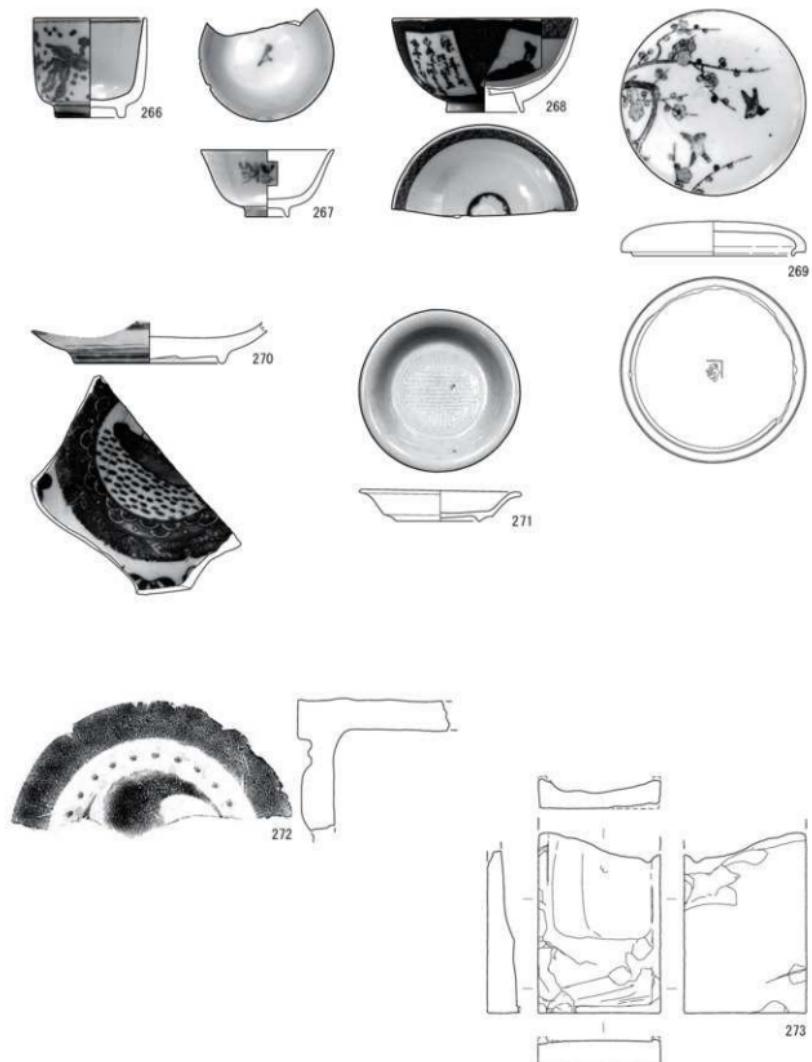
(野垣)



第35図 B区出土遺物（1）



第36図 B区出土遺物(2)



第37図 B区出土遺物(3)

第1表 A区遺物観察表(1)

寸法の( )は復元値。○は残存値を示す。軸の色調は、無軸の場合は、外側の色調を記載。

番号	遺構 部位	種別	器種等	産地	寸法(cm)			釉裏	色調		成形・整形	文様(外面/内面)、その他	
					口径	底径	器高		輪	勘土			
1	S001	磁器	罐反側	肥前	8.1	2.9	4.65	透明釉 明暦灰	NW/0 灰白	ロクロ	染付(梅鉢・唐草/?)		
2	S001	磁器	罐反側	肥前	(8.1)	3.2	4.2	透明釉 明暦灰	NW/0 灰白	ロクロ	染付(花/室)		
3	S001	磁器	罐反側	肥前	(7.2)	(3.2)	4.95	透明釉 明暦灰	NW/0 灰白	ロクロ	染付(花・蝶・露造)/、白玉粉飾(不明)、桃源窟		
4	S001	磁器	罐反側	肥前	(8.1)	(3.7)	6.3	透明釉 明暦灰	NW/0 灰白	ロクロ	染付(花・唐草・桃源窟)、花/葉輪花		
5	S001	磁器	丸桶	肥前	(10.8)	3.9	6.65	透明釉 明暦灰	NW/0 灰白	ロクロ	染付(桐格子・草・?)		
6	S001	磁器	丸丸桶	肥前	(8.0)	(5.0)	8.1	透明釉 明暦灰	NW/0 灰白	ロクロ	染付(牡丹・蓮華・雷文・露(晴年製)/人物・家屋・樹木)、朱書(不明)、桃源窟		
7	S001	磁器	菊皿	肥前	-	(4.8)	(1.85)	透明釉 明暦灰	NW/2 灰白	堅打	貫入		
8	S001	磁器	輪花皿	肥前	(31.6)	(17.0)	4.85	透明釉 明暦灰	NW/0 灰白	ロクロ	染付(花)		
9	S001	陶器	瓶(京焼風)	-	(4.7)	(4.25)	灰釉	2.5V/2 浅黄灰	10VW/2 灰白	ロクロ	高台付は無軸。貫入		
10	S001	磁器	丸桶	瀬戸美濃	5.7	2.2	2.85	透明釉 明暦灰	NW/0 灰白	ロクロ	染付(雷文・露/雷文・家屋・樹木)		
11	S001	磁器	罐反側	瀬戸美濃	6.1	2.5	3.05	透明釉 明暦灰	NW/0 灰白	ロクロ	染付(人物)		
12	S001	磁器	菊碗	瀬戸美濃	(5.0)	3.3	5.85	透明釉 明暦灰	NW/0 灰白	ロクロ	染付(籠)		
13	S001	磁器	罐反側	瀬戸美濃	(8.1)	(2.9)	4.2	透明釉 明暦灰	NW/0 灰白	ロクロ	染付(隸書体/)	口絵	
14	S001	磁器	丸桶	瀬戸美濃	(30.5)	5.0	2.3	透明釉 明暦灰	NW/0 灰白	ロクロ	上部(捺り文)		
15	S001	陶器	腰張桶	中斎戸	9.4	5.0	6.2	鉄釉	2.5V/2 黒	2.5V/2 灰白	ロクロ	底部外面無軸、内面茶葉織	
16	S001	陶器	楕か	越中斎戸	-	5.3	(1.65)	-	10VW/2 浅黄灰	10VW/2 灰白	ロクロ		
17	S001	陶器	委角	越中斎戸	6.5	4.3	4.9	鉄釉	2.5V/2 黒	2.5V/2 灰白	ロクロ、回	脚趾無軸。灯芯立て内面に炭化物付着	
18	S001	陶器	水指	越中斎戸	(11.5)	12.0	13.05	鉄釉	10VW/3 暗黒	10VW/4 に伝・黄緑	ロクロ、回	口縁部内外面・底部外面は無軸	
19	S001	瓦質土器	鉢	-	(30.1)	-	(4.85)	-	7.5V/2 黒	7.5V/2 に伝・黒	横ナガ、磨き	外面沈綴	
20	S001	瓦質土器	火跡か	-	(9.45)	(10.2)	-	2.5V/2 黒	2.5V/2 灰白	2.5V/2 灰白	横ナガ、粗	円形スタンプ(草花)	
21	S001	瓦質土器	鏡木鉢	-	(9.3)	(5.25)	-	2.5V/2 黒	2.5V/2 灰白	2.5V/2 灰白	ロクロ	孔径:(1.4cm)	
22	S001	銅製品	管	長さ(4.2) 幅(0.5)	幅厚さ 0.5	厚さ 0.2	-	-	-	-	-	重さ 1.20g	
23	S001	銅製品	釘	長さ(8.6) 幅(0.6)	幅厚さ 0.5	厚さ 0.4	-	-	-	-	-	重さ 14.62g	
24	S001	銅製品	釘	長さ(7.5)	幅 0.6	厚さ 0.5	-	-	-	-	-	重さ 16.77g	
25	S002	磁器	瓶	肥前	-	-	(2.35)	透明釉 明暦灰	NW/0 灰白	ロクロ	染付、内面無軸		
26	S003	陶器	方形杯	直連	-	-	(2.6)	-	T.5VBS/4 淡黄斑	T.5VBS/4 淡黄斑	横ナダ		
27	S003	瓦質道具	長棒	長さ(4.3) 幅2.25	幅 2.25	厚さ 2.25	-	5VBS/4 に伝・青黒	5VBS/4 に伝・青黒	ナダ			
28	S003	瓦質道具	長棒	長さ(4.6) 幅2.1	幅 2.1	厚さ 1.75	-	5VBS/4 に伝・青黒	5VBS/4 に伝・青黒	ナダ			
29	S003	瓦質道具	長棒	長さ(4.8) 幅2.55	幅 2.55	厚さ 1.9	-	5VBS/4 に伝・青黒	5VBS/4 に伝・青黒	ナダ			
30	S003	瓦質道具	粒ころ	長さ(5.55) 幅(2.25)	幅 (1.4)	厚さ 0.5	-	5VBS/2 黒	5VBS/3 に伝・青黒	手づくね、 ナダ		全面施釉	
31	S003	瓦	残瓦	長さ(17.6) (16.80)	幅 1.7	厚さ 1.7	-	鉄釉	5VBS/2 に伝・青黒	5VBS/4 に伝・青黒	ナダ		全面施釉
32	S004	陶器	瓶	越中丸山か	-	(2.9)	(1.9)	鉄釉	10VW/1 明暦灰	2.5V/1 明暦灰	ロクロ	鉄軸の上に二種の灰軸を掛ける、高台付と瓶部内面は無軸	
33	S006	磁器	菊碗	肥前	(7.9)	-	(4.3)	透明釉 明暦灰	NW/0 灰白	ロクロ	染付(花/西方彌)		
34	S006	磁器	輪花皿か	肥前	-	(8.9)	(2.75)	透明釉 明暦灰	NW/0 灰白	ロクロ	染付(草/家屋・樹木)、把ノ首回転有り、外側質入、35と同個体		
35	S006	磁器	輪花皿	肥前	(17.4)	-	(3.25)	透明釉 明暦灰	NW/0 灰白	ロクロ	染付(草/)	外側質入、34と同一個体か	

第2表 A区遺物観察表(2)

番号	造形・層位	種別	器種等	産地	寸法(cm)		釉薬	色調		成形・整形	文様(外面・内面)、その他
					口径	底径		釉	地土		
					(mm)	(mm)		(mm)	(mm)		
36	S006	陶器	瓶	越中畠戸	-	(5.7)	(4.6)	鉄釉	10678/1 底黒 に5mm オーバー	ロクロ	内外面灰釉の上に外面鉄釉掛ける。底部は無釉。内面底ね丸き皿
37	S006	陶器	逆張	越中畠戸	-	(9.8)	(3.85)	鉄釉	7.557/1/3 黒	ロクロ	底部外面は無釉
38	S006	陶器	鉢類	越中畠戸	-	(9.4)	(5.05)	鉄釉	7.557/4/4 黒	ロクロ	内面と底部外面は無釉
39	S006	石製品	研		長さ (10.9)	幅 5.9	厚さ 1.3	-	-	-	粘板岩。裏面刻書「土々高田石 たづ」
40	S008	磁器	楕	肥前	-	-	(3.85)	透明釉	10678/1 灰白	ロクロ	染付(四方彌)
41	S008	磁器	楕5	肥前	-	-	(1.9)	透明釉	10678/1 灰白	ロクロ	染付
42	下層路面	陶器	搖錘	肥前	-	(12.7)	(3.95)	鉄釉	9.557/1 黒	ロクロ	全面施釉。即日2条
43	下層路面	織製品	(保管 扱いなし)		長さ (8.1)	幅 1.2	厚さ 0.95	-	-	-	重さ7.88g。中に漆仕上げの竹製の離字残る (径0.7cm)
44	上層路面 古段階造出土 (断土・東側)	磁器	丸瓶	肥前	(11.5)	(4.0)	3.25	透明釉	10678/1 灰白	ロクロ	染付(草)。見込み窓ノ目袖剥ぎ
45	上層路面 古段階造出土 (断土・西側)	陶器	楕	肥前系	-	(4.3)	(4.6)	灰釉	5.557/2 オーバー無	ロクロ	二種の灰釉。高台骨付は無釉。砂付着
46	上層路面 古段階造出土 (断土・西側)	陶器	半円瓶	越中畠戸	(11.1)	-	(5.7)	鉄釉	9.557/2 黒	ロクロ	底部は無釉
47	上層路面 古段階造出土 (断土・西側)	陶器	楕	越中畠戸	-	12.4	(3.75)	鉄釉	2.557/4/3 に5mm 黒	ロクロ	全面施釉。即日9条以上
48	上層路面 古段階	磁器	端反皿	戸田美濃	(8.3)	-	(3.45)	透明釉	5.557/1 灰白	ロクロ	染付(流水ノ刃)、貫入
49	上層路面 古段階	陶器	楕	在地系	(11.1)	-	2.65	灰釉	5.557/3 浅黄	ロクロ	開始染付(横道草ノ刃)。体部内面は無釉。貫入
50	上層路面 古段階	陶器	水注	在地	(7.4)	-	(3.75)	鉄釉	9.557/4/4 黒	ロクロ	口唇部は無釉
51	上層路面 新段階	磁器	鉢	肥前	-	(8.6)	(5.85)	透明釉 (底青白)	5.557/1 明青灰	ロクロ	染付(唐草・波・蘭江ノ直瀬)。蛇ノ目高台 軸剥ぎ部分に紗付着
52	上層路面 新段階	磁器	端反皿	戸田美濃	(7.3)	-	(3.9)	透明釉 (底青白)	10678/1 明青灰	ロクロ	染付(流水ノ刃)、丸縫底
53	上層路面 新段階	磁器	端反皿	戸田美濃	(11.0)	-	(4.2)	透明釉	10678/1 灰白	ロクロ	染付(花ノ刃)
54	上層路面 新段階	磁器	端反皿	戸田美濃	(9.4)	(5.4)	1.75	透明釉	5.557/3 灰白	型打	白磁。見込み施釉学文
55	上層路面 新段階	磁器	端反皿	戸田美濃	(9.9)	5.4	1.85	透明釉	5.557/3 灰白	型打	白磁。見込み施釉学文
56	上層路面 新段階	陶器	楕	越中畠戸か	-	5.2	(3.15)	灰釉	5.557/3 青白	ロクロ、削 出付	外周体部上半灰釉。内面無釉。見込みに垂
57	上層路面 新段階	瓦製道具	枕こら		長さ (3.65)	幅 2.5	厚 2.55	鉄釉	9.557/1 に5mm 黒	ロクロ	全面施釉 歩くね、ナ ギ。指押され
58	泥土下層	磁器	腰張皿	肥前	(8.9)	-	(5.5)	透明釉 (底青白)	10678/1 明青灰	ロクロ	染付(腰落文・埋込文)
59	泥土下層	磁器	腰張皿	肥前	8.0	(3.4)	5.0	透明釉	10678/1 明青灰	ロクロ	染付(丸文ノ刃)
60	泥土下層	磁器	半圓瓶	肥前	(7.6)	(3.6)	5.7	透明釉	10677/1 明青灰	ロクロ	染付(半菊・花・五年花)。貫入。
61	泥土下層	磁器	端反皿	肥前	-	(3.1)	(4.8)	青磁釉	10677/1 明青灰	ロクロ	青磁染付(蘭江ノ五年花)
62	泥土下層	磁器	端反皿	肥前	(11.0)	-	(5.5)	透明釉	10678/1 明青灰	ロクロ	染付(二重斜格子・二重井形)
63	泥土下層	磁器	端反皿	肥前	(11.0)	3.9	5.9	透明釉 (底青白)	10678/1 明青灰	ロクロ	染付(花か・寿)
64	泥土下層	磁器	端反皿	肥前	(10.7)	4.7	6.45	透明釉 (底青白)	7.5578/1 明青灰	ロクロ	染付(伏画・雲・舟・寿ノ刃)。目録4ヶ所
65	泥土下層	磁器	端反皿	肥前	(11.0)	(4.6)	6.25	透明釉 (底青白)	10678/1 明青灰	ロクロ	染付(花・花・舟)。朱書(不明)。地磁痕
66	泥土下層	磁器	端反皿	肥前	(10.6)	4.0	6.9	透明釉 (底青白)	10678/1 明青灰	ロクロ	染付(蘭・花)。朱書(不明)。地磁痕
67	泥土下層	磁器	端反皿	肥前	(10.0)	(3.5)	6.0	透明釉 (底青白)	10678/1 明青灰	ロクロ	染付(?)。地磁痕
68	泥土下層	磁器	端反皿	肥前	(7.9)	3.2	3.95	透明釉	10678/1 明青灰	ロクロ	染付(草花・寿ノ刃)。朱書(茶や□□□□□)

第3表 A区遺物観察表(3)

寸寸法の( )は復元値。△は残存部を示す。軸の色調は、無軸の場合は、外軸の色調を記載。

番号	遺構 層位	種別	器種等	産地	寸寸法(cm)			釉薬	色調		成形・整形	文様(外軸/内軸)、その他
					口径	底径	器高		軸	底土		
70	流土下層	磁器	罐反転	肥前系	(8.0)	(2.9)	4.0	透明釉	N8/0 灰白	N8/0 灰白	ロクロ	無文、器付から高台内面は無釉
71	流土下層	磁器	罐反転	肥前	(13.0)	3.9	6.05	透明釉	SB7/1 青灰釉	NT/0 灰白	ロクロ	委付(二重格子ノリ)、朱書「印口」、施継痕
72	流土下層	磁器	丸瓶	肥前	(9.1)	3.0	5.0	透明釉 (施加底)	10G78/1 明緑灰	N8/0 灰白	ロクロ	委付(草花・蘭組/草花)、朱書「印口」、施継痕
73	流土下層	磁器	浅平球形瓶	肥前	(12.5)	(4.0)	6.35	透明釉	10G78/1 明緑灰	N8/0 灰白	ロクロ	委付(梅ノリ)、見込み鉛錆置き
74	流土下層	磁器	腰掛瓶	肥前	8.6	3.7	5.6	透明釉	10G77/1 明緑灰	N8/0 灰白	ロクロ	委付(矢張板ノリ)
75	流土下層	磁器	広葉碗	肥前	(10.5)	5.5	5.95	透明釉	10G78/1 明緑灰	N8/0 灰白	ロクロ	委付(雪待ち桜ノリ)、朱書「口」、施継痕
76	流土下層	磁器	広葉碗	肥前	10.6	5.1	6.85	透明釉	10G78/1 明緑灰	N8/0 灰白	ロクロ	委付(葵・豆・寿)、高台内外面に研付有、施継痕
77	流土下層	磁器	広葉碗	肥前	11.1	5.8	6.95	透明釉	10G78/1 明緑灰	N8/0 灰白	ロクロ	委付(菊頭・草・波瀬)、高台内外面に研付有
78	流土下層	磁器	広葉碗	肥前	11.3	5.5	6.3	透明釉	SB7/1 青灰釉	N8/0 灰白	ロクロ	委付(編蝠/波瀬かげ)、貫入
79	流土下層	磁器	鉢	肥前系	-	-	(6.2)	透明釉	N8/0 灰白	N8/0 灰白	ロクロ	委付(線描の牡丹草花/西方釋・羅搗の花唐草)
80	流土下層	磁器	鉢	肥前	(12.4)	7.25	3.3	透明釉	SB7/1 青灰釉	N8/0 灰白	ロクロ	委付(草花・刀)、ロ線玉縁、見込み蛇ノ目鉛錆置き、蛇ノ目印加高台
81	流土下層	磁器	丸皿	肥前	(14.4)	(7.4)	3.5	透明釉	7.G78/1 明緑灰	N8/0 灰白	ロクロ	委付(草花)、見込み蛇ノ目鉛錆置き
82	流土下層	磁器	丸皿	肥前	(11.8)	4.4	2.9	透明釉	10G78/1 明緑灰	N8/0 灰白	ロクロ	委付(草)、見込み蛇ノ目鉛錆置き、ロ線部仄化
83	流土下層	磁器	皿	肥前	-	5.6	(2.0)	透明釉	N8/0 灰白	N8/0 灰白	ロクロ	委付(東屋山水)、施継痕
84	流土下層	磁器	皿	肥前	-	(10.0)	(2.2)	透明釉	10G78/1 明緑灰	N8/0 灰白	ロクロ	委付(牡丹・菊)、朱書「印口」、施継痕
85	流土下層	磁器	舟皿	肥前	(8.4)	3.5	2.35	透明釉	10G78/1 明緑灰	N8/0 灰白	型打、付け高台	施継(西洋花・半菊)
86	流土下層	磁器	舟皿	肥前	8.0	4.1	2.45	透明釉	10G78/1 明緑灰	N8/0 灰白	型打、付け高台	施継(梅花文)、上絵(葵・桐図・梅花・鶴)、器付は鶴丸山印
87	流土下層	磁器	輪花皿	肥前	10.1	4.7	2.55	透明釉	10G78/1 明緑灰	N8/0 灰白	ロクロ	口紅、目跡4ヶ所、貫入
88	流土下層	磁器	林	肥前	(16.6)	(9.2)	6.55	青磁釉	7.G77/1 緑灰	N8/0 灰白	ロクロ	青磁染付(墨渦/牡丹)、蛇ノ目印加高台、輪刻ぎ部に砂付有、貫入
89	流土下層	磁器	鉢	肥前	17.9	8.8	6.85	青磁釉	SG7/1 明緑灰	N8/0 灰白	ロクロ	青磁染付(墨渦)、器・家屋・松・縮木、蛇ノ目印加高台、輪刻ぎ部に砂付有、貫入
90	流土下層	磁器	八角鉢	肥前	(16.9)	(7.7)	6.95	透明釉	10G78/1 明緑灰	N8/0 灰白	型打	委付(文政・篆文・区画)、高台内鉛錆置き、施継痕、引と同一個体2件
91	流土下層	磁器	八角鉢	肥前	-	-	(5.45)	透明釉	10G78/1 明緑灰	N8/0 灰白	型打	委付(宝文・草・梅子)、施継痕、90と同一個体2件
92	流土下層	磁器	輪花鉢	肥前	(20.4)	-	(6.05)	透明釉	10G78/1 明緑灰	N8/0 灰白	型打	委付(草・蓮華・花)、施継痕
93	流土下層	磁器	鉢	肥前	2.6	5.6	11.1	透明釉	SG7/1 明緑灰	N8/0 灰白	ロクロ	委付(梅花)
94	流土下層	磁器	瓶	肥前	-	-	(12.6)	透明釉	7.G78/1 明緑灰	N8/0 灰白	ロクロ	委付(瓶)
95	流土下層	磁器	花生小鉢	肥前	-	11.4	(7.5)	透明釉	10G78/1 明緑灰	N8/0 灰白	ロクロ	委付(瓶・牡丹)
96	流土下層	磁器	香炉	肥前小	(10.6)	-	(7.05)	青磁釉 (施加底)	7.G77/1 明緑灰	N8/0 灰白	ロクロ	見込み砂付有
97	流土下層	陶器	瓶	肥前	-	(4.6)	(3.1)	透明釉	10H78/2 黒褐	2.SB75/4 にじむ小器	ロクロ	刷毛目削津。高台要付は輪刻ぎ
98	流土下層	陶器	罐反転	肥前	(11.4)	(3.8)	6.0	透明釉	2.57/3 明黄	2.SB74/4 黄	ロクロ	直燒風削津。鉛捻(横縞)。高台要付は無釉、貫入
99	流土下層	陶器	丸皿	肥前系	(12.0)	(4.0)	3.9	灰釉	2.SY7/4 淡黄	2.SY78/2 灰白	ロクロ	鉛捻(草)、見込み蛇ノ目鉛錆置き、貫入
100	流土下層	陶器	盤	肥前	(35.0)	17.4	16.35	灰釉	7.SW72/2 黒褐	SY78/4 灰白	ロクロ	全面施釉、額目15条、見込み摩減
101	流土下層	磁器	斜形形籠	瀬戸美濃	6.9	3.3	4.8	透明釉	10V7/1 灰白	N8/0 灰白	ロクロ	委付(菊)、見込み型押し(幾何学文)
102	流土下層	磁器	浅平球形籠	瀬戸美濃	(8.0)	2.5	3.75	透明釉	10G78/1 明緑灰	N8/0 灰白	ロクロ	委付(草花)
103	流土下層	磁器	丸瓶	瀬戸美濃	7.2	3.8	5.8	透明釉 (施加底)	7.BD78/1 明緑灰	N8/0 灰白	ロクロ	委付(草・蜜)
104	流土下層	磁器	丸瓶	瀬戸美濃	7.6	1.4	5.9	透明釉 (施加底)	10G78/1 明緑灰	N8/0 灰白	ロクロ	委付(瓶・蟹)

第4表 A区遺物観察表(4)

番号	遺構 層位	種別	器種等	産地	寸法(cm)			釉裏	色調		成形・整形	文様(外側・内側)、その他			
					口径	底径	器高		釉	胎土					
105	泥土下層	磁器	縦張瓶	瀬戸美濃	(7.0)	(3.1)	4.7	透明釉	567/1 明緑灰	N8/0 灰白	ロクロ	染付(楓東刀)、高台張付に砂付着			
106	泥土下層	磁器	縦張瓶	瀬戸美濃	(6.9)	(2.5)	3.4	透明釉	1063W/1 明緑灰	10W/1 灰白	ロクロ	染付(?)。貫入			
107	泥土下層	磁器	縦張瓶	瀬戸美濃	(6.9)	3.0	3.5	透明釉	N8/0 灰白	N8/0 灰白	ロクロ	染付(灰水刀)			
108	泥土下層	磁器	縦張瓶	瀬戸美濃	6.9	2.8	3.7	透明釉 (楓生竹刀)	1063W/1 明緑灰	N8/0 灰白	ロクロ	染付(竹・波瀬)			
109	泥土下層	磁器	縦張瓶	瀬戸美濃	(7.1)	3.2	3.6	透明釉 (楓生竹刀)	1063W/1 明緑灰	N8/0 灰白	ロクロ	染付(山・網干/波瀬)。貫入			
110	泥土下層	磁器	縦張瓶	瀬戸美濃	7.2	3.2	3.7	透明釉 (楓生竹刀)	1063W/1 明緑灰	N8/0 灰白	ロクロ	染付(丸文・寿)			
111	泥土下層	磁器	縦張瓶	瀬戸美濃	(7.0)	3.2	3.7	透明釉	2.567/1 灰白	N8/0 灰白	ロクロ	染付(草花・花卉)。朱書「緑茶やか」			
112	泥土下層	磁器	縦張瓶	瀬戸美濃系	7.5	2.9	3.85	透明釉	587/1 灰白	N8/0 灰白	ロクロ	染付(舟草・?・花卉)。朱書「神」。桃籠瓶			
113	泥土下層	磁器	縦張瓶	瀬戸美濃	7.6	2.7	3.6	透明釉	N8/0 灰白	N8/0 灰白	ロクロ	染付(半角/花)			
114	泥土下層	磁器	縦張瓶	瀬戸美濃	8.2	3.6	4.1	透明釉	1063W/1 明緑灰	N8/0 灰白	ロクロ	染付(舟・雲・楓木・寿)			
115	泥土下層	磁器	縦張瓶	瀬戸美濃	8.2	3.6	4.5	透明釉	1063W/1 明緑灰	N8/0 灰白	ロクロ	染付(微塵花唐草/花)、高台内側に砂付着、貫入			
116	泥土下層	磁器	縦張瓶	瀬戸美濃	(8.2)	3.2	4.6	透明釉	1063W/1 明緑灰	N8/0 灰白	ロクロ	染付(千鳥/?)。桃籠瓶			
117	泥土下層	磁器	縦張瓶	瀬戸美濃	8.2	3.5	3.7	透明釉	2.567/1 灰白	N8/0 灰白	ロクロ	染付(舟・楓木/?)。蛇目高台。貫入			
118	泥土下層	磁器	縦張瓶	瀬戸美濃	8.3	3.2	4.1	透明釉	2.567/1 灰白	N8/0 灰白	ロクロ	染付(花・「福」・「禄」・「寿」/室)			
119	泥土下層	磁器	縦張瓶	瀬戸美濃	(8.3)	(3.0)	4.35	透明釉	1063W/1 明緑灰	N8/0 灰白	ロクロ	染付(秋海棠・「實」字/手)。朱書(□)。桃籠瓶			
120	泥土下層	磁器	縦張瓶	瀬戸美濃	(8.4)	(3.1)	4.45	透明釉	1063W/1 明緑灰	N8/0 灰白	ロクロ	染付(草花・「壽」字/手)。朱書「神」。桃籠瓶			
121	泥土下層	磁器	縦張瓶	瀬戸美濃	(8.6)	2.9	4.4	透明釉 (楓生竹刀)	1063W/1 明緑灰	N8/0 灰白	ロクロ	染付(舞子書体/?)。口紅			
122	泥土下層	磁器	縦張瓶	瀬戸美濃	8.6	4.0	4.6	透明釉 (楓生竹刀)	567/1 明緑灰	N8/0 灰白	ロクロ	染付(花・「寿」/?)			
123	泥土下層	磁器	縦張瓶	瀬戸美濃	(8.7)	3.1	4.7	透明釉 (楓生竹刀)	567/1 明緑灰	N8/0 灰白	ロクロ	染付(秋海棠・「實」/丸)。口紅。桃籠瓶			
124	泥土下層	磁器	縦張瓶	瀬戸美濃	(8.6)	(4.2)	6.1	透明釉 (楓生竹刀)	567/1 明緑灰	N8/0 灰白	ロクロ	白練輪花、染付(花菱桔梗/桐格子/花)			
125	泥土下層	磁器	縦張瓶	瀬戸美濃	(6.4)	2.7	2.85	透明釉	1063W/1 明緑灰	N8/0 灰白	ロクロ	上絵(「蟹文」・實・土・楓木・帆掛舟)。富嶽三十六景「武蔵御岳舎」			
126	泥土下層	磁器	縦張瓶	瀬戸美濃	(6.4)	(2.7)	2.9	透明釉	1063W/1 明緑灰	N8/0 灰白	ロクロ	染付(口楓)			
127	泥土下層	磁器	丸瓶	瀬戸美濃	(9.3)	-	(4.05)	透明釉	N8/0 灰白	N8/0 灰白	ロクロ	上絵(花/)。口紅			
128	泥土下層	磁器	平折瓶	瀬戸美濃	11.0	4.0	5.85	透明釉 (楓生竹刀)	N8/0 灰白	N8/0 灰白	ロクロ	染付(扇面・松竹梅・蓮花文/雷文)			
129	泥土下層	磁器	瓶	瀬戸美濃	-	(3.5)	(3.95)	透明釉	1063W/1 明緑灰	N8/0 灰白	ロクロ	染付(編/室)。朱書「茶」			
130	泥土下層	磁器	奉旨瓶	瀬戸美濃	(8.2)	(3.7)	5.2	透明釉 (楓生竹刀)	592/4 繩文赤陶	N8/0 灰白	ロクロ	鉄軸掛け、桃籠瓶			
131	泥土下層	磁器	瓶	瀬戸美濃	-	8.1	(2.75)	透明釉	1063W/1 明緑灰	N8/0 灰白	ロクロ	染付(草・型紙模倣で牡丹・草・見込み模様松竹梅)。蛇目高台張付。朱書(不明)。桃籠瓶			
132	泥土下層	磁器	丸瓶	瀬戸美濃	(10.3)	5.9	2.15	透明釉	1063W/1 明緑灰	N8/0 灰白	ロクロ	上絵(「松・花・蘭」)。口紅。繪付は盤中丸山紋			
133	泥土下層	磁器	伝旨瓶	瀬戸美濃	5.9	(4.2)	5.1	透明釉	1063W/1 明緑灰	1078/1 灰白	ロクロ	染付(手菊花/)。脚部内側は無輪			
134	泥土下層	磁器	瓶	瀬戸美濃系	-	(5.2)	(5.4)	透明釉	1017/1 灰白	1017W/1 灰白	ロクロ	上絵、内面無輪。高台張付に砂付着。			
135	泥土下層	陶器	縦張瓶	瀬戸美濃	(8.0)	(3.5)	5.15	灰釉	1078/1 灰白	1017W/4 淡紫灰	ロクロ	陶軸染付(細縞/)。墨書「八」			
136	泥土下層	陶器	縦張瓶	瀬戸美濃	7.3	2.8	3.6	透明釉	7.53W/1 灰白	N8/0 灰白	ロクロ	陶軸染付(玉作花・菊・「寿」)			
137	泥土下層	陶器	縦張瓶	瀬戸美濃	7.8	3.2	3.8	透明釉	7.53W/1 灰白	N8/0 灰白	ロクロ	陶軸染付(玉作花・花)			
138	泥土下層	陶器	縦張瓶	瀬戸美濃	9.2	3.4	4.3	透明釉	8Y8.2 灰白	55W/2 灰白	ロクロ	陶軸染付(山・舟・楓木/波瀬)			
139	泥土下層	陶器	縦張瓶	瀬戸美濃	(8.5)	(3.0)	4.2	透明釉	1078/1 灰白	55W/3 灰黄	ロクロ	陶軸染付(源氏香文・花/)			

第5表 A区遺物観察表(5)

番号	遺構 層位	種別	器種等	産地	寸法(cm)			釉薬	色調		成形・整形	文様(外側/内側)、その他
					口径	底径	器高		輪	駒		
					(mm)	(mm)	(mm)					
149	流土下層	陶器	仏龕蓋	廻戸美濃	(6.0)	—	(3.05)	透明釉	2.5Y6/1 灰白	2.5Y7/3 淡黃	ロクロ	陶転染付(手菊花・斜格子/)。貫入。
141	流土下層	陶器	灯明受皿	廻戸美濃系	(10.0)	3.8	2.55	灰釉	5Y6/3 オリーブ黄	2.5Y8/2 灰白	ロクロ	外側底部へ底部と受部は無釉
142	流土下層	陶器	腰張瓶	越中面戸	(9.0)	4.6	6.65	鉄釉	N1.5W/黒	3Y7/1 灰白	ロクロ、削 り出し・落合	
143	流土下層	陶器	腰張瓶	越中面戸	(9.0)	4.6	6.7	鉄釉	5Y2/1 黒褐	2.5Y8/2 灰白	ロクロ、削 り出し・落合	高台に4ヶ所に輪溝
144	流土下層	陶器	腰張瓶	越中面戸	—	5.0	(5.6)	鉄釉	5Y2/3 黒	2.5Y7/3 淡黃	ロクロ、削 り出し・落合	斜輪流し掛け
145	流土下層	陶器	半開瓶	越中面戸	(10.5)	5.9	7.55	灰釉	10Y8/2 灰褐	10Y9/2 灰褐	ロクロ、削 り出し・落合	外曲底部・内面部落～底部は無釉、墨書き「金々口」
146	流土下層	陶器	半開瓶	越中面戸	(10.0)	—	(5.3)	鉄釉	2.5Y1/1 赤黒	10Y7/3 灰白	ロクロ	全面無釉、外側に長石輪數らす
147	流土下層	陶器	天壺	越中面戸	(10.3)	4.2	2.25	鉄釉	7.5Y8/2 黒褐	7.5Y8/2 灰褐	ロクロ、削 り出し・落合	内全面無釉、口縁部に底付着(灯明皿か)。見 込みに重ね焼き痕
148	流土下層	陶器	火壺	越中面戸	(11.0)	3.6	2.95	鉄釉	7.5Y8/4/3 黒	10Y8/6/3 二二二・黄褐	ロクロ、削 り出し・落合	内全面
149	流土下層	陶器	素燒壺	越中面戸	(11.4)	4.8	2.55	—	7.5Y8/7/6 相	7.5Y8/7/6 相	ロクロ	口縁部に薄く油拌付着
150	流土下層	陶器	盃	越中面戸	—	4.7	(6.25)	鉄釉	5Y7/2 灰白	2.5Y5/3 淡黃	ロクロ、削 り出し・落合	底部無釉、外側薄く煤付着
151	流土下層	陶器	小壺	越中面戸	(7.8)	(4.9)	5.8	鉄釉	7.5Y8/4/2 灰褐	2.5Y7/2 灰黄	ロクロ、削 り出し・落合	口縁部・底付着
152	流土下層	陶器	受壺	越中面戸	—	4.3	(5.05)	鉄釉	7.5Y8/2 黒褐	10Y8/8/3 淡黃褐	ロクロ	底部は無釉
153	流土下層	磁器	灰陶	越中丸山	(5.8)	2.5	2.9	透明釉	NS8/0 灰白	NS8/0 灰白	ロクロ	朱付(朝倉文・露口)、外側に「模」「月」。裏地 は廻戸美濃窯。古代。
154	流土下層	磁器	筒丸瓶	越中丸山か	(6.9)	3.2	5.7	透明釉	5Y8/2 灰白	5Y8/2 灰白	ロクロ	朱付(草口)、高台優付は無釉。朱書き「牛」、後付
155	流土下層	磁器	端反瓶	越中丸山か	(11.8)	4.3	6.25	青磁釉 (乳白色)	5G7/1 明緑	NS8/0 灰白	ロクロ	朱付(区画・草・寿) / 緑
156	流土下層	陶器	輪錐形 小壺	越中丸山	(6.4)	(2.4)	3.15	灰釉	2.5Y6/1 黄褐	2.5Y5/1 灰褐	ロクロ	外曲輪錐の上に灰釉。内面灰釉。見込みに隠灰
157	流土下層	陶器	腰張瓶	越中丸山	(10.0)	4.3	6.15	鉄釉	5Y8/1.5W/1 黒褐	7.5Y7/1 灰白	ロクロ、削 り出し・落合	内外面灰釉の上に外面鉄釉・内面透明釉、内面 貫入
158	流土下層	陶器	腰張瓶	越中丸山	(7.8)	(3.4)	4.8	鉄釉	7.5Y8/2 黒褐	7.5Y6/2 灰褐	ロクロ、削 り出し・落合	鉄釉流し掛け
159	流土下層	陶器	腰張瓶	越中丸山	(9.4)	4.5	6.5	鉄釉	10Y8/2/3 黒褐	10Y8/6/1 灰褐	ロクロ、削 り出し・落合	鉄釉流し掛け、内面貫入
160	流土下層	陶器	腰張瓶	越中丸山	(10.0)	(5.8)	6.7	鉄釉	10Y8/4/3 黒褐	7.5Y7/2 二二二・黄褐	ロクロ、削 り出し・落合	鉄釉流し掛け、内面貫入
161	流土下層	陶器	端反瓶	越中丸山	(10.5)	(4.0)	5.35	鉄釉	10Y7/1 明緑	NS5/0 灰	ロクロ	灰釉の上に巻絞(草花)。他巻絞。貫入。
162	流土下層	陶器	腰張瓶	越中丸山か	(10.8)	—	(5.1)	透明釉	NS6/0 灰	2.5Y5/2 淡灰黄	ロクロ	陶転染付(草花)、貫入。
163	流土下層	陶器	天壺	越中丸山	(13.9)	—	(2.8)	透明釉	5G7/1 オリーブ黄	10Y8/6/3 相	ロクロ	陶転染付、貫入。
164	流土下層	陶器	輪花壺	越中丸山か	(23.2)	7.8	7.45	鉄釉	10Y8/4/3 黒褐	10Y8/8/4 淡黄褐	ロクロ	目跡3ヶ所、底部外曲無釉、墨書き「イワタ」「マカ」
165	流土下層	陶器	林	越中丸山	(13.5)	—	(6.25)	鉄釉	5Y8/2/1 黒褐	10Y8/6/1 相	ロクロ	全面施釉
166	流土下層	陶器	半球形瓶	小壺	8.0	3.0	4.95	鉄釉	7.5Y8/2 黒褐	7.5Y6/1 二二二・黄褐	ロクロ、削 り出し・落合	底部外曲無釉、墨書き「□□」
167	流土下層	陶器	半球形瓶	小壺	(9.3)	(4.7)	6.5	鉄釉	7.5Y8/2 黒	5Y7/2 灰白	ロクロ、削 り出し・落合	底部外曲無釉、見込みに目跡
168	流土下層	陶器	腰張瓶	小壺	(9.5)	(2.8)	6.9	鋼緑釉	10G7/1 明緑	5Y8/2 灰白	ロクロ、削 り出し・落合	鋼緑釉流し掛け
169	流土下層	陶器	腰張瓶	小壺	(10.0)	5.6	7.6	鋼緑釉	7.5G7/1 明緑	7.5Y6/1 明緑	ロクロ、削 り出し・落合	鋼緑釉流し掛け
170	流土下層	陶器	腰張瓶	小壺	(9.5)	(5.4)	7.0	鉄釉	10Y8/6/3 二二二・黄褐	10Y8/7/2 二二二・黄褐	ロクロ、削 り出し・落合	鉄釉流し掛け
171	流土下層	陶器	腰張瓶	小壺	(10.0)	5.0	6.9	鉄釉	7.5Y8/2/1 黒褐	10Y8/7/2 二二二・黄褐	ロクロ、削 り出し・落合	鉄釉流し掛け
172	流土下層	陶器	瓶	小壺	3.0	—	(8.25)	透明釉 灰釉	10Y8/1 緑	NS7/1 灰白	ロクロ	透明釉の上に外曲から立ち落部内面に灰釉
173	流土下層	陶器	瓶	小壺	3.1	—	(9.15)	灰釉 鉄釉	10Y8/1 緑	7.5Y6/1 相	ロクロ	外曲脚部下半灰釉。注かけ鉄釉

第6表 A区遺物観察表(6)

番号	遺構 層位	種別	器種等	産地	寸法(cm)			軸轆	色調		成形・整形	文様(外面/内面)、その他
					口径	底径	高さ		輪	筋土		
174	泥土下層	陶器	瓶	小林	-	-	(14.8)	灰輪 鉄輪	灰輪 5輪 底黒 2.5mm/2 2.5mm/2	107mm/3 にぶい黄黒	ロクロ	外面鉄輪下平灰輪。口は鉄輪
175	泥土下層	陶器	瓶	小林	-	(6.8)	(6.8)	灰輪 鉄輪	灰輪 5輪 底白 鉄輪 3mm/2 2mm/2	107mm/4 浅黄黒	ロクロ	外面灰輪・底面無釉。内面鉄輪。外面貫入
176	泥土下層	陶器	土瓶	小林	(10.0)	7.4	11.35	鋼線輪 灰輪	鋼線輪 7.5mm/1 灰輪 5輪 底白 2mm/2	2.5mm/6 にぶい黄	ロクロ	外面鋼線輪下平底輪。内面鋼線輪上部は無釉。外面貫入。外面上に重ね底板。外面上下～底 縁周付着
177	泥土下層	陶器	鉢	小林	(20.7)	7.9	10.7	鉄輪	7.5mm/2	7.5mm/6 縦	ロクロ	目録5ヶ所。底部外面無釉。墨書き「石仏」
178	泥土下層	陶器	瓶	小林	(31.8)	-	(17.0)	鉄輪 鉄輪	鉄輪 7.5mm/1 鉄輪 5輪 底白 2mm/2	7.5mm/1 底灰	ロクロ	外面・内面口縁部鉄輪。内面腹部鉄輪。鉄目 1単位 13条
179	泥土下層	陶器	土瓶蓋	京・信楽系	(6.7)	(3.6)	2.35	灰輪	5mm/3 灰輪 1.5mm/2	2.5mm/2 灰黒	ロクロ	口縁混鉄輪。白泥土漉し掛け。外面部～底 部無釉
180	泥土下層	磁器	色鉢	在地系	(6.4)	-	(2.85)	透明釉	2.5mm/1 灰白	5mm/1 灰白	ロクロ	上部。貫入
181	泥土下層	陶器	輪轉香持瓶	在地系	(10.4)	3.5	7.25	灰輪	2.5mm/2 灰白	5mm/1 灰白	ロクロ	外面高台脇は鉄輪の化粧掛け。底には3ヶ所。 高台内に盖巻状の刷毛。貫入
182	泥土下層	陶器	平底形態	在地系	(9.3)	4.2	(7.0)	鉄輪	10mm/4 縦	107mm/4 浅黄黒	ロクロ	体部外面埋込。外面部下平～底輪。内面 口縁部は無釉
183	泥土下層	陶器	土鍋盖	在地系	(15.4)	5mm/2 5.1	1.7	鉄輪 長石輪	5mm/2 青石輪	2.5mm/2 黒黒	ロクロ	体部外面埋込。口縁部内面・天井部外面・ 底口輪は無釉だが、一部長石輪
184	泥土下層	陶器	行平	在地系	(13.5)	(6.3)	5.95	-	5mm/2 縦	107mm/4 浅黄黒	ロクロ	体部外面埋込。墨書き「タヌオヨ」
185	泥土下層	陶器	行平	在地か	18.1	(8.6)	8.55	鉄輪	5mm/2 青石輪	2.5mm/2 灰黒	ロクロ	体部外面埋込。外面部下平～底輪。内面 口縁部は無釉
186	泥土下層	陶器	急巣	在地系	(10.2)	-	(7.2)	-	2.5mm/3 底 浅黄	2.5mm/3 成形唇。布 裏裏	ロクロ	無釉。口縁輪花
187	泥土下層	陶器	水注	在地系	(6.1)	(7.0)	(7.1)	鉄輪 鉄輪	鉄輪 5mm/2 青石輪	2.5mm/2 灰黒	ロクロ	外面鉄輪。内面精緻。口縁部と底部外面は 無釉
188	泥土下層	陶器	水注	在地系	-	7.7	(6.45)	鉄輪 鉄輪	鉄輪 5mm/2 青石輪	2.5mm/2 灰黒	ロクロ	外面鉄輪・底面無釉。内面鉄輪
189	泥土下層	陶器	瓶	在地系	3.1	-	(5.2)	透明釉 灰輪	白化粧 10mm/3 底白 10mm/4 にぶい黄黒	107mm/2 にぶい黄黒	ロクロ	外面白化粧・鉄輪(蓋)。内面灰輪。貫入
190	泥土下層	磁器	玉緑皿	不明	(13.0)	-	(3.2)	透明釉	10mm/1 底白	10mm/1 底白	ロクロ	染付(草/二重格子)。貫入。地継痕
191	泥土下層	瓦質土器	火鉢	-	(27.0)	-	(4.25)	-	107mm/3 オリーブ墨	2.5mm/3 底 浅黄	ロクロナヂ。 墨引き	型押し(沙綾形)
192	泥土下層	瓦質土器	火鉢	-	-	(8.0)	-	107mm/3 黒鷺	107mm/3 にぶい黄黒	ロクロ	底面12三足。体部に意。体部内面格子状に 墨(4条1単位)	
193	泥土下層	瓦質土器	火鉢	-	(17.6)	(7.4)	-	107mm/3 オリーブ墨	2.5mm/3 底 浅黄	ロクロ	外面部磨き。内面磨き。	
194	泥土下層	瓦質土器	平底か	-	-	(3.7)	-	7.5mm/1 底	5mm/1 底	ロクロ	重さ 1.95g	
195	泥土下層	陶器	瓦永通宝	長3 1.8	幅3 1.8	厚3 0.1	-	-	-	-	-	重さ 4.46g。六面に付着物
196	泥土下層	陶製品	膠管(膠管)	長さ (4.8)	幅 1.6	厚さ 1.9	-	-	-	-	-	丁子梅鉢文。均整唐草文
197	泥土下層	(焼工)	軋线工	長さ (7.4)	幅 (6.95)	厚さ (7.4)	-	N4/0mm	2.5mm/2 灰黒	ナヂ	丁子梅鉢文。均整唐草文	
198	泥土下層	(焼工)	軋线工	長さ (4.9)	幅 (13.6)	高さ (3.5)	-	N4/0mm	5mm/1 底白	ナヂ	均整唐草文	
199	泥土下層	(焼工)	軋线工	長さ (17.0)	幅 (11.7)	厚さ 2.05	-	N4/0mm	2.5mm/1 底白	ナヂ	均整唐草文	
200	泥土下層	(焼工)	残工	長さ (25.35)	幅 30.60	厚さ 1.9	-	2.5mm/1 底黒	2.5mm/3 底 浅黄	ナヂ	釘穴1カ所	
201	泥土下層	(焼工)	残工	長さ 31.15	幅 31.25	厚さ 1.9	-	2.5mm/1 底黒	N6/0mm 底白	ナヂ	釘穴に釘が残存	
202	泥土下層	(焼工)	残工	長さ 31.30	幅 31.65	厚さ 2.0	-	107mm/3 オリーブ墨	10mm/1 底白	ナヂ	二孔一対の孔が3カ所	
203	泥土下層	(焼工)	窓工	長さ (30.05)	幅 (14.55)	厚さ 12.05	-	5mm/1 底	2.5mm/1 底白	ナヂ	二孔一対の孔が3カ所	
204	泥土下層	(焼工)	窓工	長さ (17.5)	幅 (18.0)	厚さ 1.7	筋輪	106mm/2 底 底	2.5mm/4 底 底	ナヂ	二孔一対の孔が3カ所	

第7表 A区遺物観察表(7)

寸法の( )は復元値。○は残存部を示す。軸の色調は、無軸の場合は、外側の色調を記載。

番号	遺構 層位	種別	器種等	産地	寸法(cm)			軸裏	色調		成形・整形	文様(外面/内面)、その他
					口径	底径	高さ		軸	軸上		
205	出土上層	磁器	筒丸瓶	肥前	(7.2)	—	(5.1)	透明軸	10G7W/1 明緑灰	NN/0 灰白	ロクロ	染付(草/△)、朱書き(茶口)、燒造痕
206	出土上層	磁器	丸瓶	肥前	(12.0)	4.4	3.5	透明軸	NN/0 灰白	NN/0 灰白	ロクロ	染付(△)、見込み鉢ノ目袖剥落・重ね焼き痕
207	出土上層	磁器	丸瓶	肥前	13.0	4.6	3.8	透明軸	2.5G7W/1 明緑灰	NN/0 灰白	ロクロ	染付(△)、見込み鉢ノ目袖剥落・重ね焼き痕
208	表土	磁器	丸瓶	肥前	12.8	8.0	3.7	透明軸	5G7W/1 灰白	NN/0 灰白	ロクロ	染付(△)、草花・花卉(△)、染付が緑色に発色
209	出土上層	磁器	瓶	肥前	—	—	(0.95)	透明軸	10G7W/1 明緑灰	NN/0 灰白	ロクロ	染付(△/家紋・草木)、朱書き(坤茶や)、燒造痕、外側面に目録、質入
210	出土上層	磁器	桜花瓶	肥前	15.6	6.6	6.15	透明軸	NN/0 灰白	NN/0 灰白	ロクロ	染付(岩・桜木・岩・束縛・松)
211	出土上層	磁器	端反瓶	肥前	24.5	11.4	3.8	透明軸	10G7W/1 明緑灰	NN/0 灰白	ロクロ	染付(△)、燒造痕、質入
212	出土上層	磁器	仏龕器	肥前	(5.8)	3.8	4.4	透明軸	10Y8/1 灰白	NN/2 灰白	ロクロ	染付(半菊花△)、右部内面は無釉、質入
213	出土上層	磁器	盖	肥前	(2.2)	—	(7.9)	透明軸	2.5G7W/1 灰白	NN/0 灰白	ロクロ	染付(梅花△)
214	表土	磁器	瓶	肥前か	—	6.0	(11.0)	透明軸	5G7W/1 朝オリーブ 灰	NN/0 灰白	ロクロ	無文
215	出土上層	磁器	水滴	肥前	—	—	2.8	透明軸	2.5G7W/1 灰白	NN/0 灰白	塑打	型押し(菊)、葉は染付、花芯と柄の横線は上筋、底面有目筋
216	出土上層	磁器	筒瓶	瀬戸美濃	6.0	3.7	6.8	透明軸	NN/0 灰白	NN/0 灰白	ロクロ	染付(梅△)
217	出土上層	磁器	筒瓶	瀬戸美濃	6.4	4.2	6.9	透明軸	NN/0 灰白	NN/0 灰白	ロクロ	口紅・鋼弦輪写(瓶△)
218	出土上層	磁器	筒瓶	瀬戸美濃	6.8	4.0	7.85	透明軸	NN/0 灰白	NN/0 灰白	ロクロ	鋼弦輪写(色・筋・月△)、口縁部内面に墨む
219	表土	磁器	丸瓶	瀬戸美濃	10.6	3.2	5.4	透明軸	NN/0 灰白	NN/0 灰白	ロクロ	染付(△/草花)、朱書き(坤伊平)、燒造痕
220	表土	磁器	瓶	瀬戸美濃系	—	4.0	(2.75)	透明軸	10G7W/1 明緑灰	NN/0 灰白	ロクロ	染付(△/壽)、朱書き(神安兵衛)、燒造痕
221	表土	磁器	角瓶	瀬戸美濃	8.2	5.6	2.4	透明軸	NN/0 灰白	NN/0 灰白	塑打、貼付 高有	陽刻(四瓣花・半菊花)
222	表土	磁器	丸瓶	瀬戸美濃	10.5	5.6	2.35	透明軸	NN/0 灰白	NN/0 灰白	ロクロ	口紅・上筋(△/波水・草)、朱書き(坤茶屋)甚 右衛門)、燒造痕
223	出土上層	磁器	瓶	瀬戸美濃	—	11.2	(3.45)	透明軸	10G7W/1 明緑灰	NN/0 灰白	ロクロ	型壓模筋(△/鶴・松・東洋・山・波・雲・桜花 意匠筋)、草・鳥)、短ノ目筋形高台、重ね焼き痕
224	出土上層	磁器	鉢	瀬戸美濃系	(21.6)	(12.6)	9.3	透明軸	10G7W/1 明緑灰	NN/0 灰白	ロクロ	染付(牡丹唐草・露葉・松・雲)、蛇ノ目筋形 高台
225	出土上層	陶器	甕形鉢	瀬戸美濃	(7.0)	3.8	5.5	灰軸	2.5T7W/2 灰黒	2.5T7W/2 灰黒	ロクロ	口筋、鉢絵(同心円△)、高台甕付は無釉、質入
226	出土上層	陶器	筒丸鉢	越中丸山△	7.8	4.0	6.6	灰軸	2.5T7W/2 灰黒	10H7W/4 △に五瓣形	ロクロ	底部外側は無釉、見込みに重ね焼き痕
227	出土上層	陶器	瓶	越中丸山△	—	(4.0)	(1.45)	鉢軸	2.5Y7W/3 暗緑	2.5Y7W/3 暗緑	ロクロ	底部外側は無釉、見込みに重ね焼き痕
228	表土	磁器	筒瓶	越中丸山△	(8.0)	4.4	8.4	透明軸	2.5G7W/1 灰白	NN/0 灰白	ロクロ	染付(梅・四方彌)、朱書き(坤伊平)、燒造痕 底下に6字の墨書き
229	表土	磁器	端反瓶	越中丸山△	(8.8)	3.0	4.4	透明軸	NN/0 灰白	NN/0 灰白	ロクロ	口紅・上筋(花・唐草△)
230	表土	磁器	丸瓶	越中丸山△	9.8	3.5	4.9	透明軸	NN/0 灰白	NN/0 灰白	ロクロ	口紅・上筋(花△)、朱書き(坤伊平)、燒造痕
231	出土上層	磁器	仏花瓶	越中丸山△	—	5.2	(6.5)	透明軸	NN/0 灰白	NN/0 灰白	ロクロ	上繪(梅花重ね・宝文が赤・頭部織籠が緑△)
232	出土上層	磁器	丸瓶	美濃焼(原作開拓記)	10.8	5.8	2.2	透明軸	NN/0 灰白	NN/0 灰白	ロクロ	色繪(△・双魚・松・玉蝶△)、統制番号「岐334」
233	出土上層	陶器	散蓮唐	波平地(波森地)	—	—	2.0	黄軸	5Y8/4 黄	7.5Y8/2 灰白	塑打	陽刻(△・羅か・質入)
234	出土上層	被質施釉陶器	筒瓶	在地	6.6	3.4	5.2	透明軸	5Y8/3 黄裏	5Y8/3 黄裏	ロクロ	鉢絵(区画・記号△)、高台甕付は無釉、質入
235	出土上層	陶器	瓶	在地系	—	8.0	(2.2)	灰軸	2.5Y7/2 灰黒	2.5Y7/4 灰黒	ロクロ	墨書き「仏々」、重ね焼き痕
236	出土上層	陶器	鉢	在地	—	(19.0)	(6.30)	—	2.5Y7/2 灰黒	2.5Y7/2 灰黒	ロクロ	無釉・内外側甕付者
237	出土上層	陶器	楕瓶	在地	27.2	14.6	12.8	鉢軸	7.5W7/4 灰	10H7W/3 △に五瓣形	ロクロ	底部外側は無釉、鉢付上半径32条
238	出土上層	陶器	瓶軸付	不明	—	12.7	(13.95)	鉢軸	鉢軸7.5W7/4 灰	鉢軸5Y8/2/4 灰黒	ロクロ	模様ナガ・指押 さえ・貼付高台の縁に4箇所に墨書き
239	出土上層	瓦質土器	鉢	—	(15.6)	—	(6.1)	—	5Y3/1 オリーブ系	2.5Y7/2 灰黒	ロクロナラ	全面施釉、見込みと胴部外側に新釉

第8表 A区遺物観察表(8)

番号	遺物 部位	種別	器種等	産地	寸法(cm)			釉	色調		成形・整形	文様(外面/内面)、その他
					口径	底径	器高		釉	焼		
240	表土	土製品	薄		長さ (6.85)	幅 (2.85)	厚さ 5.0	-	-	-	-	
241	表土	石製品	薄		長さ (6.95)	幅 (7.2)	厚さ (7.65)	-	-	-	-	縦模様
242	表土	磁器	輪花瓶	肥前 (蒲地)	(14.7)	(7.4)	3.9	透明釉	10YR8/1 明暁灰	N8/9 灰白	ロクロ	染付(草文)、上部「梅唐草・半葉唐草」、見込み模様、輪付は在地か、瓶付由田原高台
243	断面11	磁器	壺		-	(8.7)	(0.9)	-	2.5Y7/1 灰白	2.5Y7/1 灰白	ロクロ	
244	複瓦 (水道管)	IC (進し瓦)	棟瓦		長さ (22.8)	幅 (19.1)	厚さ 1.8	-	7.5Y5/1 灰	7.5Y7/1 灰白	ナデ	

第9表 B区遺物観察表

番号	遺物 部位	種別	器種等	産地	寸法(cm)			釉	色調		成形・整形	文様(外面/内面)、その他	
					口径 (底径)	底径 (幅)	器高 (厚さ)		釉	焼			
245	SB11	陶器	壺	中納戸川	-	(4.9)	(3.3)	灰釉	8Y6/3 ナリーブ黄	5Y8/2 にぶい焼	ロクロ		
246	SB11	陶器	腰巻瓶	小松	-	(4.5)	(5.4)	鉄釉	2.5Y8/1 坐墨	10Y8/4 淡黄調	ロクロ	鉄釉波しきけ	
247	SB11	陶器	瓶	在地か	-	(6.3)	(11.6)	鉄釉	7.5Y8/4 他	2.5Y5/2 灰黄	ロクロ		
248	SB11	磁器	端反襷	肥前	(8.0)	-	(3.5)	透明釉	N8/ 灰白	N8/ 灰白	ロクロ	染付(松文)	
249	SB11	銅鏡	寶永通文		2.5	2.5	0.1	-	-	-		裏面に「文」の字。又残	
250	SB12	磁器	端反襷	肥前	(7.9)	-	(0.9)	透明釉	N8/ 灰白	2.5Y8/2 灰白	ロクロ	染付(草花文)	
251	SB12	瓦	棟瓦		(4.0)	(3.5)	1.8	釉	10Y2/3 黒褐	7.5Y7/4 にぶい焼		光沢あり	
252	古代道路 面直上	陶器	鉢		(29.6)	-	(2.6)	-	2.5Y8/4 にぶい焼	2.5Y8/4 にぶい焼	ロクロ		
253	古代道路 面直上	陶器	水溜	中納戸川	(15.8)	-	(3.8)	鉄釉	5W4/2 にぶい焼	7.5Y8/2 淡黄調	ロクロ		
254	古代道路 面直上	陶器	水溜	中納戸川	-	(14.4)	(2.6)	鉄釉	7.5Y8/4 他	10Y8/4 淡黄調	ロクロ	底面切妻	
255	古代道路 面直上	瓦	軒先瓦		(6.4)	(3.6)	(2.0)	釉	5W2/1 黒褐	2.5Y7/4 にぶい焼		瓦当:玉文+唐草文。光沢あり	
256	古代道路 面直上	瓦	棟瓦		(6.3)	(5.8)	1.6	釉	10Y2/3 黒褐	7.5Y7/4 にぶい焼	光沢あり		
257	古代道路 面直上	瓦	棟瓦		(7.4)	(6.3)	2.0	釉	10Y2/3 黒褐	2.5Y8/6 根	光沢あり		
258	古代道路 面直上	瓦	棟瓦		(7.6)	(6.9)	1.9	釉	2.5Y8/4 暗赤褐	10Y4/4 赤褐	光沢あり		
259	古代道路 面直上	瓦	瓦當直筒 栓こころ		3.8	2.4	3.8	釉	10Y2/3 黒褐	2.5Y5/6 明赤褐	手づくね	底面に穴	
260	古代道路 面直上	瓦	瓦當直筒 栓こころ		4.9	4.2	4.8	釉	10Y2/3 黒褐	2.5Y5/6 根	手づくね	底面に穴。側面・上面に削られた跡	
261	表土・表土	磁器	壺		-	-	(4.0)	-	5W6/1灰	5W6/1灰	ロクロ	外面カキメ・格子伏印き、内面同心円当て具痕	
262	表土・表土	磁器	壺		-	-	(4.0)	-	5W6/1灰	5W7/1灰	ロクロ	外面カキメ・格子伏印き、内面同心円当て具痕	
263	表土・表土	陶器	直	中納戸川	(11.0)	-	(2.3)	灰釉	7.5Y6/3 にぶい焼	2.5Y6/6 根	ロクロ		
264	表土・表土	陶器	直	中納戸川	-	(5.6)	(1.9)	鉄釉	7.5Y5/3 にぶい焼	10Y7/3 灰白	ロクロ	見込みに円形の重ね焼き痕	
265	表土・表土	陶器	直	中納戸川	-	(5.8)	(1.6)	鉄釉	5Y8/2 灰白	7.5Y7/6 根	ロクロ		
266	表土・表土	磁器	筒	開穴直筒 瀬戸美濃	6.9	4.0	6.1	透明釉	N8/ 灰白	N8/ 灰白	ロクロ	染付(鳳凰文・草花文)	
267	表土・表土	磁器	筒	開穴直筒 瀬戸美濃	8.2	2.6	4.1	透明釉	N8/ 灰白	N8/ 灰白	ロクロ	染付(緑書体文)	
268	表土・表土	磁器	筒	丸筒	11.2	4.6	5.8	透明釉	N8/ 灰白	N8/ 灰白	ロクロ	染付(六歌仙と和歌文・四方摩文)	
269	表土・表土	磁器	筒	合子筒	9.8	-	2.1	透明釉	N8/ 灰白	N8/ 灰白	ロクロ	染付(梅花・樂文)、内面L字+文字の割離	
270	表土・表土	磁器	筒	直	-	9.0	(2.5)	透明釉	N8/ 灰白	N8/ 灰白	ロクロ	染付(青南波文・刻文)、内面L字+文字の割離	
271	表土・表土	磁器	筒	端反襷	瀬戸美濃	9.6	5.1	2.0	透明釉	N8/ 灰白	N8/ 灰白	ロクロ	白磁、見込み幾何学文
272	表土・表土	瓦	軒先瓦		瓦当捲 (17.0)	高さ (9.3)	厚さ 1.8	釉	10Y2/3 黒褐	2.5Y6/6 根	瓦当巴文。光沢あり		
273	表土・表土	石製品	鏡		(10.9)	7.5	(1.8)	-	-	-	-	粘板岩。使用による摩滅跡	

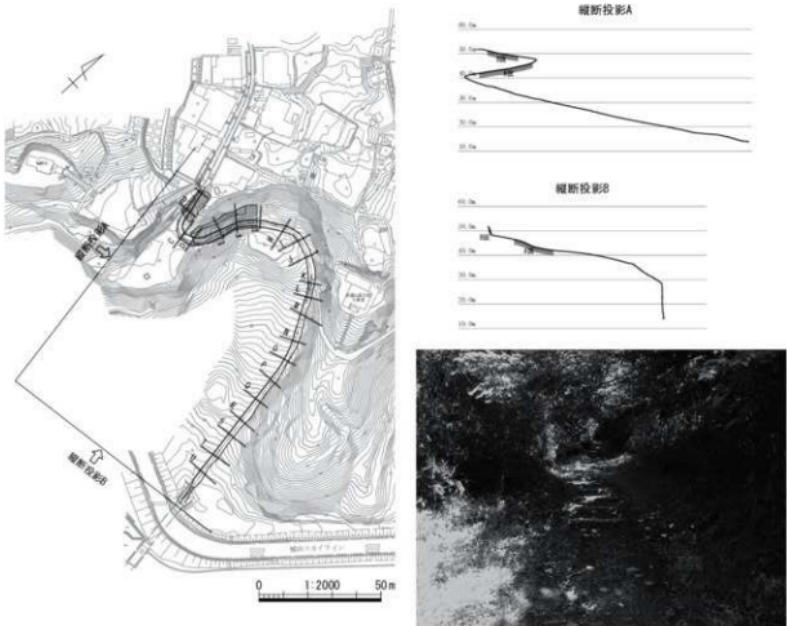
## 第5節 現況遊歩道の測量

今回の発掘調査区を含む近世北陸道の呉羽丘陵東斜面の峠道は、調査前には遊歩道となっていた。丘陵の麓から山腹を蛇行しながら峠に至る。今回工事にあたり、遊歩道が通る谷の大部分が工事用仮設道路で一時的に盛土造成されるため、現況道の記録としておよそ10m間隔で横断図と、麓から峠までの縦断図を作成した。

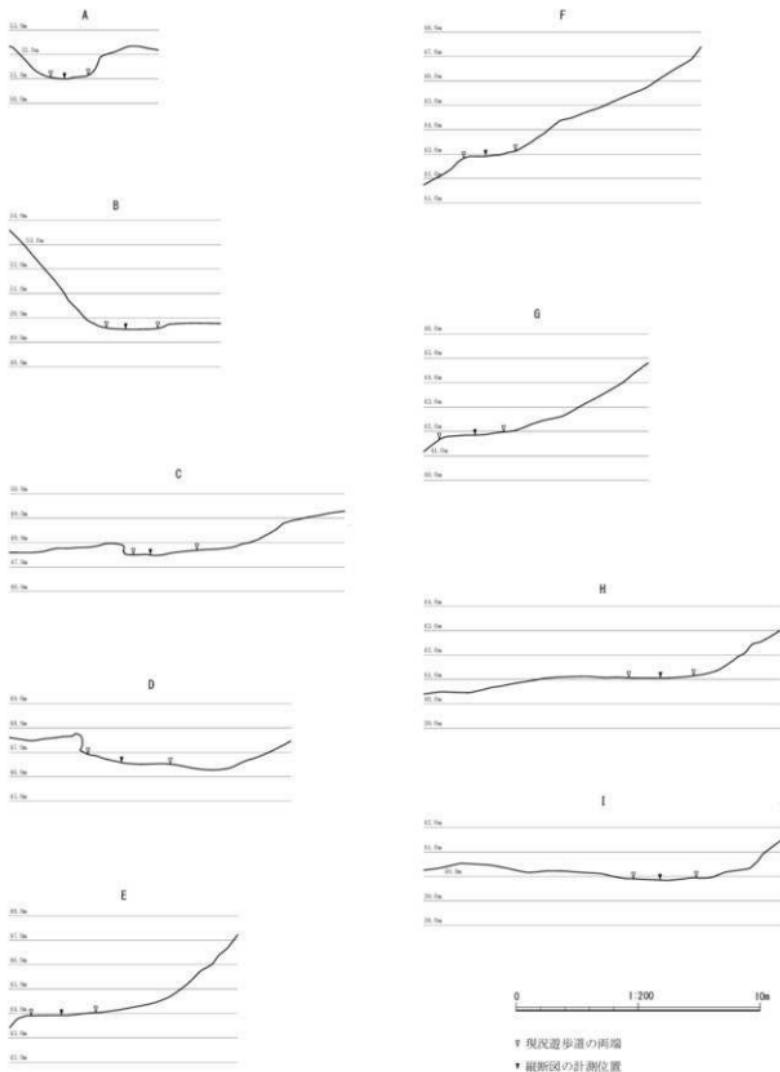
遊歩道は、車道（城山スカイライン）の下をくぐった地点から始まる。ただし、近世にはこれより下（南）の、現在公園広場となっている場所に麓の起点があったとみられる。道はしばらく直線的に上り、西に大きく湾曲した後、北に屈曲して峠に至る。現在の麓から峠までは約200mで、道幅は1.5～3.2mである。路面は未舗装の砂利敷で、部分的にコンクリート擬木を用いた簡易な階段が設置されている。道の下半は、谷（西）側にコンクリート側溝が敷設されている。道の両側は主に竹林である。

麓から中腹(U～K断面)までは、谷の東側を巻くように上る。路面はやや凹面か水平面をなしている。I～G断面付近の道の南側にある平坦面は、人工的な造成面であるが、時期は不明である。F・G断面付近が谷地形の最奥部となる。F～D断面付近は斜面をカットして道を造成しており、谷側は急傾斜で落ち込む。C断面の付近の南側は、現代の住宅跡である広い平坦面がある。峠に近いA・B断面付近は、東側に小さな尾根筋があり、狭い切り通しの中を道が通る。

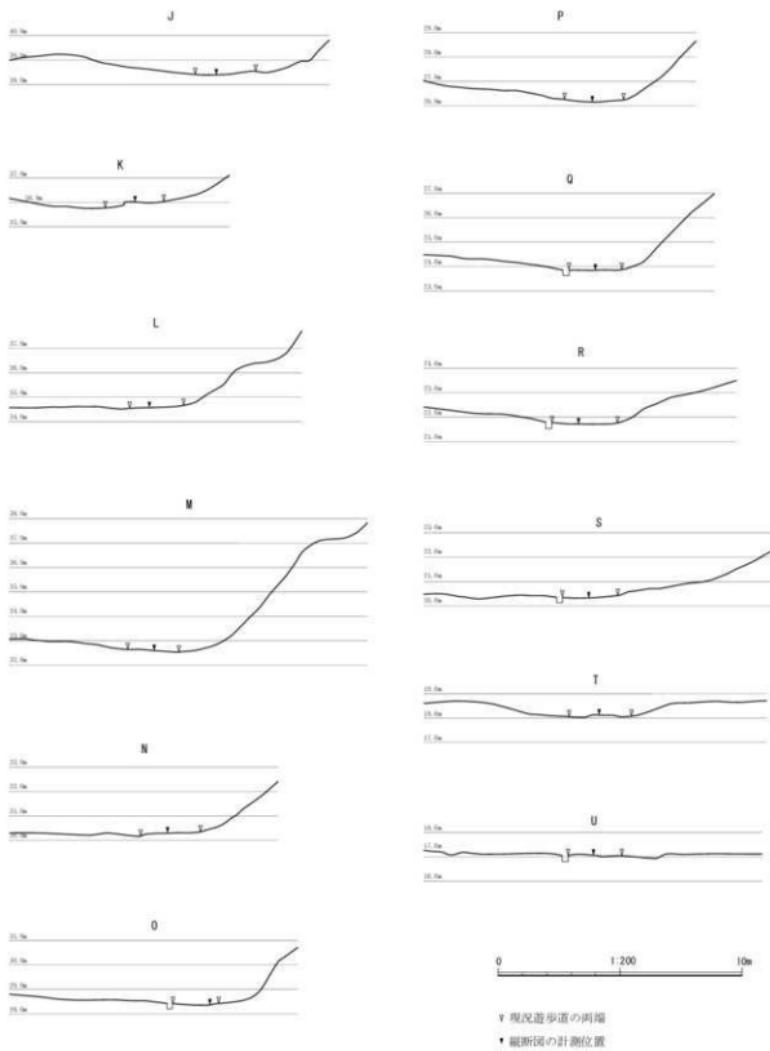
(野垣)



第38図 現況遊歩道縦横断図(1)



第39図 現況遊歩道縦横断図（2）



第40図 現況遊歩道縦横断図（3）

## 第4章 自然科学分析

### 第1節 花粉分析

#### はじめに

明神山遺跡は、富山県富山市茶屋町・寺町地内に所在し、神通川左岸の呉羽丘陵上に立地する。調査区からは江戸時代後期の街道跡などが検出されている。

本報告では、調査区から採取された土壤を対象に、古植生に関する情報を得ることを目的として花粉分析を実施する。

#### 1. 試 料

分析試料は、江戸時代後期とされる道路の側溝である SD01（覆土下層）、道路造成土中の溝である SD08 より採取された土壤、計 2 点である。分析試料および分析項目一覧を第 10 表に示す。

第 10 表 分析試料、分析項目一覧

試料名	試料の質	花粉分析
SD01 道路側溝（覆土下層）	土壤	○
SD08 道路造成土中の溝	土壤	○
	点数	2

#### 2. 分析方法

試料約 10g について、水酸化カリウムによる泥化、簡別、重液（臭化亜鉛、比重 2.2）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス（無水酢酸 9 : 濃硫酸 1 の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し、400 倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。同定は、当社保有の現生標本や島倉（1973）、中村（1980）、藤木・小澤（2007）、三好ほか（2011）等を参考にする。

結果は同定・計数結果の一覧表、及び花粉化石群集の分布図として表示する。図表中で複数の種類をハイフオンで結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。なお、木本花粉総数が 100 個未満のものは、統計的に扱うと結果が歪曲する恐れがあるので、出現した種類を + で表示するとどめておく。

### 3. 結 果

結果を第11表、第41図に示す。

SD01では花粉化石の産出状況が悪く、定量解析を行えるだけの個体数を得ることができなかつた。わずかに産出した花粉化石の保存状態も悪く、花粉外膜が破損、溶解しているものが多く含まれていた。検出した花粉化石についてみると、マツ属、スギ属、ハンノキ属などの木本花粉が、イネ科、カヤツリグサ科、タンボボ亜科などの草本花粉がわずかに確認された。

SD08からは花粉化石が産出するものの、保存状態はやや悪い。また、シダ類胞子が多産する傾向にある。木本花粉についてみると、マツ属が優占し、スギ属、カバノキ属、ハンノキ属、ニレ属一ケヤキ属などを伴う。草本花粉ではイネ科、ソバ属、アリノトウグサ属、キク亜科、タンボボ亜科などが認められる。

### 4. 考 察

花粉分析の結果を見ると、道路の側溝とされるSD01では花粉化石の産出状況が悪く、検出された花粉化石の保存状態も悪い。一般的に花粉やシダ類胞子の堆積した場所が、常に酸化状態にあるような場合、花粉は酸化や土壤微生物によって分解・消失するとされている（中村、1967；徳永・山内、1971；三宅・中越、1998など）。検出された花粉化石の保存状態が悪いこと、ある程度風化の影響を受けても同定可能な種類が多く認められることなどを踏まえると、堆積時に取り込まれた花粉・シダ類胞子が、その後の経年変化により分解・消失したことが考えられる。

道路造成土中の溝とされるSD08は、花粉化石が豊富に産出するものの、それ以上にシダ類胞子の割合が高い。花粉化石よりもシダ類胞子のほうが分解に強いこと、花粉化石の保存状態がやや悪いことなどから、SD08も経年変化による分解の影響を受けていると推測される。その点を踏まえて古植生を検討する。

SD08の花粉化石群集を見ると、木本花粉が優占し、マツ属の多産で特徴づけられる。このうち亞属まで同定できたものは、全て複維管束亞属であった。マツ属複維管束亞属（いわゆるニヨウマツ類）は生育の適応範囲が広く、尾根筋や湿地周辺、海岸砂丘上など他の広葉樹の生育に不適な立地にも生育が可能である。また、極端な陽樹であり、やせた裸地などでもよく発芽し生育することから、伐採された土地などに最初に進入する二次林の代表的な種類である。このことから、当時の調査地周辺で二次林などのマツ属が分布していた可能性がある。なお、マツ属の急増は日本各地で知られており、

第11表 花粉分析結果

種類	SD01	SD08
木本花粉		
ツガ属	-	1
マツ属複維管束亞属	1	19
マツ属（不明）	11	144
スギ属	3	9
カバノキ属	-	2
ハンノキ属	2	12
コナラ属コナラ亜属	-	1
コナラ属アカガシ亜属	-	1
ニレ属一ケヤキ属	-	2
ツツジ科	-	1
草本花粉		
イネ科	2	15
カヤツリグサ科	1	2
ソバ属	-	4
アザ科	-	1
ナデシコ科	1	2
アリノトウグサ属	1	9
セリ科	-	3
ヨモギ属	-	3
キク亜科	1	4
タンボボ亜科	2	6
不明花粉		
不明花粉	1	3
シダ類胞子		
シダ類胞子	45	647
合計		
木本花粉	17	192
草本花粉	8	49
不明花粉	1	3
シダ類胞子	45	647
合計（不明を除く）	70	888



第41図 花粉化石群集

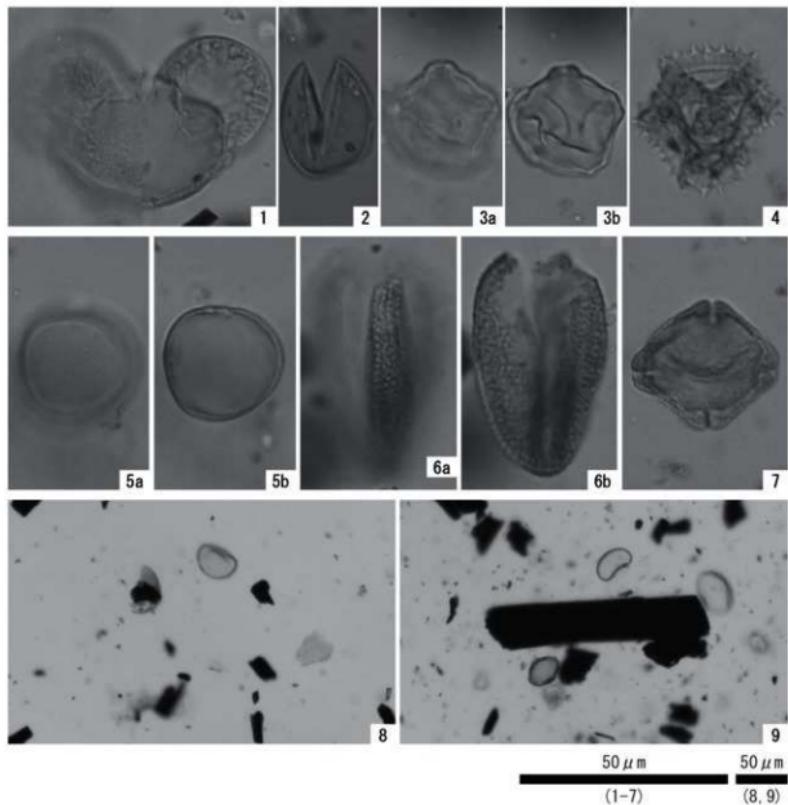
常願寺川や神通川などの扇状地上では中世以降マツ属が増加し、近世以降に優勢になることが知られている（田中・千葉, 2007）。対象とした遺構は江戸時代後期の溝とされることから、既存の調査事例とも調和的である。

その他の木本類では、スギ属、カバノキ属、ハンノキ属、ニレ属—ケヤキ属などが認められる。スギ属は湧水地や沢筋などに、ハンノキ属、ニレ属—ケヤキ属は河畔や低湿地に生育することから、神通川やその支流沿いなどに由来すると思われる。また、周囲の森林にはツガ属などの針葉樹、カバノキ属、コナラ属コナラ亜属などの落葉広葉樹、コナラ属アカガシ亜属などの常緑広葉樹も生育していたことがうかがえる。

一方、草本類ではイネ科、アリノトウグサ属、キク亜科、タンボボ亜科など、開けた明るい場所に生育する、いわゆる「人里植物」が確認された。これらは側溝付近の草地などに由来すると考えられる。なお、栽培の可能性があるソバ属が認められたことから、当時の周辺での栽培・利用も想定される。

#### 引用文献

- 藤木利之・小澤智生, 2007, 琉球列島植物花粉図鑑、アクアコーラル企画, 155p.
- 三宅 尚・中越信和, 1998, 森林土壤に堆積した花粉・胞子の保存状態、植生史研究, 6, 15-30.
- 三好教夫・藤木利之・木村裕子, 2011, 日本産花粉図鑑、北海道大学出版会, 824p.
- 中村 純, 1967, 花粉分析、古今書院, 232p.
- 中村 純, 1980, 日本産花粉の標識 I II (図版)、大阪市立自然史博物館収蔵資料目録 第12, 13集, 91p.
- 島倉巳郎, 1973, 日本植物の花粉形態、大阪市立自然科学博物館収蔵目録 第5集, 60p.
- 田中義文・千葉博俊, 2007, 射水平野周辺の古環境変遷、PALYNO, 5, 34-47.
- 徳永重元・山内輝子, 1971, 花粉・胞子・化石の研究法、共立出版株式会社, 50-73.



1. マツ属 (SD08)
2. スギ属 (SD08)
3. ハンノキ属 (SD08)
4. タンボボ亜科 (SD08)
5. イネ科 (SD08)
6. ソバ属 (SD08)
7. アリノトウグサ属 (SD08)
8. 花粉分析ブレバート内の状況 (SD01)
9. 花粉分析ブレバート内の状況 (SD01)

第42図 花粉化石

# 第5章 総括

## 第1節 道路の変遷と特徴

### 1. 本節の趣旨

今回の発掘調査地点は呉羽丘陵を越える近世北陸道跡で、蛇行しながら斜面を上る峠道である。近世から現代までの道路遺構を検出し、まずその変遷と構造を整理する。また、県内周辺で検出されている街道との比較や、上部から流れてきた土に多量に包含されていた陶磁器や瓦等についても検討したい。

近世北陸道は複数のルートがあり、富山藩領では海岸近くを通るルートが本街道とされた。今回調査地を含むルートは富山町を通る「富山道」と呼ばれたが、以下では「近世北陸道」あるいは単に「北陸道」と呼称する。

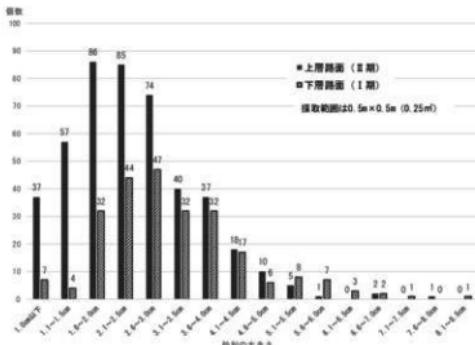
### 2. 道路の変遷

**概要** A区では、大きく上層・下層2面の近世道路を確認し、上層道路は側溝の掘り直しによりさらに2時期に分けられる。その後、近代さらに現代への変遷が認められる。B区は、道路面は一面のみであるが、側溝の掘り直しによる近世から近代にかけての造り変えがある。また、断面観察でその上層に現代の道路面があることがわかった。

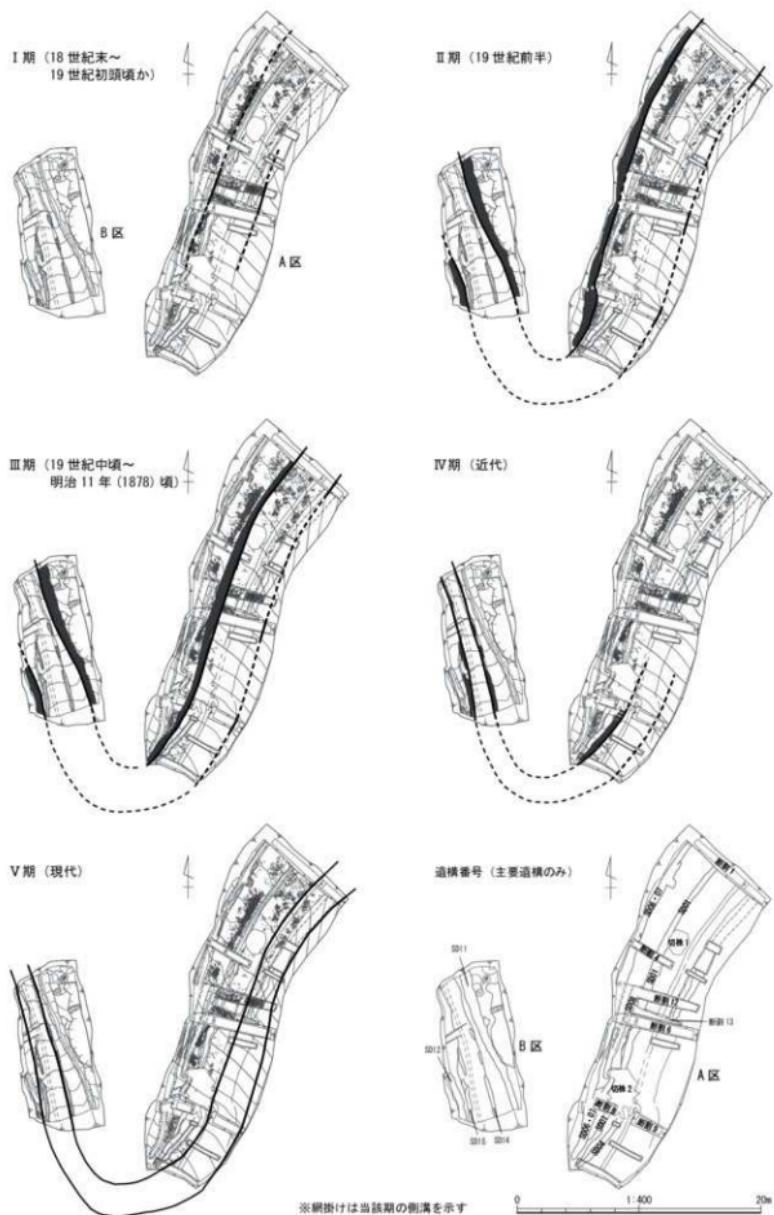
大きく5時期に分けられる変遷を古い順にまとめる(第44図)。

**I期** A区の下層道路が該当する。部分的な検出であるが、断割12・13において砂利敷の路面を確認した。断割12で確認した幅4.17mの砂利敷が道路幅となろう。また、断割4の断面でも路面の硬化層と砂利敷を確認した。この2地点の検出レベルから計測した路面の斜度は11.93°で、後述する上層道路より急勾配である。上層道路との対比でみると、A区中央の断割6・13付近を境に、それより北側は上層道路との比高差が徐々に大きくなる。逆に断割6・13付近より南は、上層道路との差が少なくなり、調査区南部では削平されていることが推測される。すなわち、下層から上層道路への造り変えにあたり、A区中央付近を境に北側は盛土、南側は切り土することで勾配を緩くしたと考えられる。土層を観察する限り、下層道路の造成にあたって大規模な盛土や造成を行った状況は認めにくい。A区北部に存在した谷地形もこの時点では大きくは埋めておらず、地形を残しつつ、最小限の切り土や盛土によって造成したと考えられる。

第43図は下層路面(断割12)で採取した砂利と、A区北西部の上層路面で採取した砂利の比較である。部分的なサンプル採取なので一般的



第43図 路面の砂利の寸法



第44図 道路の変遷

な傾向といえるかわからないが、相対的に下層路面の砂利の方が大きいことがわかる。

なお、下層道路の西側に溝SD08が併行して延びる。断面観察によれば下層路面より上から掘り込まれており、下層道路に伴う側溝ではない。このSD08を側溝とするもう一段階新しい路面が存在した可能性もあるが、断面では対応するような面を確認できず、上層道路へ造り変える造成作業段階の排水溝の可能性がある。

B区では、A区の下層道路に対応する時期の路面は確認していない。これは上記したとおり、A区中央付近より南側（上方）は急勾配の道を緩くするために切り土され、当該期の路面が残存していないと考えられるためである。

I期の時期については、第2節で検討するとおり、近世北陸道がこのルートになったのは寛政10年（1798）頃以降であることを考慮すると、18世紀末から19世紀初頭頃か。

**II期** A区上層道路の古段階、SD06・07を側溝とする時期である。SD06が埋没後、SD07をほぼ同じ場所で掘り直しているため、厳密にはSD06とSD07の時期で細分できる。I期の下層道路の急勾配を解消するため、A区北半では盛土、A区南半では逆に切り土して勾配を緩やかにしたと考えられる。平面的には、山側の地山を削り込んで平坦面をより広くとるよう造成した結果、I期より道路端が1mほど山側（西）に広がっている。道路基盤土は、断割1・4・12の断面でみられるように、薄い盛土を水平に重ねる状況が認められる。この造成にあたり、A区北部（断割1付近）に存在していた谷も大規模に埋められたと考えられる。断割1でみられる上層道路面下の厚い造成土はそれを示す。A区北半は盛土主体、南半は切り土主体の造成により構築し、I期と異なり、大がかりな造成を行ったことを特徴とする。谷側（東）の道路端がどこにあったかはつきりしないが、次のIII期の路肩と同じだったとみれば、道路幅は、北端（断割1）付近で約6.5m、中央～南部（断割6・9付近）で5.7～5.9mとなる。路面の平均斜度は8.23°で、I期より3°以上緩い。路面には砂利を敷く。谷側の側溝の存否については、近代以降の攪乱のため断定できないが、土層断面をみると設けていた可能性が高い。排水はそのまま谷へ流せばよく、わざわざ谷側に側溝を設ける必要性も認めにくい。なお、A区北端付近は、他の地点・時期より道路幅がかなり広く、山側に茶屋等の施設が置かれていた可能性があるかもしれない。

B区は、SD11・12の両側側溝の道路が対応するとみられる。道の両側が高い小さな切り通し状の凹地形を通るため、両側側溝としたのであろう。道路幅は3.6～3.7mで、A区より狭い。地表面をそのまま路面としていることもA区との違いである。

時期は、SD06・07の上に堆積する流水層出土遺物や前後の時期から、19世紀前半頃と考える。

**III期** A区上層道路の新段階、SD01を側溝とする時期である。前の期のSD06・07からSD01へ側溝を谷側にずらして掘り直している。丘陵上部からの土砂崩れにより、山側の道路が埋没したため側溝の掘り直しを余儀なくされたのであろう。この側溝掘り直しは、道路幅を単純に狭めるものであったのか、あるいは路面を谷側に平行移動させる造り替えであったのか断定はできないが、路面下の造成土は、III期に拡張造成した状況は見られないことから、道路幅を狭めるものだったのではないか。この場合、A区南端付近はSD06・07からSD01への側溝の移動距離がありなく、道路幅が狭まる度合は北部においてより大きい。道路幅は、断割1・6付近は3.6～3.7m、断割8～9付近は4.1m程度と推定できる。断割6・9では谷側の路肩が落ち込む状況を確認できる。谷側の側溝は、II期と同様、存在しなかった可能性が高い。路面の平均斜度は8.84°である。II期とほぼ同じ面を路面とするが、調査区北部や中央部の断割では、路面を一部再造成している状況がみられた。路面は砂利を敷く。

B区は、II期と同じSD11・12を側溝とする道路である。幅は3.6～3.7mで、A区と同じである。

2間幅を基準にしたことが推測できる。

III期の時期は19世紀中頃から後半と考える。側溝から近代遺物も出土することから、明治11年(1878)の天皇行幸に伴い北東に新道が開削される頃まで街道として使用されたとみられる。

**IV期** A区はSD04を山側の側溝とし、B区はSD14・15を両側側溝とする近代の道路である。B区は幅1.40～1.85mと、III期の半分以下に縮小する。明治11年の新道開削によって幹線道としての役目を終え、規模が縮小したのであろう。A区の道路幅は不明であるが、B区とほぼ同じか、少し広い程度と思われる。A区では、IV期・V期の道路とほぼ重なる範囲で谷側が搅乱されている。このため、近・現代に道路範囲を掘り返して造成し直した可能性がある。

**V期** IV期後から現在までの現代道路である。B区では、盛土を行って戦後に道路面を造成し、その後再度盛土を行って、現在の遊歩道面を造っている。したがって、少なくとも2時期の道路面があったことになる。一方、A区はほとんど盛土がなく、IV期以降はほぼ同じ路面であったとみられる。現在(発掘調査前)の遊歩道の幅は、A区2.0～2.9m、B区1.5～2.3mで、概してA区の方が広い。道幅はIV期をおおよそ踏襲したと考えられる。なお、A区北部に存在する切株1の樹齢は約94年であった。現在の遊歩道は、この切株を避けて通ることから、遅くとも昭和初期には現在の道幅が形成されていたと考えられる。

### 3. 他遺跡との比較

県内での近世北陸道の発掘調査は、平野部の射水市水上・本開発遺跡の成果がよく知られている(大島町教委2000)。17世紀中頃～後半の整備開始期から、近代の街道終焉期まで6期の変遷が認められた。両側側溝の道路で、道幅は、街道整備期は1.5～1.8m、その後17世紀後半以降は2.6～2.8mで推移している。およそ1間半となろう。路面には円礫層が敷設されている。また、富山市の富山城下町では断面による確認で、約9m(5間)幅の北陸道の土層が検出されている(富山市教委ほか2009)。

越中・加賀の国境にある俱利伽羅峠の街道は峠道という点で、今回の調査と共通する。津幡町教育委員会が加賀国側の北国街道の試掘調査を行い、次のような特徴が認められている(津幡町教委2019)。①路面幅は2.6～3.5mで場所により違いがある。尾根上では7m以上のところもある。②側溝は、雨水が溜まるような切り通し状の凹地形では両側に設け、尾根上など崖に面する箇所は設けずに下に流す。③路面は基本的に中央が高いカマボコ形を呈する。規模こそ吳羽丘陵の本調査区よりやや狭いが、側溝の規模や設置する場所など類似点が多い。また、本調査区では谷側の側溝は存在しなかつた可能性が高いことを指摘したが、俱利伽羅峠も谷に面する場所は設けていないとされ、共通する。

富山城下町の主要部を通る約5間幅の北陸道を除けば、本調査区の道路幅は他遺跡の検出事例と比べて遜色ないどころか、むしろ広い。街道として十分な規模を有していたといえる。「越中道記」(正保4年(1647))では、越中国内の「大道」は幅2間(3.6m)とされている。本調査区とは異なる時期の史料であるものの、本調査区I期は2.3間(4.17m)、II期はA区3間以上が推定されるが、B区は約2間、III期はほぼ2間で、2間に近い点は注意される。また、水上・本開発遺跡と俱利伽羅峠の道路幅は2間よりやや狭いが、俱利伽羅峠は山間地における地形的な制約が考えられ、水上・本開発遺跡は「本開発の七曲り」にあたり防衛上の観点から狭くした可能性がある(大島町教委2000)。そのようななかにおいて、史料に書かれる2間幅に対してほぼ半間以内の誤差におさまっていることは、むしろ注目すべき類似のように思える。

#### 4. 出土遺物について

出土遺物で注目されるのは、A区北西部で多量に出土した19世紀を中心とする陶磁器である。肥前・瀬戸美濃を中心とする磁器碗、越中瀬戸・越中丸山・小杉など在地系の陶器碗が多く、喫茶用の茶碗とみられる。上部から流れてきた流土層に多く含まれ、江戸時代の「峠茶屋」の地名が示すとおり、尾根上の峠に茶屋があったことがうかがえる。江戸時代後期に描かれたとみられる「越中富山船橋景」(第5図)や絵馬「明神山七面參詣図」では、茶屋は峠に至る坂道の脇に描かれ、尾根上の峠には見られないが、出土遺物から19世紀前半頃には峠部分にも存在していたことがわかる。なお、天保9年(1838)「廻国御巡見御通行役懸り等留帳」には、「峠茶屋」に餅店4軒、酒店2軒、草履店、草鞋店があったことが記されている。また、峠近くには「アメヤ」や「マンジュウヤ」などを屋号とする家がある(呉羽山観光協会2009)ことも茶屋の存在を裏付ける。

陶磁器には文字を書いた資料が30点以上認められる。多いのは、焼き緋ぎ修理した磁器の高台内に朱墨で書かれた文字である。「峠伊平」、「峠安兵衛」、「峠茶屋カ嘉右衛門」といった人名のほか、「峠茶や」、「峠」といった地名を表すものがある。「峠伊平」は4点出土している。全体的に「峠」を記すものが多い。焼き緋ぎを依頼した峠茶屋の依頼主あるいはその地名を書いたのであろう。限られた調査地点において相当数の資料が出土していることから、複数の茶屋が、まとまった量の茶碗の焼き緋ぎを依頼していた様子がうかがえる。

文字資料としても1点注目されるのは、硯(第21図39)に彫られた「上々高田石 たつ」の銘である。「高田石」は岡山県真庭市勝山地域で産出される高田石を意味する可能性が高い。高田石は黒色の粘板岩で、そこで作られる硯は室町時代以来の伝統があるとされる。硯の流通を物語る貴重な資料といえる。

瓦は、陶磁器と同じく上方から流れてきた流土や表土を中心に、近世の焼瓦と近代の釉薬瓦が出土している。焼瓦の量はあまり多くなく、茶屋に葺かれていたものか不明である。富山藩の丁子梅鉢文を入れた軒棟瓦が1点出土している。この瓦が使われた富山藩関係の建物としては、二代藩主前田正甫が建立し、五代藩主利幸が藩主の祈願所とした長久院や、万治年に富山藩士奥村藏人が建立した七面宮が考えられる。前者は本調査区から尾根を挟んだ南西側の中腹にあったとみられ、可能性は低い。七面宮は本調査区の西上方、稻荷社前の広場に存在したとの推定があり、この瓦かもしれない。一方、近代の釉薬瓦は、北上方の尾根頂部付近にあった近代の「八田瓦」窯場から転落したものであろう。窯道具である栓ころや長棒が出土しているほか、窯の壁体に使った可能性がある焼けた埠もある。周辺の地表面にも同じ遺物が多く散乱していた。(野垣)

### 第2節 明神山・五時谷における近世北陸道と周辺遺構

#### 1.はじめに

本調査区周辺は近世北陸道のルートにあたるとともに、近世富山の風光明媚な名所として複数の寺社が建てられ、参詣道も整備された。現在でも複数の道跡や建物跡、造成面、各種の石造物が現地で確認できる(武内2007a・b、古川2012・2020、西井ほか2018)。ただ、それらの比定地や道の性格については未解明な部分も多く、論者によって見解の一致をみていない。

本節ではこれまでの研究を参照し、今回の発掘成果と絡めながら北陸道のルート変更や建造物の比定について検討を行う。

## 2. 近世北陸道の「付替」について

今回発掘調査を行った近世北陸道の峠道ルートについては、寛政10年（1798）頃に付け替えられたものという重要な指摘を武内淑子氏が行っている（武内 2007a・b）。根拠とされたのは、天保9年（1838）の『廻國御巡見留帳』にある「右大坂峠急ニ付往来人難儀およひ候故寛政十年之頃富山吉沢屋宇兵衛執持御郡役所より人足手傳右道付替ニ相成申候當年まで四十年斗ニ相成申候」の記述である。大坂峠が急で往来に難儀したため、寛政10年頃に富山の吉沢屋宇兵衛の執り持ちで、郡役所より人足が手伝い、道を付け替えた、という内容である。武内氏はこれを北陸道の付け替えと指摘するのに對し、古川知明氏は「大坂」は北陸道ではなく、七面宮參詣道とされている（古川 2020）。この点は今回の発掘調査成果の評価にも関わるため、検証しておきたい。結論からいうと筆者は北陸道の可能性が高いと考える。理由は次のとおりである。

- ・『廻國御巡見留帳』には、七面宮の位置を示す部分で、「五時谷七面宮坂之上に御座候」の記述がある。この「坂」と「大坂」は區別されており、とするなら「坂」が七面宮參詣道で、「大坂」は北陸道に対応すると考えられる。
- ・直接的な根拠ではないが、「大坂」の呼称は、「大道」「越中道記」（正保4年（1647））や「大路」（石黒信由著「増補大路水經」天保7年（1836））である北陸道の坂という意味とも考えられる。
- ・近世北陸道の呉羽丘陵越えの峠道は、「安養坊坂」や「紅葉坂」と呼ばれた。寛政10年より前の史料である「越中道記」（正保4年）、「延宝越中国絵図」（延宝6年（1678））、「北陸道中記」（明暦3～享保12年（1657～1727））はいずれも「安養坊坂」などに対し、寛政10年より後の「越中古実記」（文化7年（1810））は「紅葉坂」と呼称が変わっており、寛政10年頃に北陸道が別地点に付け替えられることと整合する。
- ・北陸道の峠道の坂の長さについて、「越中道記」（正保4年）は3町（327m）、「立山遊記」（天保15年（1844））は2町（218m）と記す。2町は現ルートの東麓から峠までの距離に近い。どこからを坂とみなしたか、測量方法の誤差などが考慮されるにしても、両者の違いは大きく、やはり付け替えがあったことを裏付ける。

以上のとおり、寛政10年の前後で史料にある北陸道の坂の呼称や長さが変わっており、付け替えがあったと考える。したがって、寛政10年頃の前と後でルートは分けて考える必要があり、今回発掘調査を行ったのは、付け替え後のルートということになる。

これによって発掘調査成果をみると、上層道路は出土遺物から19世紀に比定することができ、史料の記載と整合する。下層道路は出土遺物が少なく、直接的な時期比定は難しいが、18世紀以前の遺物が相対的に少量であることを考慮すると、下層も大きく遡らない時期を想定でき、寛政10年頃以降とみて問題ないと思われる。なお、発掘調査で確認した下層から上層道路への造り替え、あるいは上層道路でみられた側溝の掘り直しによる路面の移動を、史料にある「付替」とみる向きもあるかもしれないが、同文献では「右道付替後一周年過て古道跡え之下タ之茶屋毫軒相建申候…」とあり、新旧の道は明らかに別の道とみなされていることから否定できる。

それでは付け替え前、近世中期以前の北陸道はどこを通っていたか。この点も上記の問題に関連して武内氏と古川氏による異なる説がある。武内氏は近世後期ルート（発掘調査地を含む現ルート）より南西側の尾根筋を想定し、古川氏は北東側の谷筋、現在の主要地方道富山高岡線に重なるルートを指摘している（第45図）。武内氏のいう南西側の尾根筋ルートは、「越中道記」に記された3町（327m）という坂の長さにはほぼ一致する。また、地形をみると、坂の勾配は付け替え後の現ルートより急だつたと推測され、『廻國御巡見留帳』にある坂が急なため付け替えたという記述とも整合する。射水市

永森神社蔵の絵馬「明神山七面参詣図」には、右側に近世後期の北陸道とみられる道、左側に七面宮参詣道があり、多くの人が行き交う様子が描かれるが、両道の間の尾根筋に人がいない道があつて、途中で途切れている。武内氏のルートとすれば、この道が付け替え前、近世中期以前の北陸道の名残かもしれない。一方、古川氏の指摘する北東側の谷筋ルートは、周辺では最も比高差がないことや、直線性が意図されたという主要街道の性格（古川 2020）を考えると、ここに道を通した可能性も十分考えられる。今後の課題であろう。

### 3. 近世後期における明神山・五時谷周辺の遺構

最後に近世後期における明神山・五時谷周辺の北陸道と寺社等の復元案を示す（第45図）。武内 2007a・b、古川 2012・2020、西井ほか 2018 を参照しつつ推定を行ったもので、2案がある。

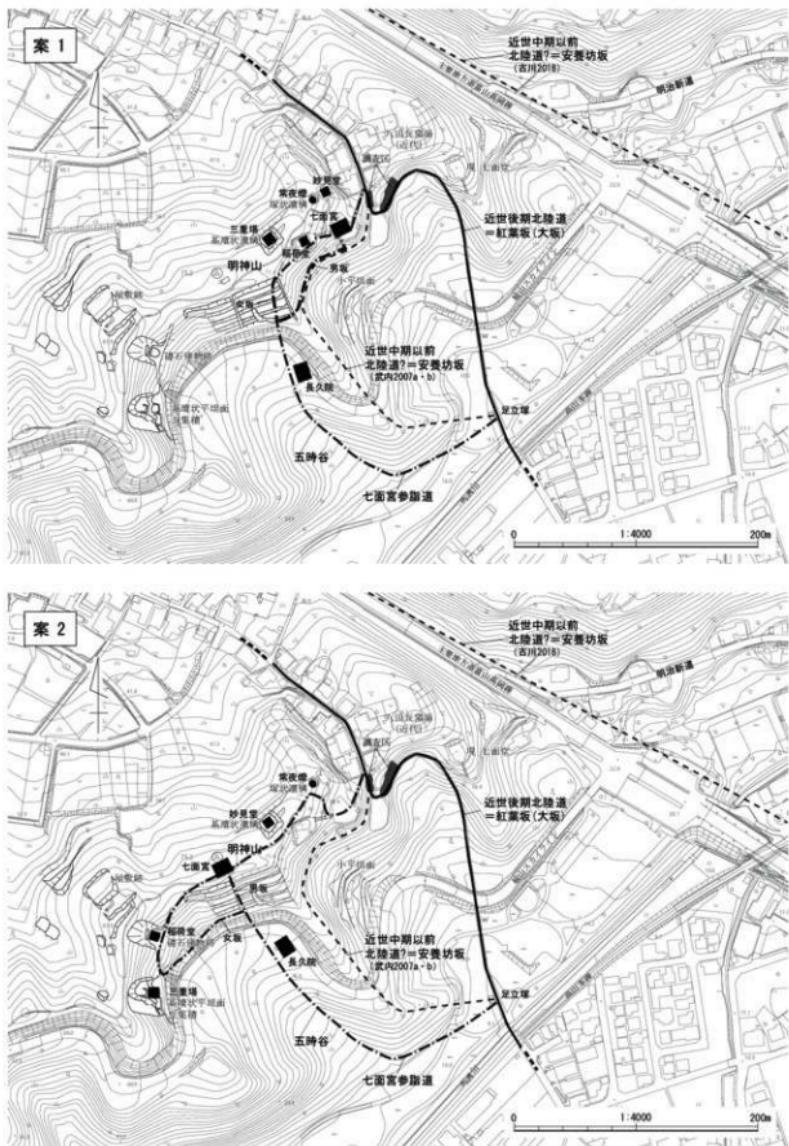
案1は、七面宮の位置を、従来考えられているとおり、現在の稻荷社前の広場に置くものである。七面宮参詣道は、近世後期絵図によると北陸道から山を挟んだ西側の谷筋を通ることから、ここが妥当であろう。この参詣道が通るのが五時谷である。七面宮参詣道は、途中「男坂」と「女坂」に分かれるが、この案では両坂が現地でどのように比定されるか特定できず、大雑把な図示である。長久院は、絵図では七面宮参詣道の右脇に描かれることから推定した。「明神山の中腹五時谷に」建立されたとする記述（小柴 1913）とも合致する。現在は車道が敷設されているため痕跡はない。このすぐ北東にある小平坦面遺構が長久院跡地かとも思われたが、参詣道から尾根を挟んで離れることになり、可能性は低い。妙見堂は、絵図では北陸道の左側（西側）に描かれる。武内淑子氏のご教示からもこの辺りが候補となる。昭和 21・27 年の航空写真ではここに隅丸方形状の区画が認められ、妙見堂跡地の可能性がある。七面宮、稻荷堂、常夜燈、三重塔の推定地は、武内 2007a・b、古川 2020 から比定した。常夜燈跡地は塚状遺構が、三重塔跡地は基壇状遺構が残る。

案2は、七面宮を西側の尾根上に置く案である。案1の七面宮比定地は平坦面が狭く、庫裡、神門などを含む施設をすべて配置できるかという疑問に端を発する。七面宮が案1の場所に推定されているのは、現存する稻荷社との位置関係による部分もあると思うが、そうした前提を一端取り去り、現地で確認される遺構と絵図の記載を重視した。この場合、五時谷の西側で確認されている礎石建物跡と基壇状平坦面がそれぞれ稻荷堂、三重塔に比定でき、七面宮は尾根上の三角点付近の平坦面に置ける。その北東にある基壇状遺構が妙見堂か。この案では、男坂は斜面を直進する道となり、昭和 21 年の航空写真にも見える。山腹を斜上する女坂も同写真に見えるほか、現在も道を確認でき、絵馬「明神山七面参詣図」の表現とも整合する。ところで、天保 9 年（1838）「御巡見使御郡方役懸答書」は、七面宮の位置について「峠茶屋より五福村迄拾五丁七面明神堂山之奥ニ社之有峠茶屋より二丁斗坂ノ下タ鳥居居ハ三丁斗」と記す。東斜面側の「坂ノ下タ鳥居居三丁」（327m）は、案1・2いずれも合致するが、重要なのは西斜面側の「峠茶屋より二丁」（218m）である。この起点について武内氏は峠茶屋村の入口とする（武内 2007b）。峠茶屋村の入口は、中茶屋村との境、現在村境の地蔵がある地点（呉羽山観光協会 2009）となろうが、ここから二丁だと案1の場合の七面宮はもとより、峠にすら達しない。このため起点は峠茶屋村の峠地点（現在の稻荷社に登る階段前付近）とみるべきであろう。この地点で北陸道から分岐して七面宮に向かう山道を二丁とみれば、案2の七面宮の位置はほぼ一致する。

いずれの案が実態に近いか、今後さらなる調査・研究が必要である。

### 4. おわりに

今回の発掘調査では、近世北陸道が呉羽丘陵を越える峠道という要所において、遺構が残存している



第45図 近世後期における明神山・五時谷の復元案  
「礎石建物跡」「基壇状造構」等の加筆した造構は西井ほか2018による

ことがわかり、道路の変遷が明らかになった。また、地名どおりの峠の茶屋の存在を裏付ける多くの陶磁器も出土した。交通・文化面で近世富山の重要な地点であった遺跡周辺における初めての発掘成果であり、その意義は大きい。調査の契機となった呉羽丘陵フットバス連絡橋の整備によって、遺跡周辺は今後訪れる人が増えることが予想される。江戸時代、富山の人々に親しまれ、多くの絵図にも描かれたこの場所は、呉羽丘陵のなかでも豊かな歴史遺産を有するメインスポットのひとつである。今後こうした歴史的環境を活かしていくことが重要であろう。

なお、本書の整理作業中、令和3年度呉羽地区文化祭で職藝学院が製作された七面堂模型が展示されることになり、筆者も展示準備委員会の一人に加えさせていただいた。職藝学院の上野幸夫先生、武内淑子氏、呉羽地区ふるさとづくり推進協議会や呉羽山観光協会の委員の方々との議論やご教示によって本稿にかかわる考えを深めることができた。また、古川知明氏からも有益なご教示を数多くいただき、記して感謝申し上げる。

(野垣)

## 引用・参考文献

- 江戸遺跡研究会 2001『国説江戸考古学研究事典』柏書房  
 大島町教育委員会 2004『水上・本開発遺跡』  
 大野英子 2007『王塚・千坊山遺跡群』同成社  
 大橋康二 1994『古伊万里の文様』理工学社  
 九州近世陶磁学会 2004『九州陶磁の編年』  
 呉羽山観光協会 2009『旧北條街道を歩く』  
 小柴直矩 1913『呉羽山』中田書店  
 新宿区今藤町遺跡調査会 1992『今藤町遺跡』  
 高瀬重雄監修 1994『富山県の地名』平凡社  
 武内淑子 2007a『呉羽山に埋もれた七面堂、宝塔、寺院等の建立地について』富山市日本海文化研究所報 38号  
 武内淑子 2007b『呉羽山の七面堂』  
 谷口製瓦における瓦製作道具調査会 2015『谷口製瓦における瓦製作道具調査報告書』  
 津幡町教育委員会 2010『北国街道併利伽羅峠道』  
 富山県教育委員会 1980『富山県歴史の道調査報告書—北陸街道—』  
 富山県文化振興財團埋蔵文化財調査事務所 2014『小竹貝塚発掘調査報告』  
 富山市教育委員会 1976『富山市古沢・金屋地内古墳概要調査報告書』  
 富山市教育委員会 1984『富山市呉羽丘陵古墳分布調査報告書』  
 富山市教育委員会 1987『長岡杉林遺跡』  
 富山市教育委員会 1999『史跡北代遺跡ふるさと歴史の広場整備事業報告書』  
 富山市教育委員会 2000『向野池遺跡』  
 富山市教育委員会 2001『開ヶ岳中山IV遺跡発掘調査報告書』  
 富山市教育委員会 2003『長岡八町遺跡発掘調査報告書』  
 富山市教育委員会 2004a『北代加茂下III遺跡発掘調査報告書』  
 富山市教育委員会 2004b『打出遺跡発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 2007『企屋南遺跡発掘調査報告書IV』  
 富山市教育委員会 2008a『八町II遺跡発掘調査報告書』  
 富山市教育委員会 2008b『北押川B遺跡発掘調査報告書』  
 富山市教育委員会 2009『百塚住吉遺跡・百塚住吉B遺跡・百塚遺跡発掘調査報告書』  
 富山市教育委員会・富山市路面電車推進室 2009『富山城跡発掘調査報告書』  
 富山市教育委員会 2012『百塚遺跡発掘調査報告書』  
 富山市教育委員会 2015『八ヶ山A遺跡発掘調査報告書』  
 富山市郷土博物館 2011『特別展 街道を歩く』  
 西井龍儀・藤田富士夫 1976『呉羽山丘陵の先土器・縄文時代草創期の遺跡について』『大境』6号 富山考古学会  
 西井龍儀・野垣好史・田上和彦 2018『呉羽丘陵明神山・五時谷付近の遺構調査』『論集富山城研究』2 富山城研究会  
 西井編纂委員会 2002『氷見市史』7 資料編5 考古兵庫埋蔵文化財調査会 1996『日本出土銭鉄銭鑑定』  
 藤井昭二 1994『呉羽丘陵(地形・地質)』『富山大百科事典』北日本新聞社  
 藤井昭二 2000『大地の記憶—富山の自然史—』桂書房  
 堀中町教育委員会 1984『友坂遺跡調査報告書』  
 堀中町教育委員会 1993『友坂遺跡発掘調査報告II』  
 堀中町教育委員会 2002『千坊山遺跡群試掘調査報告書』  
 古川知明 2012『近世北條街道と呉羽丘陵』『富山市民大学呉羽丘陵の考古学 資料』  
 古川知明 2018『七面堂周辺の題目塔群』『論集富山城研究』2 富山城研究会  
 古川知明 2020『呉羽丘陵峠茶屋山越道の検討』『論集富山城研究』3 富山城研究会  
 細辻嘉門 2010『弥生時代前期・中期の遺跡 富山市の遺跡』『大境』第28号 富山考古学会

図版1  
A区遺構(1)



調査前（南から）



調査前（南から）

図版2  
A区遺構(2)



調査前状況（北から）



調査前状況（南から）



調査区遠景（北西から）



調査区遠景（南東から）

図版  
4  
A区遺構  
(4)



調査区全景（北東から）



調査区全景（西から）

図版 5  
A区遺構(5)



調査区全景（北から）



SD01 北部（北東から）



SD06・07（北東から）

図版  
6  
A区遺構  
(6)



砂利敷検出状況（北東から）



SD01 周辺砂利敷検出状況（北東から）



SD01・06 周辺砂利敷検出状況（北から）



調査区北部検出遺構（南から）



調査区南部検出遺構（SD08）（東から）

図版 8  
A区遺構  
(8)



調査区南部検出遺構 (SD04・01・06、SX02) (北東から)



SX02 石列検出状況 (南東から)



調査区北壁断面（南西から）



調査区西壁断面（調査区拡張後・東から）



調査区南壁断面（調査区拡張前・北東から）

図版  
10

A区遺構  
(10)



断割断面（上から断割6北壁西側・断割6北壁東側・断割8北壁・断割9北壁、南から）



断割4 北壁断面（南東から）



下層路面の砂利敷設状況（断割12、東から）

図版  
12

B区遺構  
(1)



調査区全景（北西から）



調査区全景（南東から）



SD11 断面（南から）



SD12（南東から）



近代道路側溝 SD15・14（南から）



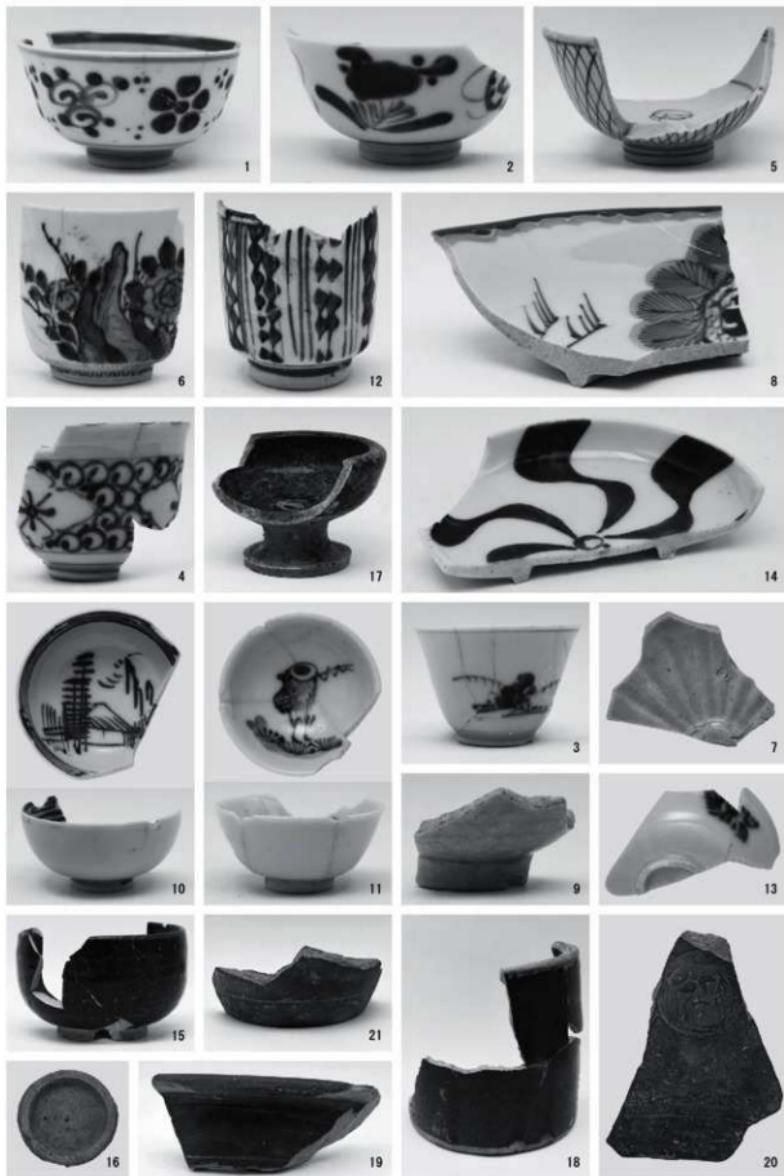
調査前状況（南から）



北壁断面（南から）

圖版  
14

A區遺物  
(1)

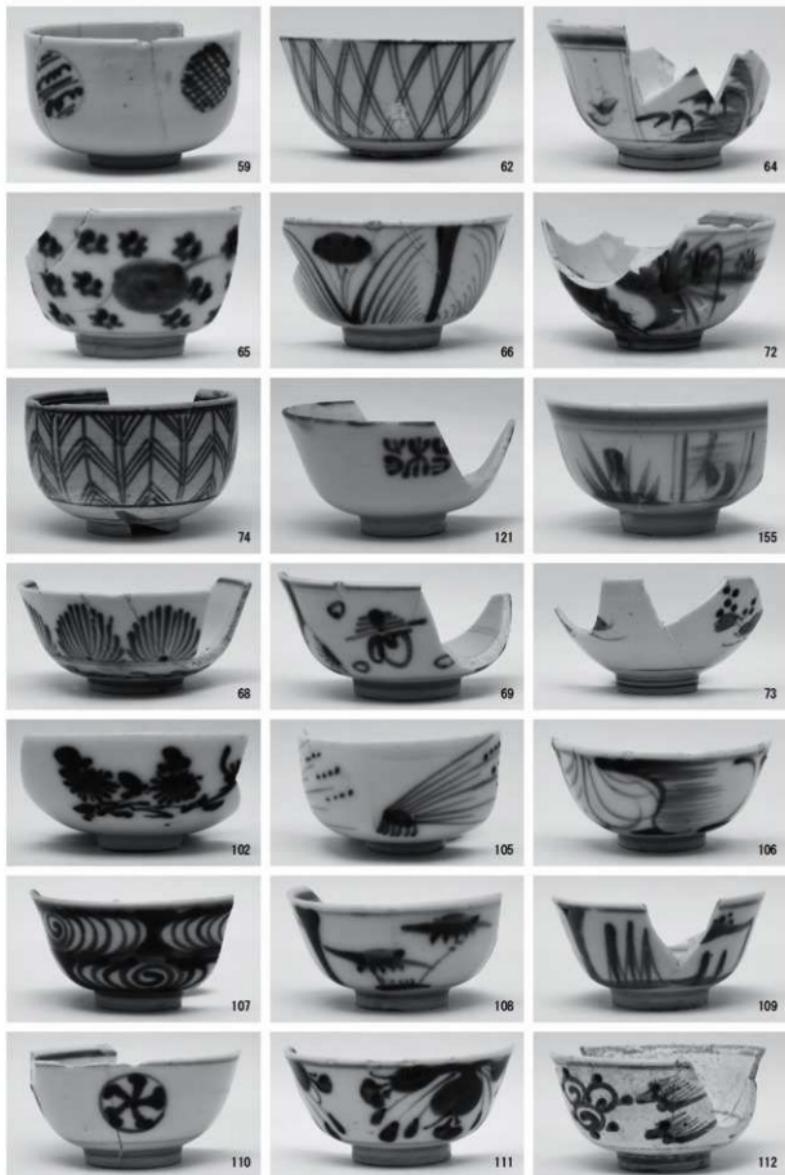


SD01 出土遺物

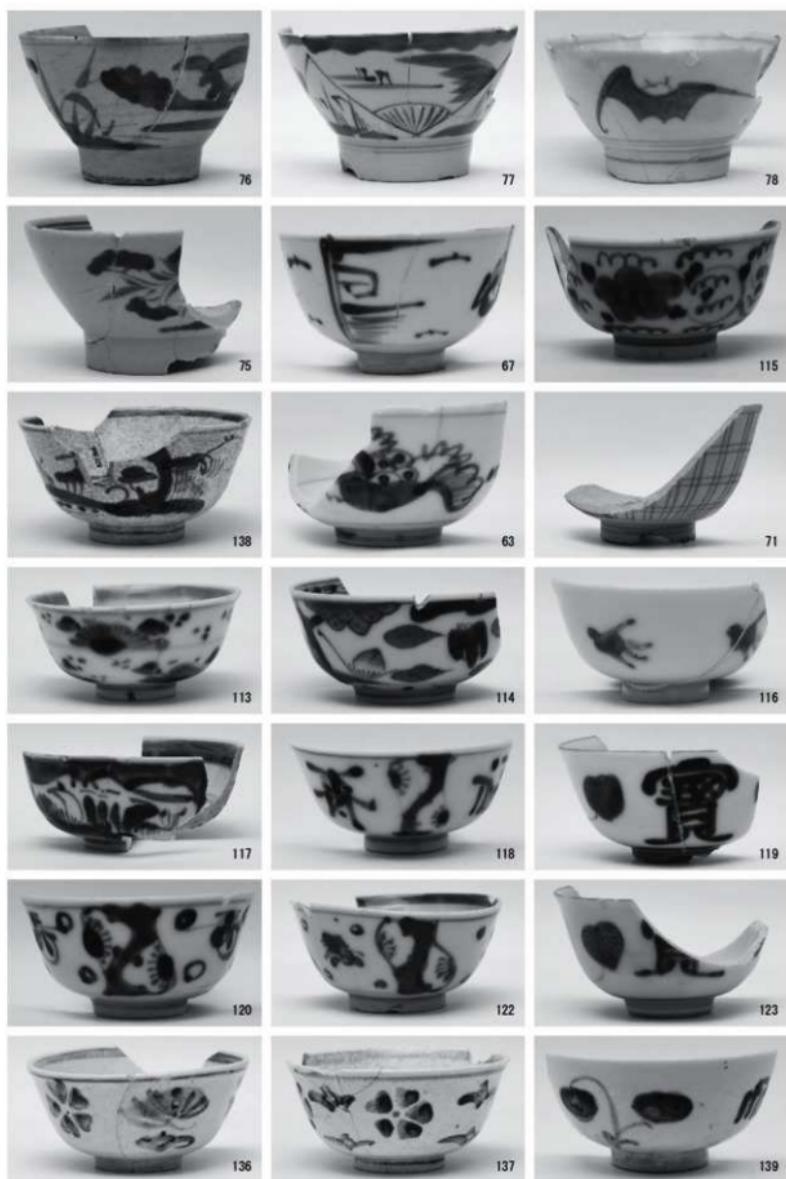


SX02、SD03・04・06・08、道路面・造成土出土遺物

圖版 16  
A 区 遺物 (3)



流土下層出土遺物



流土下層出土遺物

圖版  
18

A區遺物  
(5)



流土下層出土遺物

図版 19  
A区遺物(6)



流土下層出土遺物



流土下層出土遺物

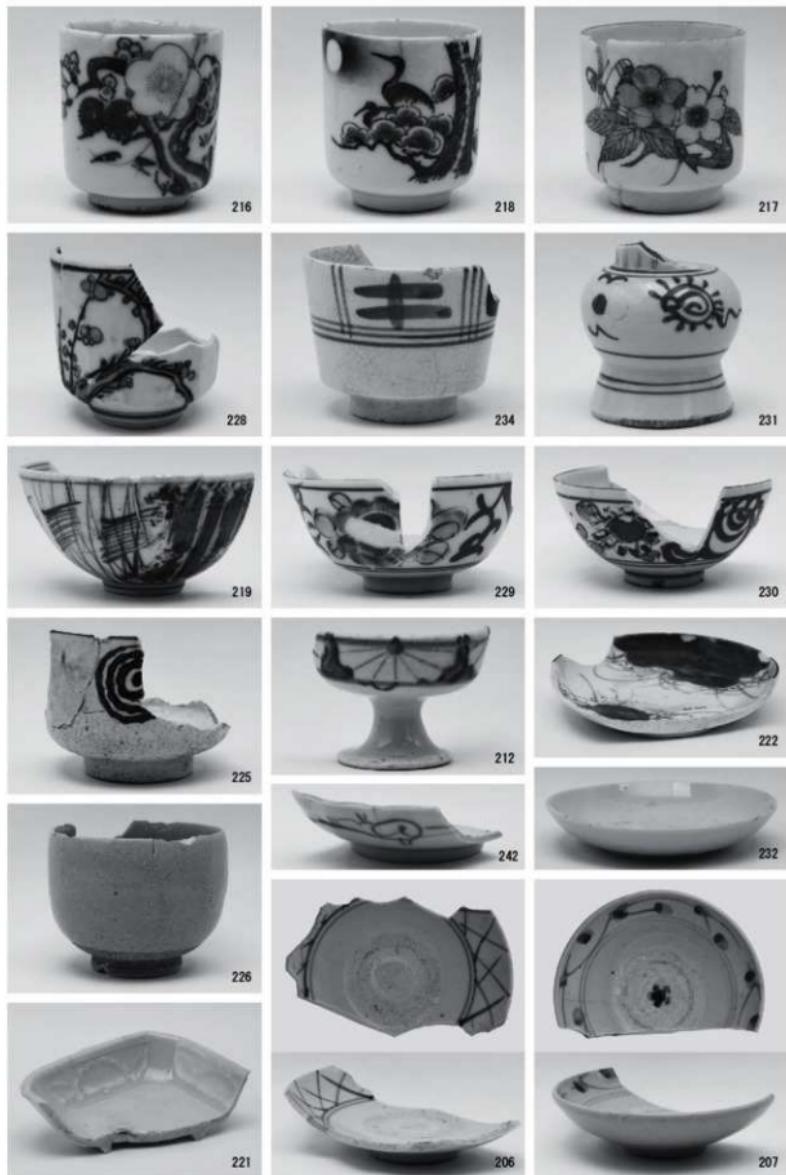
図版 21  
A区遺物(8)



流土下層出土遺物

図版  
22

A区遺物  
(9)



流土上層・表土ほか出土遺物

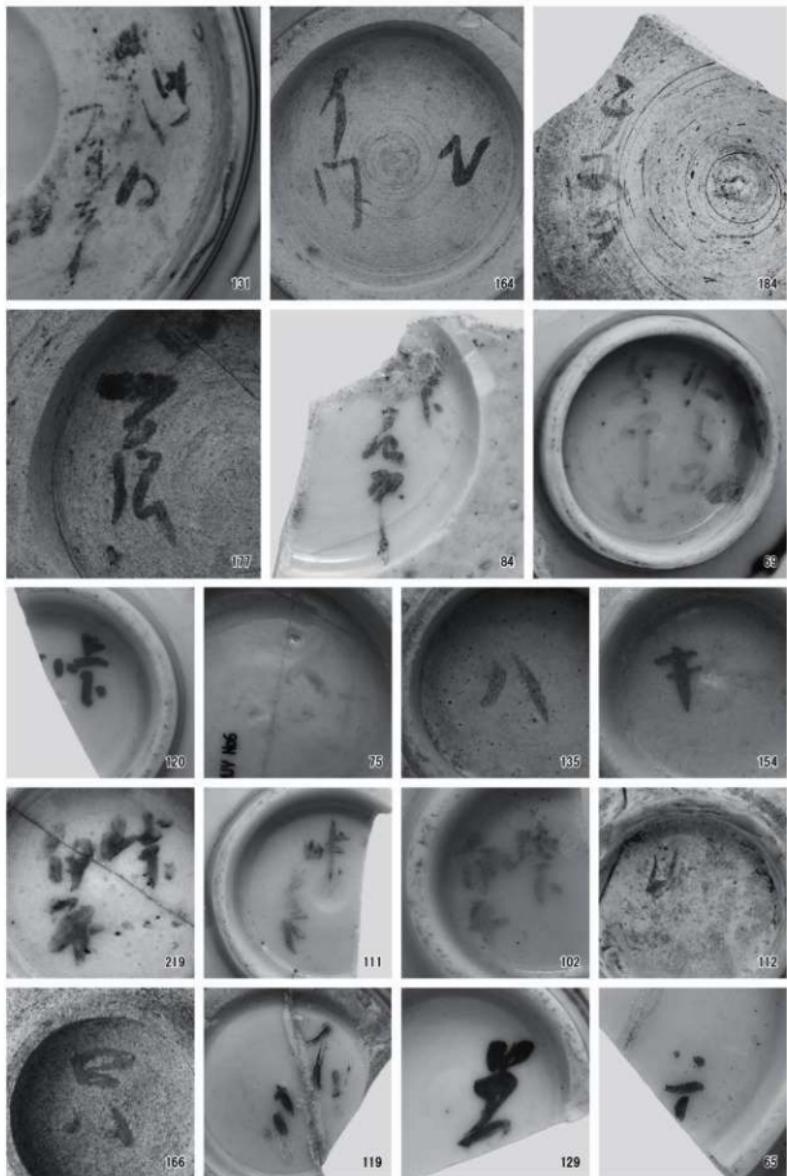
図版23  
A区遺物  
(10)



流土上層・表土ほか出土遺物

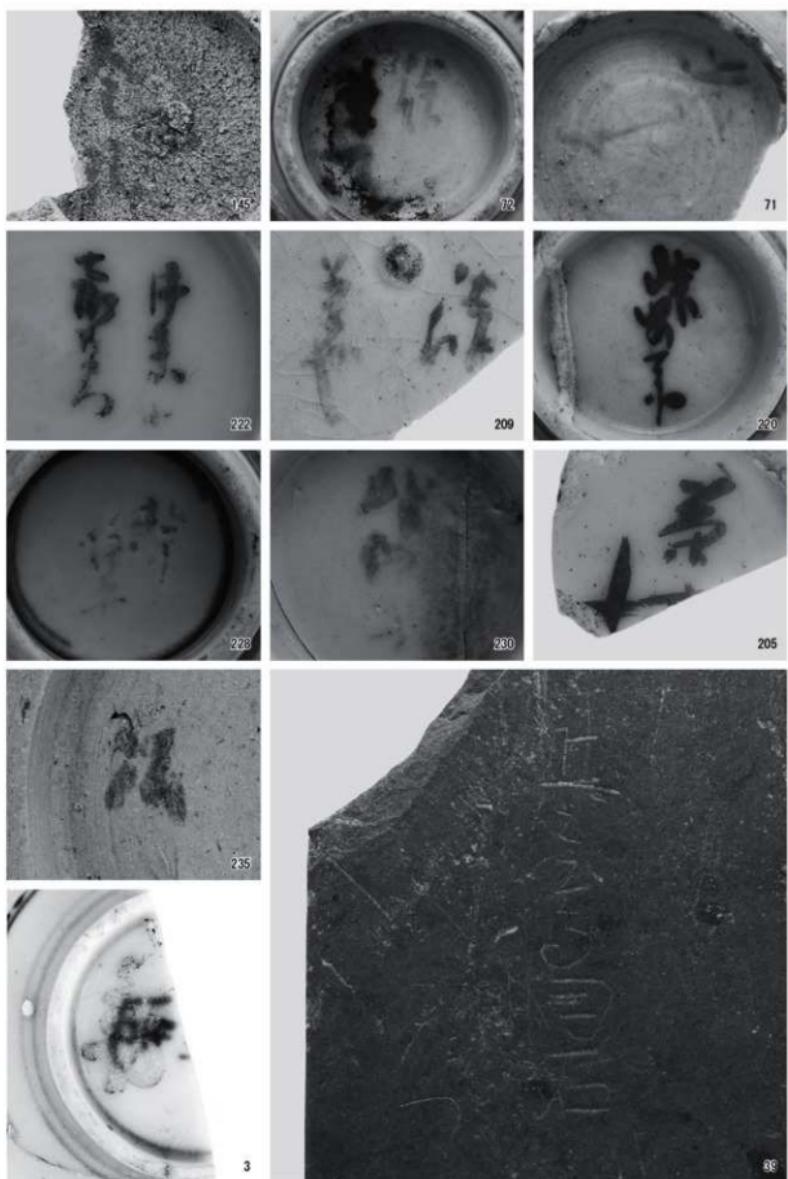
図版  
24

A区遺物  
(11)



文字資料 (1)

図版 25  
A 区 遺物 (12)



文字資料 (2)

圖版  
26  
A 区遺物  
(13)



201



202



200

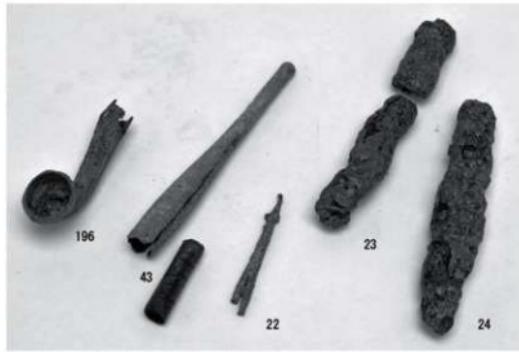
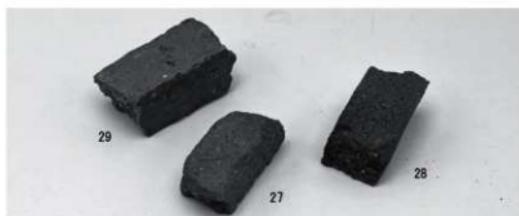


244



203

棧瓦・鬼瓦



軒棟瓦、土製品、石製品、金属製品



267



269



271



273



272



266

249

247



棟瓦



栓ころ・長棒

## 報告書抄録

富山市埋蔵文化財調査報告 107

**富山市明神山遺跡発掘調査報告書**

—真羽丘陵フットバス連絡橋整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告—

2022（令和4）年3月31日発行

編 集 有限会社毛野考古学研究所富山支所

発 行 富山市教育委員会

〒939-2796 富山県富山市婦中町速星754

TEL:076-465-2146 FAX:076-465-5032

E-mail:maizoubunka-01@city.toyama.lg.jp

印 刷 中村印刷工業株式会社